

令和4事業年度に係る業務の実績に関する報告書

令和5年6月



お茶の水女子大学
Ochanomizu University

国立大学法人
お茶の水女子大学

(目次)

○大学の概要		Ⅲ 予算(人件費の見積もりを含む。)、収支計画及び資金計画	p. 98
(1) 現況	p. 3	Ⅵ 短期借入金の限度額	p. 98
(2) 大学の基本的な目標	p. 4	Ⅴ 重要な財産を譲渡し、又は担保に供する計画	p. 98
(3) 機構図	p. 5	Ⅵ 剰余金の使途	p. 99
(4) 全体的な状況	p. 6	Ⅶ その他	
I 教育研究の質の向上に関する事項		(1) 施設・設備に関する計画	p. 99
(1) 社会との共創に関する事項	p. 8	(2) 人事に関する計画	p. 100
(2) 教育に関する事項	p. 21	(3) コンプライアンスに関する計画	p. 101
(3) 研究に関する事項	p. 66	(4) 安全管理に関する計画	p. 104
(4) その他社会との共創、教育、研究に関する重要事項	p. 70	(5) 中期目標期間を超える債務負担	p. 106
Ⅱ 業務運営・財務内容等の状況		(6) 積立金の使途	p. 106
(1) 業務の改善及び効率化に関する事項	p. 76	(7) マイナンバーの普及・促進に関する計画	p. 106
(2) 財務内容の改善に関する事項	p. 84	Ⅷ 前年度までの経営協議会における評価を踏まえて改善・向上 させた取組	p. 108
(3) 教育及び研究並びに組織及び運営の状況について自ら行う点検 及び評価並びに当該状況に係る情報の提供に関する事項	p. 87		
(4) その他業務運営に関する重要事項	p. 93		

○大学の概要 (1) 現況

①大学名	国立大学法人お茶の水女子大学	
②所在地	東京都文京区	
③役員の状況	学長：佐々木 泰子（任期：令和3年4月1日～令和7年3月31日） 理事：5名（常勤4名、非常勤1名）、監事：2名（非常勤2名）	
④学部等の状況	—	
（学部）	文教育学部、理学部、生活科学部	
（研究科）	人間文化創成科学研究科	
（センター等）	<ul style="list-style-type: none"> ○附属図書館 ○保健管理センター ○基幹研究院 ○グローバル女性リーダー育成研究機構 <ul style="list-style-type: none"> ・グローバルリーダーシップ研究所 ・ジェンダー研究所 ・ジェンダード・イノベーション研究所 ○ヒューマンライフイノベーション開発研究機構 <ul style="list-style-type: none"> ・ヒューマンライフサイエンス研究所 ・人間発達教育科学研究所 ○総合知開発研究機構 <ul style="list-style-type: none"> ・コンピテンシー育成開発研究所 ・理系女性育成啓発研究所 ・サイエンス&エデュケーション研究所 ○サステイナブル社会実装機構 <ul style="list-style-type: none"> ・SDGs 推進研究所 ・湾岸生物教育研究所（教育関係共同利用拠点） 	<ul style="list-style-type: none"> ○本部 <ul style="list-style-type: none"> ・教学 IR・教育開発・学修支援センター ・外国語教育センター ・リーディング大学院推進センター ・国際教育センター ・グローバル協力センター ・ソフトマター教育研究センター ・文理融合 AI・データサイエンスセンター ・情報基盤センター ・共通機器センター ・ラジオアイソトープ実験センター ・動物実験施設 ・リエゾン・URA センター ・学生・キャリア支援センター ○お茶大アカデミック・プロダクション
（附属学校等）	附属幼稚園、附属小学校、附属中学校、附属高等学校、いずみナーサリー	
⑤学生及び教職員数 （令和4年5月1日時点）	<ul style="list-style-type: none"> ○学部学生数 2,010 名（うち留学生 13 名） ○研究科学生数 758 名（うち留学生 129 名） ○聴講生・選科生・研究生学生等 102 名（うち留学生 59 名） ○教員数 206 名、職員数 120 名（うち附属学校職員 7 名） 	<ul style="list-style-type: none"> ○附属学校生徒等数 1,469 名（附属幼稚園園児数 154 名、附属小学校児童数 630 名、附属中学校生徒数 317 名、附属高等学校生徒数 368 名） ○附属学校教諭数 88 名

○大学の概要 (2)大学の基本的な目標

(第4期中期目標・中期計画前文)

1. 国立大学法人お茶の水女子大学の基本的な目標及びミッション

国立大学法人お茶の水女子大学は、すべての女性とその年齢・国籍等にかかわらず、個々人の尊厳と権利が保障され、自身の学びを深化させ、自己の資質能力の開発に主体的にチャレンジすることを支援していくため、国立大学法人化にあたって掲げたミッション「学ぶ意欲のあるすべての女性にとって、真摯な夢の実現の場として存在する」を今後とも堅持します。

2. 世界の女子高等教育充実・発展のための貢献

明治8年から長年にわたり国内外で活躍する女性人材を輩出してきた伝統と実績に基づき、世界の人々と協働し、生涯にわたりより良い未来の創造に向けた変革を起こすグローバル女性リーダーの育成に努めます。

3. 総合知を持ち社会を革新する人材の養成

学士課程と大学院博士課程との連携により、教養知と専門知に実践知を結びつけるコンピテンシーを育成し、それらを実装する総合知によって社会を革新する人材を養成するとともに、附属学校園との協働を通じて大学入学前からの総合知育成モデルの探究に努めます。

4. 持続可能な社会実現のためのSDGs研究の推進

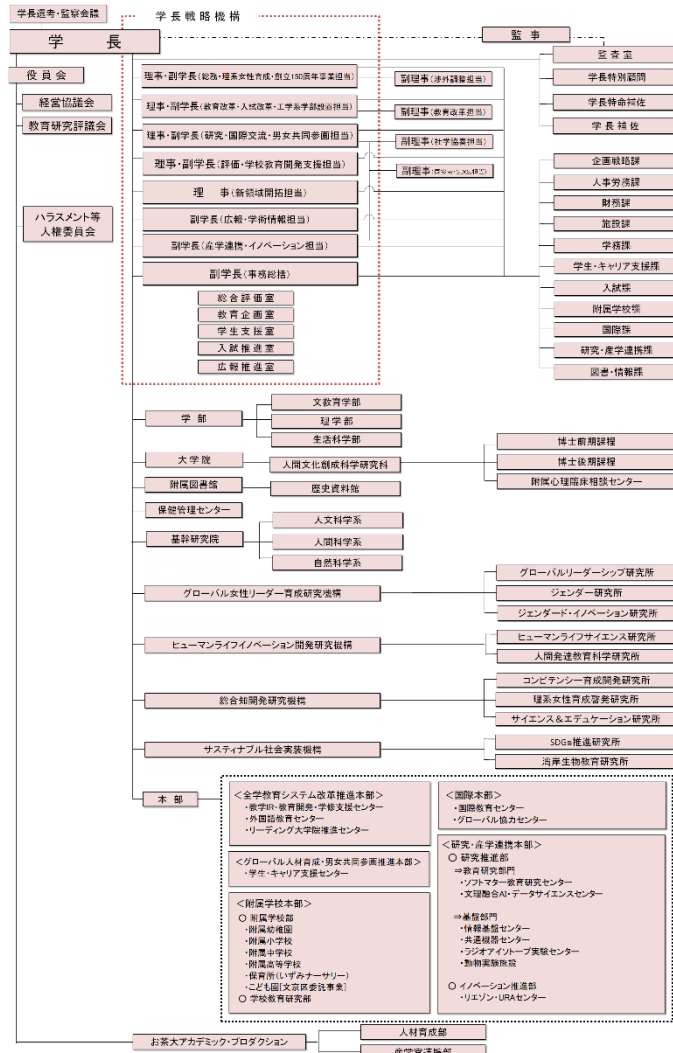
新型感染症拡大、気候変動、資源枯渇、人口動態激変等喫緊の課題の解決策を導き出すため、研究・イノベーション拠点を構築し、文理を越え学問分野を融合した先端的研究を推進することにより、SDGsの理念である「誰一人取り残さない、持続可能な社会の実現」に努めます。

5. 女性が活躍できる社会の実現

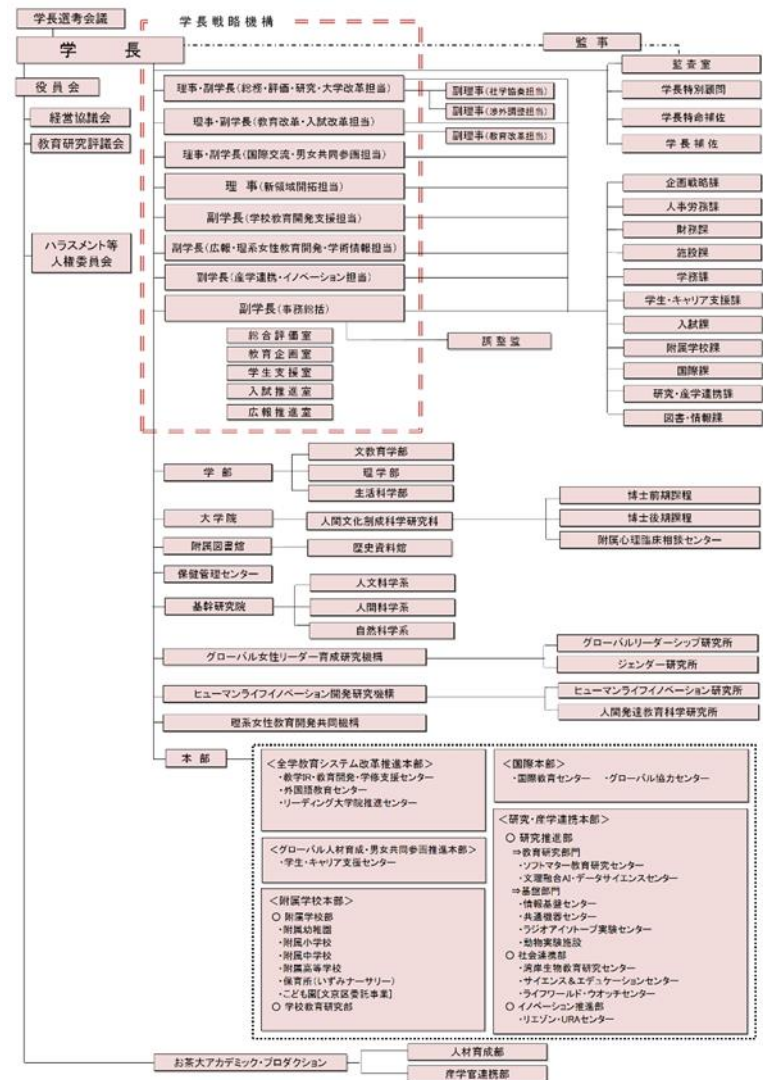
長年にわたるジェンダー及びグローバルリーダーシップに関する研究・教育・実践の蓄積を背景として、日本におけるジェンダード・イノベーション研究の拠点を構築し、その実績を基に、産学官が協働して、ダイバーシティインクルージョン実現のための社会貢献に努めます。

○大学の概要 (3) 機構図

○ 大学組織図 (令和4年度)



○ 大学組織図 (令和3年度)



明治8年(1875年)に日本初の官立の女子高等教育機関として設立され、令和7年(2025年)には創立150周年を迎える本学は、「学ぶ意欲のあるすべての女性にとって、真摯な夢の実現の場として存在する」とのミッションを掲げ、すべての女性とその年齢・国籍等にかかわらず、個々人の尊厳と権利が保障され、自身の学びを深化させ、自己の資質能力を開発させることを支援してきた。

令和4年度から開始した第4期中期目標期間では、このミッションを堅持するとともに、世界の人々と協働し、生涯にわたりより良い未来の創造に向けた変革を起こすグローバル女性リーダーの育成に努め、世界の女子高等教育の充実・発展に貢献する。これらを達成するため「女性が活躍できる社会の実現」「総合知を持ち社会を確信する人材の養成」「持続可能な社会実現のためのSDGs研究の推進」の3つのビジョンを掲げ、本学の強み・特色ある取組を推進する。

1. 社会との共創に関する取組

「女性が活躍できる社会の実現」に向けては、長年にわたるジェンダー及びグローバルリーダーシップに関する研究・教育・実践の蓄積を背景として、日本初のジェンダード・イノベーション研究の拠点を構築し、産学連携の推進によりダイバーシティインクルージョン実現のための社会貢献に寄与することを目指し、令和4年4月にはジェンダード・イノベーション研究所を設置した。6月に実施したキックオフシンポジウムでは、産学官の各界から来賓、講演者、パネリストを招聘し、産学官連携によるジェンダード・イノベーション推進を本学がハブ組織となって主導する姿勢をアピールした。また(株)日立コンサルティングとの共同研究や富士通(株)との社会連携講座が始動するとともにジェンダード・イノベーションに関心を持つ企業が参加する産学交流会(令和5年1月開催:参加企業数21社)を開催するなど、産学連携を積極的に進めている。

さらに「持続可能な社会実現のためのSDGs研究の推進」に向けて、サステイナブル社会実装機構及びSDGs推進研究所を設置した。本組織を中心に、研究・イノベーション拠点を構築し、文理を越え学問分野を融合した先端的研究を推進することにより、SDGsの理念である「誰一人取り残さない、持続可能な社会の実現」に貢献することを目指している。SDGs推進研究所では食とエコシステム、次世代女性人材の育成などの研究を重点的取組としており、令和5年2月に「第1回企業連携OCHA-SDGsコンソーシアム」を開催し、企業5社と次世代SDGsリーダー育成、起業家育成、大学・企業間にて連携した

エコシステムの構築について議論を行うなど産学連携を推進している。またSDGsに関わる人材の育成として、学生を主体とするSDGs推進活動の基盤(SDGs学生委員)を構築し、(株)セブン&アイ・ホールディングス、附属学校園と連携したフードドライブを実施するなど活動を開始した。

2. 教育改革の取組

本学では、文理融合リベラルアーツによる教養教育、複数プログラム選択履修制度による専門教育を通して、教養知・専門知からなる学芸知と実践知のそれぞれを育成してきたが、第4期中期目標期間においては、これまでの実績を基礎に、「総合知を持ち社会を革新する人材の養成」をビジョンに掲げ、教養知と専門知に実践知を結びつけるコンピテンシーを育成し、それらを実装する総合知によって社会を革新する人材を養成するとともに、附属学校園との協働を通して大学入学前からの総合知育成モデルを探求する。令和4年度はビジョン達成に向けて、総合知開発研究機構及びコンピテンシー育成開発研究所を設置し、コンピテンシー測定ツールの開発に向けて、OECDが示しているキー・コンピテンシーのうち批判的思考力など9つの資質を取り上げ、コンピテンシーとして項目作成を行い、大学生への予備調査により、妥当性・信頼性を確認した。また附属学校園との連携によるコンピテンシー育成に関する教材開発を実施し、令和5年度には附属学校園教材・論文データベースに掲載し、広く普及を図る予定である。

令和6年度には現在の3学部体制から4学部体制となることを予定しており、工学と人文・社会科学の知を協働させた共創工学部(仮称)を設置し、工学知を持った女性リーダーを育成する。令和4年度は受験対象者及び企業・関係機関等へのニーズ調査を行うとともに、令和5年3月には設置申請書類を文部科学省に提出した。

教育プログラムの更なる充実に向けては、令和2年度より数理・データサイエンス・AI教育を推進しているが、令和4年度より文部科学省の「数理・データサイエンス・AI教育の全国展開の推進」特定分野校に認定され、履修者数は年々拡大している。また他大学のリソースを活用した教育プログラムの充実も図っており、令和4年11月に中央大学との学生交流に関する協定を、また令和5年1月には東京大学と連携及び協力に関する包括協定を締結した。

3. 研究に関する取組

人間の発達段階に即した心身の健康と生活環境の向上を意図したイノベー

ション実現のために研究を推進してきたヒューマンライフィノベーション開発研究機構は、第4期中期目標期間において「こころ」と「からだ」と「食（食育）」の三面からアプローチを行い、企業・研究機関と連携した実装研究を推進しており、令和4年度の外部資金獲得額は目標額の2倍以上の1.4億円となった。

また研究力の向上に向けては、科研費の採択率向上のために、科研費説明会の開催や科研費メンター制度による支援を実施し、令和4年度の科学研究費助成事業の新規採択率は39.1%（国立大学4位）、女性採択比率は58.7%（国立大学1位）と高い水準を維持した。

研究者の多様性を高め、教育研究活動の活性化のため若手研究者や女性研究者、外国人研究者等の多様な人材を積極的に採用し、令和4年度は全教員に占める女性教員比率は44.8%、教授職に占める女性教員比率についても35.5%と高い水準となっている。また若手教員比率は20.8%となっている。

4. グローバル化への取組

令和4年度はオンラインによる国際交流プログラムを実施しつつ、実渡航による交流や交換留学（派遣・受入）を再開し、夏季短期プログラムとして啓明大学（韓）、梨花女子大学（韓）、マンチェスター大学（英）、ロンドン大学 SOAS（英）、マギル大学（カナダ）、カリフォルニア大学デイビス校（米）等に計35名の学生が参加した他、春季短期プログラムとしてハル大学（英）、開南大学（台湾）に計14名が参加した。

令和4年9月に、大学の世界展開力強化事業（インド太平洋地域等との大学間交流形成支援）に本学の『グローバルリーダー育成のための「女子大学発」実学型 EDI プログラム』が採択され、オーストラリアや英国の協定校とともに本プログラムを通して、ジェンダー視点からの「公平性（Equity）」「多様性（Diversity）」「包摂性（Inclusion）」を目指すグローバルリーダーを育成することとしており、令和5年度開始に向けて準備を進めている。

5. 附属学校園の取組

各附属学校園において、年齢段階に応じた特色ある教育モデルに関する研究・実践を行い、幼稚園、小学校、中学校、高等学校での教育に活用できる教育コンテンツを広く公開している「お茶の水女子大学附属学校園教材・論文データベース」において令和4年度は79件の新規コンテンツを掲載し、データベース総コンテンツ数は前年度比15%増の614件、延べ利用者数も前年度比45%増の2,591名であり、広く活用されている状況であった。

大学と附属学校園が緊密に連携する「オールお茶の水」体制のもとで、附属学校園において、大学より教育実習生102名、インターンシップ生39名を実施するとともに、附属学校園を活用した大学教員のFD研修を4回実施し、FD参加者へのアンケート結果では、大学と附属学校園の連携に関する意識向上及び授業改善に活かすことができたとする割合が86%であった。

6. 社会への発信

第4期中期目標期間は多様なステークホルダーに向けた情報発信がより重要であり、広報活動の方針として、①With コロナ時代の行事の対面再開、②創立150周年への（同窓生等からの）関心の醸成、③多様なステークホルダーへの情報発信、④魅力あるコンテンツへの強化、の4点を進めることとしている。①については、4年ぶりにホームカミングデイを開催、3年ぶりにオープンキャンパスツアーを再開、大学見学（受験希望者と保護者）を再開し、卒業生や受験生が本学キャンパスへの訪問を可能とした。②については令和7年の創立150周年に向けて特設サイトを製作し、150周年のあゆみ等を紹介した。③については新たな産学連携の推進のために民間企業への広報強化として、ビジネス誌の有料広告の掲載を実施した。④については学報「お茶大 GAZZET」のリニューアルを行い、学生、保護者、企業の方々等が興味を引くようデザインを一新した。

7. 業務運営・財務内容等の状況

安定的な財務基盤の確立に向けて、東村山郊外園の土地の一部売却（令和4年4月、売却額約9億円）や、東京都板橋区の国際学生宿舎跡地への定期借地権の設定（令和4年度地代収入2,591万円）等、保有資産の積極的な活用を推進した他、令和7年度に本学が創立150周年を迎えるにあたって記念基金を設立し、募金活動を推進した。また、内閣府「国立大学イノベーション創出環境強化事業」を活用して、多様な民間資金獲得に向けた取組を推進する等した結果、令和4年度の本学自己収入（寄附金収入、受託研究等収入、その他収入の合計）は、21.3億円/年（目標額12.5億円）となった。

女性の視点を取り入れた法人運営・法人経営を推進するため、女性の役職者登用を積極的に進め、女性役職者比率は44.7%（目標値35%）となっている。また次世代の女性管理職育成のため、学長や理事を補佐する役職（学長補佐、副理事）を設置し、4名の女性教員が登用された。

I 教育研究の質の向上に関する事項
(1) 社会との共創に関する事項

中期目標	<p>【M1】我が国の持続的な発展を志向し、目指すべき社会を見据えつつ、創出される膨大な知的資産が有する潜在的可能性を見極め、その価値を社会に対して積極的に発信することで社会からの人的・財政的投資を呼び込み、教育研究を高度化する好循環システムを構築する。(中期目標大綱③) ⇒ 関連する中期計画：【K1】 【K2】 【K3】</p> <p>【M2】アジア・アフリカ等の途上国女子教育の充実をはじめ、多くの国の女性たちの多様な活躍を支援し、平和な社会の構築と文化の発展に貢献する。(独自) ⇒ 関連する中期計画：【K4】</p>
------	---

※各年次計画の「総合評価室自己評価結果」は、以下の三段階の区分によって判定を行っています。

【iii】達成水準を大きく上回っている 【ii】達成水準を満たしている 【i】達成水準を満たしていない

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p><中期計画【K1】></p> <p>○ 「ジェンダー研究所」及び「グローバルリーダーシップ研究所」において、第3期中期目標期間より継続して実施するジェンダー及びリーダーシップに関する教育・研究の成果を産学官との連携を通じて更に広く社会に発信する。また、これまでの多くの分野の成果をジェンダー視点から見直し、解析を行い、全ての人の生活向上に寄与する新たなイノベーションの創出を目指す。そのため、「グローバル女性リーダー育成研究機構」に「ジェンダード・イノベーション研究所」を設置し、理工学及び生活科学的視点を含めた研究・教育を行い、未来の製品「モノ」やサービス「コト」を検討・開発・提案して、その成果を社会に発信することで人的・財政的投資を呼び込み、PDCA サイクルを構築する。さらに、同機構を拠点として、国内外の機関との連携を図り、研究者を招聘するとともに、研究成果を、シンポジウム等の開催、ウェブサイトやメディア等の多様な媒体を通じて発信・共有し、外部意見を取り入れる好循環システムを構築する。</p> <p><評価指標【S1-1】></p> <p>○ ジェンダード・イノベーション研究所において第4期中期目標期間最終年度までの研究機関・民間企業等との共同研究・プロジェクト数：6件以上実施、論文数：20本以上発表、知的財産権を2件以上申請、起業支援：2件以上実施、及び研究成果を教育へ導入。</p> <p><評価指標【S1-2】></p> <p>○ ジェンダー研究所及びグローバルリーダーシップ研究所において研究機関・民間企業等との共同研究・プロジェクトを毎年度5件以上実施、国内外から研究者を毎年度10名以上招聘、シンポジウム、ワークショップ、セミナー等を毎年度8件以上実施、論文を第4期中期目標期間最終年度までに60本以上発表。</p>	<p><令和4年次計画【1-1】の実施状況></p> <p>(1) キックオフシンポジウムの開催と情報発信</p>
<p><令和4年次計画【1-1】></p> <p>○ ジェンダード・イノベーション研究所 (IGI) の運</p>	

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p>営を開始し、キックオフシンポジウムを開催する。また、学内外の研究者と連携し、ジェンダー視点からの新たなイノベーションの創出を目指した共同プロジェクトを検討する。さらに、未来の製品やサービスに関して企業・政府機関・大学等とのハブ組織となることを目指し、IGI に関する PR 活動を推進する。</p>	<p>性差に基づくイノベーションの創出を目指して設置されたジェンダード・イノベーション研究所が 6 月に開催したキックオフシンポジウム（534 名参加）では、産学官の各界から来賓、講演者、パネリストを招聘し、産学官連携によるジェンダード・イノベーション推進を本学がハブ組織となって主導する姿勢をアピールした。また 9 月に開催した国際カンファレンス（326 名参加）には、ジェンダード・イノベーションの提唱者であるスタンフォード大学のロンダ・シービンガー教授を含む海外の研究者 3 名を招聘し、国際的なジェンダード・イノベーション研究の最新情報とその理解を深めるための学術的な議論を発信した。これらのイベントの反響は大きく、メディアからの取材依頼も多くあった。加えて『日経 BP』への広告記事の掲載や文部科学省「情報ひろば」への特別展示出展、研究所のウェブサイト開設、パンフレット作成、ウェブマガジンの発刊など、研究所事業活動の情報発信を積極的に進めた。</p> <p>(2) 共同研究・プロジェクトの推進と産学連携</p> <p>共同研究・プロジェクトの推進については、内閣府「国立大学イノベーション創出環境強化事業」の事業経費をもとに 8 件のジェンダード・イノベーション研究を進めた。また産学連携による共同研究も積極的に進め、(株)日立コンサルティングとの共同研究が令和 4 年 7 月に、富士通(株)との社会連携講座の契約締結による共同研究が令和 5 年 3 月に始動した。</p> <p>産学連携については、ジェンダード・イノベーションに関心を持つ企業が参加する産学交流会を 4 回実施し、次年度のコンソーシアム設立に向けたネットワーキングを進めている。また令和 5 年 2 月にはジェンダード・イノベーションの概念に基づいた社会課題解決の取組について検討を進めてきた三井不動産(株)と「産学連携の推進に関する包括的連携協力に係る協定」を締結した。</p>
<p>評価指標に関する目標値・達成水準【1-1】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ IGI における①共同研究・プロジェクト数、②知的財産権申請件数、③論文数、④起業支援数、⑤研究成果の教育への導入に関する取組：IGI の設置に伴い、研究等を行うための体制整備を実施。 	<p>評価指標に関する達成状況【1-1】</p> <ul style="list-style-type: none"> ①共同研究・プロジェクト数：10 件 ②知的財産権申請件数：0 件 ③論文数：1 本 ④起業支援数：0 件



※産学交流会の様子
参加企業数 21 社 (R5.1 開催実績)


中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
	<p data-bbox="898 229 2056 352">⑤研究成果の教育への導入：海外招聘研究者や学内研究者を講師とする学内セミナーを5回開催した他、令和5年度開始予定の授業科目「アントレプレナーシップ演習」について、教育体制が整備されたため、令和4年10月から開講した。</p> <p data-bbox="898 395 2056 564">令和4年次総合評価室自己評価結果【1-1】：【iii】達成水準を大きく上回っている (判定理由・補足等)：初年度より産学連携を進め、共同研究・プロジェクト数が計画より大きく伸びたこと、企業との連携強化を促進するため、キックオフシンポジウムを開催したこと、及び前倒しで授業科目を開講したため、自己評価結果を【iii】と判定した。</p>
<p data-bbox="165 667 510 699"><令和4年次計画【1-2】></p> <p data-bbox="165 707 837 1050">○ ジェンダー研究所 (IGS) / グローバルリーダーシップ研究所 (IGL) において、共同研究等を推進するとともに、両研究所の研究領域に関わる研究者を国内外から招聘すること、論文執筆により、機能強化を図る。また、リーダーシップやジェンダー平等に関する両研究所の合同国際シンポジウム・セミナー等を開催する。さらに、ノルウェー科学技術大学との共同教育プログラムを強化するためのセミナーを実施する。</p>	<p data-bbox="869 667 1346 699"><令和4年次計画【1-2】の実施状況></p> <p data-bbox="880 707 1144 738">(1) 共同研究の推進</p> <p data-bbox="891 746 2078 818">ジェンダー研究を中心に、「『東アジアにおけるジェンダーと政治』研究」などの国際共同研究や国内他機関との共同研究を進めており、12件の共同研究・プロジェクトが進行している。</p> <p data-bbox="880 863 1778 895">(2) 女性リーダーに関する国際シンポジウム、女性学長サミットの開催</p> <p data-bbox="891 903 2078 1286">IGS/IGL 両研究所が合同で主催する国際シンポジウムを2件開催した。うち国際シンポジウム「『ガラスの崖』をよじ登る：『ガラスの天井』の先にあるもうひとつの見えない壁」では、オーストラリア及びスウェーデンより組織心理学、社会学に関する著名な女性研究者を2名招聘し、女性活躍のための課題と戦略について議論を交わした。また令和5年2月に「女性学長サミット『私たちの歩んだ道、歩む道-女性リーダーシップの新時代を拓く』」を開催し、7名(1名ビデオ出演)の本学出身の現役学長(恵泉女学園大学、昭和女子大学、東京家政学院大学、東京外国語大学、東洋大学、同志社大学、本学)を招き、新時代における女性リーダーに望ましい特性などについて議論が交わされた。</p> <div data-bbox="1711 979 2040 1198" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="1733 1222 2011 1286">※本学出身の女性学長サミット登壇者</p> <p data-bbox="880 1331 1391 1362">(3) 女性リーダー育成のための国際連携</p> <p data-bbox="891 1370 2078 1442">ノルウェー科学技術大学 (NTNU) と令和4年6月に双方の学生の研究交流を目的としたオンライン学生フォーラムを開催した。また令和5年2月には NTNU と共同教育プログラムの強化を目</p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p style="text-align: center;">評価指標に関する目標値・達成水準【1-2】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ IGS 及び IGL において、次のとおり成果を挙げる。 ①共同研究・プロジェクト数：5 件 ②研究者の招聘数：10 名 ③シンポジウム・ワークショップ・セミナー等開催数（IGL・IGS 合同シンポジウム：1 件、IGS が発行する学術誌『ジェンダー研究』の特集企画のためのシンポジウムを含む）：8 件 ④論文数：10 本 	<p>的にノルウェー高等教育・技能局で公募している国際オンライン教育 COIL 実施のための教職員研修プログラム「ノルウェー「Panorama」バーチャルエクステンジ/COIL パートナーシップ・イニシアチブ」に応募し採択された。</p> <p style="text-align: center;">評価指標に関する達成状況【1-2】</p> <ul style="list-style-type: none"> ①共同研究・プロジェクト数：12 件 ②研究者の招聘数：20 名 ③シンポジウム・ワークショップ・セミナー等開催数：19 件 ④論文数：14 本 <p style="text-align: center;">令和 4 年次総合評価室自己評価結果【1-2】：【iii】達成水準を大きく上回っている （判定理由・補足等）：すべての評価指標で目標の数値を大きく超えたため、自己評価結果を【iii】と判定した。</p>
<p><中期計画【K2】></p> <p>○ 超高齢化社会における医療保険制度を維持するには、疾患治療だけでなく、フレイル*ないし未病時における対策が必須であることから、身体的、心理的、社会的な要因への注視が重要である。そこで、第 4 期中期目標期間においては、「こころ」と「からだ」と「食（食育を含む）」の三面からアプローチすることにより、革新的な健康イノベーションを促進する。そのために本学において蓄積の豊かなこれらの分野のリソースを集結し、今後望まれる健康長寿社会の実現及び持続可能な社会・環境を形成するエコシステム創出に資するため、「ヒューマンライフイノベーション開発研究機構」を再編し、企業・研究機関等と連携して、先端研究拠点を形成するとともに、知的財産の創出や実用的なアウトカムを目指した実装研究を推進する。</p> <p>※「フレイル」＝加齢に伴う予備能力低下のため、ストレスに対する回復力が低下した状態。</p> <p><評価指標【S2-1】></p> <p>○ ヒューマンライフイノベーション開発研究機構における研究機関・民間企業等との共同研究・プロジェクト数と外部資金獲得額について、第 3 期中期目標期間の平均と比較し、1.2 倍（30 件/年・6 千万円/年）。</p>	
<p><令和 4 年次計画【2-1】></p> <p>○ ヒューマンライフイノベーション開発研究機構を</p>	<p><令和 4 年次計画【2-1】の実施状況></p> <p>（1）研究成果の発信</p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p>再編し、こころとからだの健康に関するシンポジウムを開催する。超高齢化社会に対応できる「こころ（人間発達教育科学研究所）とからだ（ヒューマンライフサイエンス研究所）の健康」を増進維持するために、令和4年度から「食」に焦点を当て、ヒューマンライフサイエンス研究所と人間発達教育科学研究所が連携した研究を推進する。さらに、企業・研究機関と連携して実用的なアウトカムを目指した実装研究を進める。</p> <div data-bbox="185 783 826 1011" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>評価指標に関する目標値・達成水準【2-1】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ヒューマンライフイノベーション開発研究機構において、次のとおり成果を挙げる。 ①共同研究・プロジェクト数：30件 ②外部資金獲得額：6千万円 </div>	<p>令和4年11月に、当機構が「健康で心豊かな『人生』を科学するーこころとからだー」と題したシンポジウム（195名参加）を、東北大学大隅典子副学長を招聘して開催し、両研究所で連携した研究の推進及び研究成果の社会実装を目指す機構の姿勢を内外にアピールした。</p> <p>(2) 「食」に焦点を当てた連携融合研究、社会実装に向けた研究の推進</p> <p>令和4年度より「食」に焦点を当てた連携融合研究として「“食行動”が脳、特に神経障害や認知機能障害に及ぼす影響を明らかにする研究」を開始し、得られた生物学的な知見を心理学的な調査研究に応用することに挑戦している。</p> <p>研究成果の社会実装を目指し、企業や研究機関、省庁との共同研究・プロジェクトが積極的に行われており、内閣府「国立大学イノベーション創出環境強化事業」の事業経費を活用し、ヒューマンライフサイエンス研究所では、収量性・耐病性に優れた食物の作出を目指した研究を、人間発達教育科学研究所では緑内障治療・予防アドヒアランスをサポートするイネーブラー技術の開発と実証を目指した研究を企業と他の国立大学とともに進めている。</p> <div data-bbox="889 783 2056 951" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>評価指標に関する達成状況【2-1】</p> <ul style="list-style-type: none"> ①共同研究・プロジェクト数：33件 ②外部資金獲得額：141,493,503円 </div> <div data-bbox="889 991 2056 1126" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>令和4年次総合評価室自己評価結果【2-1】：【ii】達成水準を満たしている （判定理由・補足等）：外部資金獲得額については2倍以上の結果であったが、共同研究・プロジェクト数については目標数と同程度であるため、自己評価結果を【ii】と判定した。</p> </div>
<p><中期計画【K3】></p> <p>○ 持続可能な社会の創成には、社会全体でSDGsの達成を推し進めることが必要であり、そのために行動できる人材の養成が急務であることから、SDGs教育・研究プログラムを企画・実行していくための組織「サステナブル社会実装機構」を新設する。本機構の「SDGs推進研究所」では、特に食やジェンダーに関するSDGsに向けた社会実装型研究を推進し、民間企業等と協奏するとともに、SDGsネットワーク・ハブとしての機能を持ち、エコシステムを創出しつつ社会変革を駆動する。また、ステークホルダーと新しい価値を共創することで持続可能な社会・レジリエンスの高い社会の実現に貢献しうる好循環システムを構築し、持続的な活動を推進する。「湾岸生物教育研究所」では、SDG14のゴールである「海の豊かさを守ろう」の重要性について啓</p>	

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p>発するための教育関係共同利用拠点としての取組を継続するとともに、潮間帯から深海までの幅広い環境に生息する動植物の発生、進化、生態、保全にかかわる研究を推進する。</p> <p><評価指標【S3-1】></p> <p>○ 第4期中期目標期間から「THE 大学インパクトランキング」にエントリーし、ランキングのうち、「SDG 5 ジェンダー平等を実現しよう」において、第4期中期目標期間最終年度までに600位以内を獲得。</p> <p><評価指標【S3-2】></p> <p>○ 学内のSDGs認知度調査を継続的にアンケート方式で行い、SDGs達成に向けた学生/教職員の参画意識が第4期中期目標期間初年度と比較して最終年度で向上。</p> <p><評価指標【S3-3】></p> <p>○ SDGs推進研究所において第4期中期目標期間最終年度までの研究機関・民間企業等との共同研究・プロジェクト数を12件以上実施、外部資金獲得額を3千万円以上獲得、知的財産権を3件以上申請、SDGsに関する学内教育状況をウェブサイト等を通じて毎年度発信、並びに、SDGsに関する学内教育の実践評価を第4期中期目標期間最終年度までに実施し、評価結果を発信。</p> <p><評価指標【S3-4】></p> <p>○ 湾岸生物教育研究所において大学に応じたオーダーメイド型臨海実習を年間平均6回(80名)以上実施、公開臨海実習の開催を年間平均14大学(20名)以上実施、高校生などを対象とした実習・イベントの開催を年間平均10回(250名)以上実施、海産バイオリソースの提供を年間平均100校・機関(10,000名)以上実施。</p> <p><評価指標【S3-5】></p> <p>○ 湾岸生物教育研究所において海洋生物関係に関する論文を年間平均10本以上執筆、学会での発表を年間平均10件以上実施、国際シンポジウムを開催。</p>	
<p><令和4年次計画【3-1】></p> <p>○ SDGsを本学の重要事項と位置づけ、多様なステークホルダーの意見を通して、本学が取り組むSDGsへの貢献を目指すため、サステナブル社会実装機構及び同機構の下にSDGs推進研究所を設置するとともに、「サステナビリティ戦略諮問会議(仮称)」を設置してSDGsに関する全体構想を検討し、大学としてのSDGs戦略決定に貢献する。また、学内情報を集約しTHEインパクトランキングへのエントリーを行う。</p>	<p><令和4年次計画【3-1】の実施状況></p> <p>(1) SDGs推進のための新組織の設置</p> <p>持続可能な社会を創成すべく、SDGsに向けた教育及び研究活動を実施し、SDGs達成を推進する多様な人材を養成することを目的にサステナブル社会実装機構及びSDGs推進研究所を設置した。</p> <p>本学のSDGsに関する全体構想を検討する「サステナビリティ戦略諮問会議(仮称)」の設置については、構想の検討や規則制定のための準備を進め、令和5年度に設置することとした。また「生活科学を中心に他分野の研究者との協働」「生活者起点でのSDGs研究・社会連携」「大学と附属学校園が一体となった推進活動」をSDGs推進研究所の戦略として策定した。</p> <p>(2) THEインパクトランキングへのエントリー</p> <p>令和4年11月に初めてTHEインパクトランキングへのエントリーを行った。「SDG3:健康と</p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p data-bbox="188 628 826 778"> 評価指標に関する目標値・達成水準【3-1】 ・「THE 大学インパクトランキング」へのエントリーを行う。 </p>	<p data-bbox="891 225 2078 568"> 福祉」 「SDG 4：質の高い教育」 「SDG 5：ジェンダーの平等」 「SDG17：目標達成のためのパートナーシップ」の4つにエントリーを行い、そのための指標の分析・情報収集を行った。特に SDG 4と5の指標「肉親の中で自身が大学進学したのが初めてであると報告する学生数」については OchaMail を通じて学生アンケートを実施した。 令和5年6月に公表されたランキング結果において、本学の総合順位は「1001+位（全体 1,705 大学エントリー）」となった。ゴール別の順位では、SDG 3は「801-1000 位（全体 1,218 大学エントリー）」、SDG 4は「1001+位（全体 1,304 大学エントリー）」、SDG 5は「201-300 位（全体 1,081 大学エントリー）」、SDG17は「1001+位（全体エントリー1.625 大学）」にそれぞれランクインした。なお、SDG 5については、国内の大学で第1位となる成果を上げた。 </p> <p data-bbox="891 628 2056 815"> 評価指標に関する達成状況【3-1】 ・「THE 大学インパクトランキング」へのエントリー：「SDG 5：ジェンダーの平等」において「201-300 位（全体 1,081 大学エントリー、国内の大学では第1位）」にランクインした。 </p> <p data-bbox="891 858 2056 1066"> 令和4年次総合評価室自己評価結果【3-1】：【iii】達成水準を大きく上回っている （判定理由・補足等）：予定通り「THE インパクトランキング」へのエントリーを行い、「第4期中期目標期間最終年度（令和9年度）までに SDG 5の順位：600 位以内を獲得する」という評価指標【S3-1】における目標を、第4期中期目標期間初年度（令和4年度）で達成（201-301 位）することができたため、自己評価結果を【Ⅲ】と判定した。 </p>
<p data-bbox="165 1171 837 1433"> <令和4年次計画【3-2】> ○ 新設するサステイナブル社会実装機構及びSDGs推進研究所の教育研究体制を整備し、持続可能な社会の創成のために貢献できる技術の研究開発、および社会実装とこれらを強く推進していくことができる高度人材の育成を、同一キャンパスにある附属学校園と協働で行う。また、SDGsに関わる人材育成の一 </p>	<p data-bbox="869 1171 2078 1433"> <令和4年次計画【3-2】の実施状況> （1）教育研究体制の整備 SDGs 推進研究所を設置し、特任教授をはじめスタッフの採用、SDGs に関する包括的連携協力を締結している日本工営（株）より客員研究員等を受け入れるなど活動実施体制を構築した。また当研究所のホームページの作成、Twitter、インスタグラムによる情報発信体制を整備した。 （2）SDGsに関わる人材の育成 </p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p>環として学生の視点を取り入れた広報、キャンパス環境整備、SDGs 実践活動に取り組む。本学の SDGs に関する取組の成果として学内の意識向上を図るため、学内の SDGs 認知度調査を行う。</p> <div data-bbox="185 903 826 1051" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>評価指標に関する目標値・達成水準【3-2】</p> <ul style="list-style-type: none"> SDGs 認知度調査：SDGs 認知度調査の実施及び令和4年度調査結果の取りまとめ </div>	<p>SDGs に関わる人材育成の一環として、SDGs 学生委員の募集と委員長の選出を行い、学生を主体とする SDGs 推進活動の基盤を構築し、活動を開始した。また（株）セブン&アイ・ホールディングスと SDGs に関する包括的連携協力に関する協定を令和4年9月に締結し、協定による SDGs 実践活動の1つとして、附属学校園、大学、企業とでフードドライブを同時実施し、3日間で1,337個（約212kg）の食品が寄付された。実施後には附属教員を交えた学生委員の振り返りにより新たな気づきと課題が共有された。</p> <p style="text-align: right;">※フードドライブ実施のポスター</p>  <p>SDGs に関する実践的な取組として、三菱 UFJ 環境財団による寄附講座を開講した。生活者の視点から考える環境を扱う科目を新設（「生活と環境」「海洋環境と生物多様性」「環境問題と社会」）し、SDGs を実現するための環境教育の強化を図った。</p> <p>(3) SDGs 認知度調査の実施</p> <p>第1回 SDGs 認知度調査を学生委員と共に企画し、先行研究調査及びアンケートに必要な調査項目の作成を行った。調査については令和5年2月より開始し、令和5年3月末時点までの中間結果について取りまとめをしたが、今回は学生のみを対象とした調査であったため次年度以降は教職員を含めた調査を行う予定としている。</p> <div data-bbox="891 903 2056 1091" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>評価指標に関する達成状況【3-2】</p> <ul style="list-style-type: none"> SDGs 認知度調査：SDGs 認知度調査を令和5年2月に実施し、令和5年3月末時点の調査結果について取りまとめたが、評価指標で掲げている「学生/教職員の参画意識」に関する調査は行っていない。 </div> <div data-bbox="891 1134 2056 1345" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>令和4年次総合評価室自己評価結果【3-2】：【i】達成水準を満たしていない</p> <p>（判定理由・補足等）：SDGs 認知度調査は実施したが、評価指標で掲げている「SDGs 達成に向けた学生/教職員の参画意識」に関する調査ではないため、自己評価結果を【i】と判定した。</p> <p>なお、前述のとおり、令和5年度以降は教職員を含めた調査を行う予定としている。</p> </div>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p>＜令和4年次計画【3-3】＞</p> <p>○ SDGs 推進研究所の新設に伴いキックオフシンポジウムを開催し、本学の SDGs に関する教育・研究、社会貢献等に関する構想について社会に発信する。また、同研究所において、食とエコシステム (SDG 2、3、11、12)、次世代女性人材の育成などの研究を重点的取組として推進する。</p> <div data-bbox="185 821 826 1090" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>評価指標に関する目標値・達成水準【3-3】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・SDGs 推進研究所において、次のとおり成果を挙げる。 <ul style="list-style-type: none"> ①共同研究・プロジェクト数：1 件 ②外部資金獲得金額：2 百万円 ・SDGs 関連：教育情報のウェブサイト等の発信。 </div>	<p>＜令和4年次計画【3-3】の実施状況＞</p> <p>(1) キックオフシンポジウムの開催</p> <p>SDGs 推進研究所設置記念キックオフシンポジウムをハイブリッド方式で開催し、本学の特色である「生活者起点で実現する SDGs」について広く社会に発信した。後援は消費者庁、文部科学省、経済産業省とし、参加者は会場 117 名、オンライン 259 名であった。産学官の各界から来賓、講演者、パネリストを招聘し、学外に本学の取組を発信するとともに、学内外のステークホルダーとのパートナーシップ作りに取り組んだ。</p> <p>(2) 「企業連携 OCHA-SDGs コンソーシアム」の開催</p> <p>食とエコシステム (SDG 2、3、11、12)、次世代女性人材の育成などの研究を重点的取組として推進するためには企業との連携が重要であり、令和5年2月に「第1回企業連携 OCHA-SDGs コンソーシアム」を開催した。本コンソーシアムには5社が参加し、参加企業からの話題提供に基づいて情報交換を行い、大学がハブとなった SDGs の達成や、次世代人材育成、起業家育成、大学・企業間にて連携したエコシステムの構築について議論をした。</p> <div data-bbox="889 821 2056 1125" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>評価指標に関する達成状況【3-3】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・SDGs 推進研究所における「①共同研究・プロジェクト数」：2 件 ・SDGs 推進研究所における「②外部資金獲得額」：3,510,000 円 ・SDGs 関連の教育情報のウェブサイト等の発信：学内ホームページのほか、東京都情報発信プラットフォーム、文教ニュース、President Online (12 月末掲載)、国連大学 SDGs プラットフォームへの参加などにより発信した。 </div> <div data-bbox="889 1161 2056 1295" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>令和4年次総合評価室自己評価結果【3-3】：【ii】達成水準を満たしている</p> <p>(判定理由・補足等)：すべての評価指標を上回っているため、自己評価結果を【ii】と判定した。</p> </div>
<p>＜令和4年次計画【3-4】＞</p> <p>○ 従来実施してきた大学や高等学校などの実習内容</p>	<p>＜令和4年次計画【3-4】の実施状況＞</p> <p>(1) 大学・高校への海洋教育実習、海産バイオリソースの提供</p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p>を精査し、「海の豊かさを守ろう」の SDGs の理念の啓発にもつながる教育内容を検討する。各大学や中学校・高等学校などの実習を受け入れるとともに、全国の大学生・院生を対象にした公開臨海実習を国内外の大学研究機関と協力して実施する。さらには、高校生対象の公募実習をリモート形式も活用して行う。海産生物の特徴を活かした生物材料として、海産バイオリソースを全国の大学などの授業実習や、小中高等学校などの体験活動へ提供する。</p> <div data-bbox="185 783 826 1206" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>評価指標に関する目標値・達成水準【3-4】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 湾岸生物教育研究所において、次のとおり成果を挙げる。 ① オーダーメイド型臨海実習の実施：6回／80名 ② 公開臨海実習の実施：14大学／20名 ③ 高校生等対象の実習・イベントの開催：9回／225名 ④ 海産バイオリソースの提供：100校／10,000名 </div>	<p>海の生物について分類や形態の基礎から海洋酸性化やマイクロプラスチックなどの環境問題まで幅広いコンテンツを用意し、利用する大学や高校などの希望に応じたオーダーメイド型の臨海実習を実施するとともに、高校生対象のリモート実習を実施した。特に令和4年5月に実施したリモート実習は東北から九州までの遠方の学校を対象に実施した。</p> <p>ウニ等の海産バイオリソースの提供については、大学においてはコロナ禍で実習が実施できないなどで減少していたが、利用が回復し、新規の利用大学への提供も行った。また高校などへの提供は一般へも対象を広げ、オンラインを活用した指導研修も行った。</p> <p>(2) 国内外の大学研究機関との連携</p> <p>令和4年9月の公開臨海実習「海洋生物の多様性と棘皮動物の発生物学」ではブラウン大学(米国)より研究者を招聘し、研究の最先端を体験する国際的な実習を実施した。また令和5年2月・3月には国立科学博物館と共催して「海の自然史学的研究」についての内容で公開臨海実習を実施した。</p> <div data-bbox="889 783 2056 1177" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>評価指標に関する達成状況【3-4】</p> <ul style="list-style-type: none"> ① オーダーメイド型臨海実習の実施：9大学に対し、計11回の臨海実習を実施。受講学生は129名(延べ422名)。 ② 公開臨海実習の実施：夏季に1回、春季に2回実施。さらに春季に公開臨海実習体験型リモートワークショップを実施。14大学32名が受講。 ③ 高校生等対象の実習・イベントの開催：12回実施。309名(延べ519名)が参加。 ④ 海産バイオリソースの提供：大学へは30大学・45授業(実習)の1,424名分、中高へは195校、16,707名へ提供。 </div> <div data-bbox="889 1222 2056 1353" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>令和4年次総合評価室自己評価結果【3-4】：【ii】達成水準を満たしている (判定理由・補足等)：全ての評価指標の目標値を達成したため、自己評価結果を【ii】と判定した。</p> </div>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p data-bbox="163 228 510 256"><令和4年次計画【3-5】></p> <p data-bbox="163 268 837 646">○ 湾岸生物教育研究所周辺で大きく変化している海洋の環境について、周辺海域の生物相の調査を継続し、研究所員による動植物の発生、進化、生態、保全にかかわる研究を推進する。また、天然の資源が減少し採集で十分な量を入力できなくなっている実験生物種について、養殖などで提供する体制を目指す（サステナブルな海産バイオリソース）。さらに海産生物の特徴を実験に最大限に活かせるような利用方法を検討する。令和6年度に予定している国際シンポジウムを企画立案する。</p> <div data-bbox="188 863 826 1166" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p data-bbox="199 874 725 903">評価指標に関する目標値・達成水準【3-5】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li data-bbox="210 930 815 999">・湾岸生物教育研究所において、次のとおり成果を挙げる。 <li data-bbox="210 1010 427 1038">①論文数：10本 <li data-bbox="210 1050 483 1078">②学会発表数：10件 <li data-bbox="210 1090 815 1158">③国際シンポジウム開催：国際シンポジウム（令和6年度開催予定）の企画立案を実施 </div>	<p data-bbox="862 228 1346 256"><令和4年次計画【3-5】の実施状況></p> <p data-bbox="862 268 1196 296">(1) 海洋環境研究の推進</p> <p data-bbox="891 308 2078 413">船や水中ドローンの使用や潜水により周辺海域の生物相を調査し、造礁サンゴ群体などの変化を記録した。また新種の甲殻類の記載やサンゴの変遷や幼生定着、温度や光環境の海藻への影響やその保全についての研究成果が論文や学会で発表された。</p> <p data-bbox="862 464 1413 493">(2) サステナブルな海産バイオリソース</p> <p data-bbox="891 504 2078 609">採集量が減少している実験生物種について、実験材料を供給するためにウニやナメクジウオなどの採卵から飼育までの方法を改善しながら進めており、学内外に提供したバフンウニは、その半分程度は養殖したものである。</p> <p data-bbox="862 660 1391 689">(3) 国際シンポジウム開催に向けた取組</p> <p data-bbox="891 700 2078 805">令和6年度に予定している国際シンポジウムについて、大学院生程度を対象にしてテーマ内容や講演者の候補を検討するとともに、リモート実習を発展させたワークショップの検討も進めた。</p> <div data-bbox="891 863 2056 1161" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p data-bbox="902 874 1317 903">評価指標に関する達成状況【3-5】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li data-bbox="902 930 1104 959">①論文数：14本 <li data-bbox="902 986 1160 1015">②学会発表数：21件 <li data-bbox="902 1042 2045 1150">③国際シンポジウム開催：大学院生程度を対象に、海洋酸性化、造礁サンゴ、新しい保全技術などをテーマに、オンラインによる複数のセミナーにリモートのワークショップも加えた案を検討している。 </div> <div data-bbox="891 1206 2056 1337" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p data-bbox="902 1217 1861 1246">令和4年次総合評価室自己評価結果【3-5】：【ii】達成水準を満たしている</p> <p data-bbox="902 1257 2045 1323">(判定理由・補足等)：すべての評価指標の目標を達成したため、自己評価結果を【ii】と判定した。</p> </div>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p><中期計画【K4】></p> <p>○ 開発途上国の女子教育に関する支援事業及び女子教育の発展に関わる事業を実施するため、平成 14 年度からアフガニスタン女子教育支援を開始し、平成 18 年度には途上国女子教育支援へと拡大して、アジア・アフリカの教育者・行政官への専門的知識、研究能力を向上させるための研修・教育について、独立行政法人国際協力機構（JICA）等と連携して実施してきた。第 4 期中期目標期間においても、引き続き国際社会における様々な立場の女性への支援を行い、平和な社会の構築と文化の発展に貢献する。</p> <p><評価指標【S4-1】></p> <p>○ 途上国への教育支援において第 4 期中期目標期間最終年度までに、アジア・アフリカの教育者・行政官等に対する研修の受講者数が 55 名以上、及び教育支援を受けた学生や教員の母国・他国での活動状況に関する調査を毎年度実施。</p>	
<p><令和 4 年次計画【4-1】></p> <p>○ JICA 課題別研修「乳幼児ケアと就学前教育（アフリカ・中東）」等、既存スキームの活用を継続しつつ、開発途上国の女子教育に関する研修を実施する。また、途上国協定校・機関の教育者・行政官等に対し、女性の活躍に資する新たな研修の可能性を検討する。</p>	<p><令和 4 年次計画【4-1】の実施状況></p> <p>(1) 開発途上国の女子教育研修の実施と新たな研修の検討</p> <p>アジア・アフリカの教育者・行政官等が専門的知識、実務能力、研究能力を向上させる取組として以下を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・令和 4 年 11 月から約 1 か月、JICA 課題別研修「乳幼児ケアと就学前教育（アフリカ・中東）」としてイラク、エジプト、マラウイ、マダガスカル、シエラレオネから研修員を受入れ、乳幼児教育に関するオンライン研修を実施（11 名受講（うちオブザーバー 4 名））し、同分野における人材育成に貢献した。 ・「JST アフガニスタン未来への架け橋・中核人材プロジェクト（PEACE）」の研修員 2 名の特別活動支援として、学内のアフガニスタン人留学生ネットワークの構築、アフガニスタンに興味関心を有する学生との交流の機会の提供を行った。 ・「JST 国際青少年サイエンス交流事業（さくらサイエンスプログラム）」や「JICA 草の根技術協力事業」等を通じた新たな研修の可能性についてグローバル協力センター内で検討を行った。 <p>(2) アフガニスタン女子教育支援 20 周年</p> <p>本学は 2002 年に津田塾大学、東京女子大学、奈良女子大学、日本女子大学とともに五女子大学コンソーシアムを形成し、令和 4 年で 20 年を迎えたことから 11 月にコンソーシアム協定の更新を行うとともに、アフガニスタン女子教育支援 20 周年記念公開シンポジウム「紛争地域の女子教育支援を通じた国際協力活動のあり方」を開催した。シンポジウムではこれまでの取組の紹介に加え、五女子大学の学生による国際協力活動報告及び</p> <div data-bbox="1742 1142 2040 1342" data-label="Image"> </div> <p>アフガニスタン女性教育支援 20 周年記念公開シンポジウムにおける学生によるパネルディスカッションの様子</p>


中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<div data-bbox="185 512 826 777" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>評価指標に関する目標値・達成水準【4-1】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アジア・アフリカの教育者・行政官等に対する研修の受講者数：9名 ・支援を受けた学生・教育者・行政官等の活動状況に関する調査：活動状況に関する調査方法を検討し、調査を実施。 </div>	<p>パネルディスカッションが行われた。</p> <p>(3) 国際協力に関する実践的な知識とスキル習得機会の提供</p> <p>貧困と不平等、教育、ジェンダー、平和をはじめとする SDGs、地球規模課題に関する理解を深め、国際協力に関する実践的な知識とスキルを習得する機会として、公開講演会・セミナーを開催した。「SDGs セミナー」を8回、「2022年度ブータン連続セミナー」を20回開催した。</p> <div data-bbox="889 512 2056 873" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>評価指標に関する達成状況【4-1】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アジア・アフリカの教育者・行政官等に対する研修の受講者数：11名（オブザーバー4名含む） ・支援を受けた学生・教育者・行政官等の活動状況に関する調査：研修の受講者のその後の活動状況に関して、令和4年度研修期間中に過去の受講者とコンタクトを取り、状況を聴取するなど調査を実施した。今年度は「JICA 課題別研修：乳幼児ケアと就学前教育（アフリカ・中東）」への過去の参加者から2名（マラウイ、エジプト）を選定し、受講した研修内容を現地でいかに活用しているかについて報告を依頼し、現地情報を得た。 </div> <div data-bbox="889 914 2056 1007" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>令和4年次総合評価室自己評価結果【4-1】：【ii】達成水準を満たしている （判定理由・補足等）：評価指標を達成したため、自己評価結果を【ii】と判定した。</p> </div>

I 教育研究の質の向上に関する事項 (2) 教育に関する事項

中期 目標	<p>【M3】国や社会、それを取り巻く国際社会の変化に応じて、求められる人材を育成するため、柔軟かつ機動的に教育プログラムや教育研究組織の改編・整備を推進することにより、需要と供給のマッチングを図る。(中期目標大綱④) ⇒ 関連する中期計画：【K5】 【K6】 【K7】 【K8】 【K9】</p> <p>【M4】特定の専攻分野を通じて課題を設定して探究するという基本的な思考の枠組みを身に付けさせるとともに、視野を広げるために他分野の知見にも触れることで、幅広い教養も身に付けた人材を養成する。(学士課程) (中期目標大綱⑥) ⇒ 関連する中期計画：【K10】 【K11】</p> <p>【M5】研究者養成の第一段階として必要な研究能力を備えた人材を養成する。高度の専門的な職業を担う人材を育成する課程においては、産業界等の社会で必要とされる実践的な能力を備えた人材を養成する。(修士課程) (中期目標大綱⑦) ⇒ 関連する中期計画：【K12】</p> <p>【M6】深い専門性の涵養や、異なる分野の研究者との協働等を通じて、研究者としての幅広い素養を身に付けさせるとともに、独立した研究者として自らの意思で研究を遂行できる能力を育成することで、アカデミアのみならず産業界等、社会の多様な方面で求められ、活躍できる人材を養成する。(博士課程) (中期目標大綱⑧) ⇒ 関連する中期計画：【K13】</p> <p>【M7】データ駆動型社会への移行など産業界や地域社会等の変化に応じて、社会人向けの新たな教育プログラムを機動的に構築し、数理・データサイエンス・AI など新たなリテラシーを身に付けた人材や、既存知識をリバイズした付加価値のある人材を養成することで、社会人のキャリアアップを支援する。(中期目標大綱⑩) ⇒ 関連する中期計画：【K14】</p> <p>【M8】学生の海外派遣の拡大や、優秀な留学生の獲得と卒業・修了後のネットワーク化、海外の大学と連携した国際的な教育プログラムの提供等により、異なる価値観に触れ、国際感覚を持った人材を養成する。(中期目標大綱⑫) ⇒ 関連する中期計画：【K15】 【K16】</p> <p>【M9】様々なバックグラウンドを有する人材との交流により学生の視野や思考を広げるため、性別や国籍、年齢や障害の有無等の観点から学生の多様性を高めるとともに、学生が安心して学べる環境を提供する。(中期目標大綱⑬) ⇒ 関連する中期計画：【K17】</p>
----------	--

※各年次計画の「総合評価室自己評価結果」は、以下の三段階の区分によって判定を行っています。

【iii】達成水準を大きく上回っている 【ii】達成水準を満たしている 【i】達成水準を満たしていない

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果				
<p>＜中期計画【K5】＞</p> <p>○ 社会の変革には教養知と専門知に実践知を結びつけた「総合知」を備えた人材が必須である。そこで「総合知」を獲得するための「コンピテンシー※」を戦略的に育成する「総合知開発研究機構」を新設し、機構の下に3つの研究所を設置する。「コンピテンシー育成開発研究所」は、「コンピテンシー」と育成方法を明らかにしつつ、備えた人材を学部において実践的に養成する。そのためのコンピテンシーを測定するツールの整備、それを使った測定、その結果を踏まえた効果的な教育手法の開発・実践・効果検証のサイクルを回し、有用なコンピテンシー育成のツールと教育手法を開発し提案しながら、国や社会、それを取り巻く国際社会が求めるコンピテンシーや総合知を備えた人材養成に努める。また、附属学校園と連携し、コンピテンシー育成を柱とする幼児期から大学卒業までの段階的教育モデルの開発・実践・発信に取り組む。さらに、コンピテンシー育成の観点に基づき、「理系女性育成啓発研究所」では初等中等教育における女性の理系進路選択の促進、附属学校園との連携による理系人材育成プログラムの開発を、「サイエンス&エデュケーション研究所」では災害時レジリエンス教育を地域の小中高校の児童・生徒と教員に対して実施する。</p> <p>※「コンピテンシー」＝課題を発見し知識やスキルを状況に応じて組み合わせるなどして社会の場で成果をあげる包括的能力とその行動特性</p> <p>＜評価指標【S5-1】＞</p> <p>○ コンピテンシー育成開発研究所において、コンピテンシー測定ツールを令和5年度までに開発、教育手法や効果及び教育モデル等に関する年次報告（シンポジウム等）を令和6年度以降毎年度行う。コンピテンシー測定ツールや他者評定によって計測されるコンピテンシーの値が、教育手法開始時点の測定結果と比較して第4期中期目標期間最終年度において上昇。</p> <p>＜評価指標【S5-2】＞</p> <p>○ 理系女性育成啓発研究所が行う全国の女子中高生、保護者、教員を対象とした理系女性育成のために開催するシンポジウム・セミナーへの参加者数が800名以上/年（第4期中期目標期間の平均）、及びアンケート調査結果において理工系分野への関心が70%以上（第4期中期目標期間の平均）。</p> <p>＜評価指標【S5-3】＞</p> <p>○ サイエンス&エデュケーション研究所が行う災害時におけるレジリエンス教育と地方自治体等との連携において、第4期中期目標期間の平均として、理数教育の実践数を自治体25件以上/年、学校：105校以上/年実施、及び開発コンテンツ（理科教材データベース掲載）のダウンロード件数：540件以上/年。</p>	<p>＜令和4年次計画【5-1】の実施状況＞</p> <p>（1）コンピテンシー測定ツールの開発</p> <p>令和4年4月に設置したコンピテンシー育成開発研究所では、令和5年度までにコンピテンシー測定ツールを開発することを目標に、OECDが2030年に向けた新たなコンピテンシー（Education2030）として更新したキー・コンピテンシーのうち、批判的思考力など9つの資質をとりあげ、項目作成を行った。これまで大学生を対象とした予備調査により27項目を選定し、本調査・再調査にて信頼・妥当性を確認した。またコンピテンシーの教員評価の項目についても大学生対象のものを、論文等を参考にして検討した。</p>				
<p>＜令和4年次計画【5-1】＞</p> <p>○ 「総合知開発研究機構」及び「コンピテンシー育成開発研究所」を設立し、新規教職員の雇用のほか、専任教員の再配置など学内資源の再配分を実施する。また、本学におけるこれまでのコンピテンシー研究の蓄積を踏まえ、児童・生徒・学生等の一般的コンピテンシーを測定するツールの開発研究を開始するとともに、附属学校園との連携により、伝統芸能教育やコンピテンシー育成に関する教材開発を開始する。</p>	 <table border="1" data-bbox="1742 1187 2033 1453"> <tr> <td data-bbox="1756 1187 1895 1321"> 本研究所が 取扱う コンピテンシー </td> <td data-bbox="1899 1187 2024 1321"> 対立やジレンマ への対処 <ul style="list-style-type: none"> ・他者理解力 ・問題解決力 ・対人調整解決力 </td> </tr> <tr> <td data-bbox="1756 1324 1895 1453"> 新たな価値の 創造 <ul style="list-style-type: none"> ・批判的思考力 ・協働力 ・創造的思考力 </td> <td data-bbox="1899 1324 2024 1453"> 責任ある行動 <ul style="list-style-type: none"> ・省察的思考力 ・自己制御力 ・内的統制感 </td> </tr> </table>	本研究所が 取扱う コンピテンシー	対立やジレンマ への対処 <ul style="list-style-type: none"> ・他者理解力 ・問題解決力 ・対人調整解決力 	新たな価値の 創造 <ul style="list-style-type: none"> ・批判的思考力 ・協働力 ・創造的思考力 	責任ある行動 <ul style="list-style-type: none"> ・省察的思考力 ・自己制御力 ・内的統制感
本研究所が 取扱う コンピテンシー	対立やジレンマ への対処 <ul style="list-style-type: none"> ・他者理解力 ・問題解決力 ・対人調整解決力 				
新たな価値の 創造 <ul style="list-style-type: none"> ・批判的思考力 ・協働力 ・創造的思考力 	責任ある行動 <ul style="list-style-type: none"> ・省察的思考力 ・自己制御力 ・内的統制感 				

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p data-bbox="197 874 824 906">評価指標に関する目標値・達成水準【5-1】</p> <p data-bbox="197 930 824 1002">・コンピテンシー測定ツール：コンピテンシー測定ツールの開発を開始。</p>	<p data-bbox="882 228 2080 531">(2) 附属学校園との連携によるコンピテンシー育成に関する教材開発 附属学校園の教員を対象に開発テーマの公募を行い、7件採択し教材開発支援を開始した。開発された教材並びに指導案等は、令和5年度中に各校園主催の研究会や関連学会等で発表後、附属学校園教材・論文データベースに掲載し、広く普及を図る予定である。 加えて教材開発に資する基礎研究を進めるために、附属学校園連携研究テーマ別部会における令和4年度の共通テーマを「幼稚園段階から大学段階までの間に『学びに向かう力』を喚起し、維持し、さらに高めるためにどのようにすればよいか」と定めた。10のテーマ別部会で検討を進め、進捗状況を令和4年度中に取りまとめ、ウェブサイトにて公開した。</p> <p data-bbox="882 579 2080 802">(3) 伝統芸能教育に関する教材開発の開始 令和4年8月に歌舞伎の演技と小道具製作を体験する「歌舞伎ワークショップ」（参加者60名）を開催した。本学附属小学生から大学生まで幅広い年代が参加したが、事後アンケートでは5段階評価の5（最高評価）が100%で、歌舞伎に興味を持ち劇場に行ったという感想が多数寄せられた。若い世代が伝統芸能に関心をもつためには、実際に体験することが重要であることが浮かび上がり、今後の教材開発の手がかりを得られた。</p> <p data-bbox="898 874 2056 906">評価指標に関する達成状況【5-1】</p> <p data-bbox="898 930 2056 1002">・コンピテンシー測定ツール：項目作成、調査、データ分析を行い、大学生用の定点観測のための測定ツールを完成した。</p> <p data-bbox="898 1066 2056 1177">令和4年次総合評価室自己評価結果【5-1】：【ii】達成水準を満たしている (判定理由・補足等)：令和4年度は「コンピテンシー測定ツールの開発を開始」を目標としていたが、一部測定ツールが開発できたため、自己評価結果を【ii】と判定した。</p>
<p data-bbox="165 1289 833 1439"><令和4年次計画【5-2】> ○ 理系女性育成啓発研究所において、第3期中期目標期間に行ってきた全国的女子中高生・保護者・教員を対象とするシンポジウム・セミナーの内容を精</p>	<p data-bbox="864 1289 2076 1439"><令和4年次計画【5-2】の実施状況> (1) 理系女性育成啓発に効果的な取組の分析 理系女性育成啓発のために効果的な取組を精査するために、取組への参加者アンケートの分析を行うとともに、コンピテンシー育成の観点を初等中等教育における女性の理系進路選択の促進</p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p>査し、理系女性育成啓発に効果的な取組を検討するとともに、理系女性ロールモデル講演会を初めとする、理系女性育成啓発のためのシンポジウム・セミナーを開催する。さらに、附属学校園と連携したセミナーや理系人材育成プログラムの開発方法について検討を行う。</p> <div data-bbox="185 821 826 1206" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>評価指標に関する目標値・達成水準【5-2】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・理系女性啓発研究所において、次のとおり成果を挙げる。 <ul style="list-style-type: none"> ①理系女性育成のためのシンポジウム・セミナーの参加者数：800名 ②アンケート調査結果における理工系分野への関心：70% ・理系人材育成プログラムの開発：理系人材育成プログラムの開発方法の検討。 </div>	<p>につなげるための調査として、本学学部生を対象とした「大学への進路選択に関する学内調査」のアンケートを行い、コンピテンシーを考えるための進路選択の現況を分析した。</p> <p>(2) 理系女性育成啓発のためのシンポジウム・セミナー開催</p> <p>令和4年度は、女子中高生と保護者を対象とした「リケジョ未来シンポジウム」や「先端科学セミナー」「教員・保護者向け講演会」など15種類28件のシンポジウム・セミナーを開催し、1,522名が参加した。各回において参加者へアンケートを実施し、理工系分野への関心が高まったという割合は95%に上り、各取組が本研究所の使命である「女子生徒の理系への進路選択の促進」に寄与しているとうかがえる。</p> <p>(3) 附属学校園との連携</p> <p>附属中学校及び附属高等学校と連携して、企業見学会を実施（3回）し、イノベーションを支える産業やSDGsの達成に挑むプログラムへの理解促進が図られた。また附属幼稚園保護者を対象に保護者がサイエンスに親しむ機会を提供することを目的に「サイエンス研修会」を実施した。</p> <div data-bbox="889 821 2056 1206" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>評価指標に関する達成状況【5-2】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・理系女性育成啓発研究所における「①理系女性育成のためのシンポジウム・セミナーの参加者数」：1,522名 ・理系女性育成啓発研究所における「②アンケート調査結果における理工系分野への関心」：95%（内訳 高まった：72%、やや高まった：23%）。アンケート回収率（平均）51.4% ・理系人材育成プログラムの開発：情報系のプログラムを1件開発・公開。また附属学校生徒への東日本製鉄所見学会及び企業とのワークショップの実施を行い、取組の有効性を検討した。 </div> <div data-bbox="889 1241 2056 1414" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>令和4年次総合評価室自己評価結果【5-2】：【iii】達成水準を大きく上回っている</p> <p>（判定理由・補足等）：「シンポジウム・セミナーの参加者数」及び「アンケート調査結果における理工系分野への関心の高さの割合」が目標値より大きく高い数値であるため、自己評価結果を【iii】と判定した。</p> </div>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p>＜令和4年次計画【5-3】＞</p> <p>○ サイエンス&エデュケーション研究所では、災害時におけるレジリエンス教育と地方自治体等との連携において、対面及びオンライン授業コンテンツの開発を行い、理数教育の実践的な教育研究を展開する。また、開発コンテンツを Web 上の理科教材データベースに掲載して活用を広げる。さらに、第3期中期目標期間の「新たな災害時に途切れない教育システムの開発と検証」事業等において連携してきた自治体・団体と継続した事業を推進する。加えて、これまで連携してきた日本財団や企業とも連携して深く教育研究を展開する。以上の成果を学校のみならず一般市民を対象とした公開講座等を通じて普及展開する。</p> <div data-bbox="185 1230 826 1447" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>評価指標に関する目標値・達成水準【5-3】</p> <p>・サイエンス&エデュケーション研究所において、次のとおり成果を挙げる。</p> <p>①理数教育の実践自治体数：25 件</p> <p>②理数教育の実践学校数：105 校</p> </div>	<p>＜令和4年次計画【5-3】の実施状況＞</p> <p>(1) 対面及びオンライン授業コンテンツの開発</p> <p>令和4年度より、「災害レジリエンスに対応する理科教育研究」という研究テーマで、災害時や感染症蔓延時などの設備が十分に揃わない環境であっても、オンラインを活用して理科室以外の場所でも実験や観察ができる教材開発に取り組んだ。また東京都北区・文京区・港区や埼玉県戸田市・川口市と理科支援事業等を実施した。「東京都文京区理科支援事業」においては、区内10校の中学校において出前授業を実施し、今年度は学校から希望があれば自宅にいる生徒も体験できるよう自宅実験用教材を用意した。</p> <p>(2) 自治体、団体、企業との連携推進</p> <p>「新たな災害時に途切れない教育システムの開発と検証」事業等において連携してきた自治体・団体（4道県11委員会等）とはこれまでの取組が評価され、令和4年度4月から協定締結の延長を行い、新たに長野県信州理科教育研究会長野上水内支部と相互協力に関する協定書を締結（令和4年4月）し、地域の教員と連携した教材研究を実施した。</p> <p>(3) 一般市民を対象とした公開講座の実施</p> <p>一般市民や現役の理科支援員に対して公開講座や研修を実施し、理数教育を支援する能力を向上させた。また児童・生徒の保護者に対して、理数教育に対する興味・関心を向上させる目的で「災害時レジリエンスに対応する理科教育研究：高知県四万十町で開催した出前型の親子向け講座」等、5件実施した。</p> <p>科学的な分野に関する興味関心を育てるための教育コンテンツ（「動機付け」に関わるコンピテンシー）を開発し、児童・生徒に実施した。（株）IHI と連携した理科授業のための教育コンテンツ研究開発において、理科に対する興味・関心が事後に向上したことを確認した。</p> <div data-bbox="889 1230 2056 1447" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>評価指標に関する達成状況【5-3】</p> <p>①理数教育の実践自治体数：32 件</p> <p>②理数教育の実践学校数：112 校</p> <p>③「理科教育データベース」からの開発コンテンツダウンロード件数：664 件（今年度開発</p> </div>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p data-bbox="188 220 826 316">③「理科教育データベース」からの開発コンテンツダウンロード件数：540 件</p>	<p data-bbox="891 220 2056 276">した 10 件の資料)</p> <p data-bbox="891 316 2056 451">令和 4 年次総合評価室自己評価結果【5-3】：【ii】達成水準を満たしている (判定理由・補足等)：各評価指標の目標値を上回ったため、自己評価結果を【ii】と判定した。</p>
<p data-bbox="165 552 412 579"><中期計画【K6】></p> <p data-bbox="165 592 2074 695">○ 社会から求められるコンピテンシーの育成支援システムを構築する。そのシステムでは、授業等において習得できるコンピテンシー等の内容や、学生がそれまでの授業等を通して得たコンピテンシー評価に関する分析の結果を明示する。それにより、学生が最終的にコンピテンシー習得目標を達成するための履修計画作成を支援する。</p> <p data-bbox="192 708 465 735"><評価指標【S6-1】></p> <p data-bbox="192 748 2074 812">○ コンピテンシー育成支援システムを令和 6 年度までに開発し、第 4 期中期目標期間最終年度までに学生数の 70%以上が活用。利用者の向上を図るためのアンケート調査を毎年度実施。</p>	
<p data-bbox="165 847 506 874"><令和 4 年次計画【6-1】></p> <p data-bbox="165 887 837 1023">○ コンピテンシー育成支援システムを開発するコンピテンシー育成開発研究所及び教学 IR・教育開発・学修支援センターにおける体制を整備し、システムに関する原案を検討する。</p> <p data-bbox="192 1139 725 1166">評価指標に関する目標値・達成水準【6-1】</p> <p data-bbox="208 1198 815 1262">・コンピテンシー育成支援システム：コンピテンシー育成支援システム開発体制の整備</p>	<p data-bbox="864 847 1346 874"><令和 4 年次計画【6-1】の実施状況></p> <p data-bbox="891 887 2074 1062">令和 5 年度からコンピテンシー育成支援システムの開発に着手するために、コンピテンシー育成開発研究所と教学 IR・教育開発・学修支援センターとの協働プロジェクトを開始し、令和 4 年度中にシステムのコンセプト及び搭載する機能に関する検討を終えた。また令和 4 年度中にコンピテンシー育成開発研究所及び教学 IR・教育開発・学修支援センターの教員が着任し、開発体制が整備された。</p> <p data-bbox="902 1139 1317 1166">評価指標に関する達成状況【6-1】</p> <p data-bbox="913 1198 2045 1342">・コンピテンシー育成支援システム：令和 4 年度中にシステムのコンセプト及び搭載する機能に関する検討を終え、来年度の開発着手に向けた準備を整えた。また令和 4 年度中にコンピテンシー育成開発研究所及び教学 IR・教育開発・学修支援センターの教員が着任し、開発体制が整備された。</p> <p data-bbox="902 1406 1861 1433">令和 4 年次総合評価室自己評価結果【6-1】：【ii】達成水準を満たしている</p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
	<p>(判定理由・補足等) : 計画通り、開発体制の整備を行ったため、自己評価結果を【ii】と判定した。</p>
<p><中期計画【K7】></p> <p>○ 社会の求めに応じた人材を輩出できるよう、キャリア支援イベント、インターンシップ活動等を通じて収集された種々のデータを一括して管理するデータベースを構築する。そして、それらの活動を通じて学生が身に付けたコンピテンシーと統合データの分析を通してそれぞれのキャリア教育の授業やイベント等の効果、有効な教育啓発方法を検討するとともに、学生のキャリア形成やキャリア選択について豊富なデータに基づくアドバイスができる体制とシステムを確立し、それを実行する。</p> <p><評価指標【S7-1】></p> <p>○ 統合データベースを令和5年度までに構築し、令和6年度以降にデータに基づくキャリア支援やキャリア相談などのキャリア教育を行う体制を整備するとともに、毎年度の利用者数を令和2年度実績延べ2,800名の1.2倍に増加。体制整備後、学生アンケートを実施し、第4期中期目標期間最終年度までに、蓄積したデータの分析及び利用者アンケートに基づきキャリア支援を改善。</p>	
<p><令和4年次計画【7-1】></p> <p>○ 統合データベースの構築作業を開始し、データベースに掲載する項目等の検討を行う。また、キャリア支援行事の内容、実施回数の見直し等を検討し、実行する。</p>	<p><令和4年次計画【7-1】の実施状況></p> <p>(1) 統合データベースの構築作業の開始</p> <p>以下の「評価指標に関する達成状況(統合データベース)」に記載しているとおり、令和4年11月より統合データベースの構築作業を開始した。</p> <p>(2) キャリア支援行事の実施・見直し</p> <p>学生・キャリア支援センターを中心に、近年の学生の就職活動の早期化に対応するため、年度早期からワークショップを実施し、全体向けセミナーでの知識を実践可能なものとなるよう支援を行った。また、学生からの要望を踏まえ、グループディスカッション講座や、学生個別の就活スケジュールに対応したワークショップの開催等を行った他、令和4年度後期からは、全学的な授業の実施方針に合わせて、キャリア支援行事の開催方針を対面形式に移行する一方で、オンライン形式の方が参加しやすいという学部3年生からの要望を踏まえ、オンライン形式によるキャリア支援行事も引き続き開催する等の工夫を行った。こうした取組により、令和4年度のキャリア支援行事利用者数は延べ2,882名となった。</p> <p>さらに、学生・キャリア支援センターのキャリアアドバイザーが実施する「キャリア相談」(完全予約制、オンライン形式)については、令和4年度は延べ1,238名が利用した。「キャリア支援」と「キャリア相談」を合わせた利用者は延べ4,120名となり、評価指標に掲げた目標値「(延</p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<div data-bbox="185 319 826 544" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>評価指標に関する目標値・達成水準【7-1】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・統合データベース：統合データベースの構築を開始。 ・キャリア支援・キャリア相談の利用者数：3,360名 </div>	<p>べ) 3,360名」を大幅に達成した。</p> <div data-bbox="889 319 2056 678" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>評価指標に関する達成状況【7-1】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・統合データベース：教学 IR・教育開発・学修支援センターを中心に、令和4年11月から、教学 IR システムの改修及び教学に関する統合データベースの構築について検討を開始し、関係各課で学生等に対し調査等しているアンケートや、保有しているデータについてヒアリングを行った。統合データベースについては、令和5年度末までに構築が完了する予定である。 ・キャリア支援・キャリア相談の利用者数：延べ4,120名(キャリア支援行事利用者延べ2,882名、キャリア相談利用者延べ1,238名) </div> <div data-bbox="889 719 2056 890" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>令和4年次総合評価室自己評価結果【7-1】：【iii】達成水準を大きく上回っている (判定理由・補足等)：上記のとおり、統合データベースの構築作業が予定どおり進捗していること、及びキャリア支援・キャリア相談の利用者数が目標値「(延べ)3,360名」を大きく超える「延べ4,120名」となっていることから、自己評価結果を【iii】と判定した。</p> </div>
<p><中期計画【K8】></p> <p>○ 「総合知開発研究機構」と「グローバル女性リーダー育成研究機構」の協働により、総合知をもつグローバル女性リーダーを育成することに向け、知を統合するコンピテンシーの育成を図るとともに、国際性やリーダーシップを涵養する教育を充実させる他、グローバルリーダーとして活動するうえで強みとなる日本文化(伝統芸能等)に関する教養を醸成する教育プログラムを併せて推進する。学生が自身のキャリアプランを自覚的に立て、こうした幅広い教育プログラム等から適切な学修活動を選択できるキャリア教育の体制を整え、それを実行する。</p> <p><評価指標【S8-1】></p> <p>○ 日本文化(伝統芸能等)に関するセミナー・シンポジウム等の開催件数を3件以上/年実施、参加者に対するアンケート調査結果において、満足度が80%以上/年。</p> <p><評価指標【S8-2】></p> <p>○ グローバル女性リーダー育成に関する教育プログラム及びキャリアデザイン教育科目の開講科目を令和5年度までに再編、履修者数を450名以上/年。</p>	
<p><令和4年次計画【8-1】></p>	<p><令和4年次計画【8-1】の実施状況></p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p>○ 歌舞伎・能・狂言等伝統芸能の演者や技術伝承者、研究者によるセミナー（シンポジウム）を開催し、参加者へのアンケートを実施する。伝統芸能等に関する授業科目の新設について検討を行う。</p>	<p>(1) 日本文化（伝統芸能等）に関するセミナー・シンポジウム等の開催</p> <p>令和4年7月に最先端技術（AR）を用いた歴史展示をテーマにしたトークイベント「拡張させない現実感技術」（参加者40名）、同年8月に歌舞伎の演技と小道具製作を体験する「歌舞伎ワークショップ」（参加者60名）、同年12月に歌舞伎役者の中村蒼玉氏をゲストに迎えたトークイベント「中村蒼玉と歌舞伎」（参加者38名）を実施し、共に定員を超える応募があり盛況となった。</p> <p>参加者へのアンケート（いずれも5段階評価で実施。「5」が最高評価。）については、「拡張させない現実感技術」（有効回答21名）では、「5」が71.4%（15名）、「4」が28.6%（6名）、「歌舞伎ワークショップ」（有効回答39名）では、「5」が97.4%（37名）、「4」が2.6%（1名）、「中村蒼玉と歌舞伎」（有効回答13名）では、「5」が92.3%、「4」が7.7%（1名）となった。各イベントのアンケートの回答における「5」と「4」を合わせた割合は100%となる高い評価を得た。</p> <p>(2) 伝統芸能等に関する授業科目の新設に向けた取組</p> <p>令和5年3月に、双方がそれぞれの特色及び教育研究文化資源を活かして相互に連携及び協力し、教育の充実及び研究の推進を通じ、有為な人材の育成、文化振興及び地域社会への貢献に寄与することを目指し、独立行政法人日本芸術文化振興会と連携及び協力に関する包括協定を締結した。</p> <p>これを踏まえ、令和5年度より、日本芸術文化振興会との連携による全学共通科目「日本の伝統芸能」を開講することとした。本授業は、学部生・大学院生・附属校生徒と他校の女子学生を対象とし、能楽、文楽、歌舞伎をテーマとした、各芸能の入門講座、舞台鑑賞、実演者によるワークショップ、バックステージツアーを実施することとしている。</p> <div data-bbox="1688 772 2040 1011" style="text-align: right;">  </div> <p>■ 本学佐々木学長(左)と日本芸術文化振興会河村理事長(右)(R5.3.15)</p>
<p>評価指標に関する目標値・達成水準【8-1】</p> <p>・グローバル女性リーダー育成研究機構において、次のとおり成果を挙げる。</p> <p>① 日本文化（伝統芸能等）に関するセミナー・</p>	<p>評価指標に関する達成状況【8-1】</p> <p>① 日本文化（伝統芸能等）に関するセミナー・シンポジウム等開催数：3件</p> <p>② 上記参加者に対するアンケート調査結果における満足度：100%</p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p>シンポジウム等開催数：3件 ②上記参加者に対するアンケート調査結果における満足度：80%</p>	<p>令和4年次総合評価室自己評価結果【8-1】：【ii】達成水準を満たしている (判定理由・補足等)：上記のとおり、日本文化(伝統芸能等)に関するセミナー・シンポジウム等開催数が目標値「3件」を達成していること、及びアンケート調査結果における満足度が目標値「80%」を超える「100%」となっていることから、自己評価結果を【ii】と判定した。</p>
<p><令和4年次計画【8-2】> ○ グローバル女性リーダー育成関連科目及びキャリアデザインプログラムの構成科目を開講し、学生への教育を進める。また、同科目・プログラム再編のための検討を並行して進める。</p> <p>評価指標に関する目標値・達成水準【8-2】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グローバル女性リーダー育成に関する教育プログラム及びキャリアデザイン教育科目の再編：カリキュラムの検討を開始。 ・グローバル女性リーダー育成に関する教育プログラム及びキャリアデザイン教育科目履修者数：450名 	<p><令和4年次計画【8-2】の実施状況> (1) グローバル女性リーダー育成関連科目及びキャリアデザイン教育科目の再編 以下の「評価指標に関する達成状況(グローバル女性リーダー育成に関する教育プログラム及びキャリアデザイン教育科目の再編)」に記載しているとおり、同科目・プログラムの再編のための検討を進めた。</p> <p>(2) グローバル女性リーダー育成関連科目及びキャリアデザイン教育科目の開講 以下の「評価指標の達成状況(グローバル女性リーダー育成に関する教育プログラム及びキャリアデザイン教育科目履修者数)」に記載しているとおり、通年で同科目・プログラムを開講し、目標値「(延べ)450名」を超える「延べ461名」の学生が履修をした。</p> <p>評価指標に関する達成状況【8-2】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グローバル女性リーダー育成に関する教育プログラム及びキャリアデザイン教育科目の再編：学生・キャリア支援センター、及びグローバルリーダーシップ研究所の関連教員が連携し、グローバル女性リーダー育成に関する教育プログラム及びキャリアデザイン教育科目の再編に向けた検討を進めた。同プログラム・科目の再編については、予定どおり令和5年度末までに完了する予定である。なお、キャリアデザイン教育科目については、令和5年度からの新設科目として、筑波大学・国際基督教大学との共同設置科目(未来開拓入門)の設置を決定し、履修規程改正の手続きを行った。 ・グローバル女性リーダー育成に関する教育プログラム及びキャリアデザイン教育科目履修者数：延べ461名

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果				
	<p>令和4年次総合評価室自己評価結果【8-2】：【ii】達成水準を満たしている (判定理由・補足等)：上記のとおり、グローバル女性リーダー育成に関する教育プログラム及びキャリアデザイン教育科目の再編について予定どおり作業が進捗していること、及び同プログラム・科目の履修者数が目標値「(延べ)450名」を超える「延べ461名」となっていることから、自己評価結果を【ii】と判定した。</p>				
<p><中期計画【K9】> ○ Society 5.0 (知識基盤社会) の実現に向けて、IT 人材が不足する社会の課題に応え、持続的社会の発展に不可欠な工学知を持った女性リーダーの活躍促進に寄与するため、工学と人文・社会系学問とが「共に」新たな工学分野を創り出す、2学科からなる「共創工学部(仮称)」の設置を予定する。本学部は、データサイエンスを基盤とした上で、工学の知識や技術に加えて人文・社会系の知と融合させた、より総合的な知識・技能を修得させることにより、人間や社会中心の工学を身に付けた女性人材や、人文学系分野における工学マインドを持った女性人材を養成する。</p> <p><評価指標【S9-1】> ○ 「共創工学部(仮称)」を設置し、学科として「人間環境工学科(仮称)」、「文化情報工学科(仮称)」を令和6年度に設置。共創工学部(仮称)の志願者倍率3倍以上、及び、令和6年度より毎年度実施するアンケート調査における総合的満足度が、70%以上。</p>	<p><令和4年次計画【9-1】の実施状況> (1) 共創工学部(仮称)の設置に向けた取組 以下の「評価指標に関する達成状況(共創工学部(仮称))の設置」に記載しているとおり、令和6年度の共創工学部(仮称)(①人間環境工学科(仮称)[入学定員26名]、②文化情報工学科(仮称)[入学定員20名])の設置に向けて、令和5年3月17日に設置申請書類を文部科学省に提出した。</p> <p>■ 共創工学部(仮称)の設置に向けた令和4年度の取組の概要</p> <table border="1" data-bbox="891 1171 2063 1445"> <thead> <tr> <th data-bbox="891 1171 1232 1214">区分</th> <th data-bbox="1232 1171 2063 1214">内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="891 1214 1232 1445">【R4.5~8】受験対象者及び企業・関係機関等ヘニーズ調査</td> <td data-bbox="1232 1214 2063 1445">【①高校生調査】：進学実績をもとに80校を抽出して、高校2年女子生徒へ調査を実施し、40校・4,092名から回答を得た。入学意欲(入学したいと回答した生徒の人数)は、人間環境工学科(仮称)では入学定員26名の約2.7倍となる70名、文化情報工学科(仮称)では入学定員20名の約2.9倍となる58名であった。 ・人間環境工学科(仮称)</td> </tr> </tbody> </table>	区分	内容	【R4.5~8】受験対象者及び企業・関係機関等ヘニーズ調査	【①高校生調査】：進学実績をもとに80校を抽出して、高校2年女子生徒へ調査を実施し、40校・4,092名から回答を得た。入学意欲(入学したいと回答した生徒の人数)は、人間環境工学科(仮称)では入学定員26名の約2.7倍となる70名、文化情報工学科(仮称)では入学定員20名の約2.9倍となる58名であった。 ・人間環境工学科(仮称)
区分	内容				
【R4.5~8】受験対象者及び企業・関係機関等ヘニーズ調査	【①高校生調査】：進学実績をもとに80校を抽出して、高校2年女子生徒へ調査を実施し、40校・4,092名から回答を得た。入学意欲(入学したいと回答した生徒の人数)は、人間環境工学科(仮称)では入学定員26名の約2.7倍となる70名、文化情報工学科(仮称)では入学定員20名の約2.9倍となる58名であった。 ・人間環境工学科(仮称)				
<p><令和4年次計画【9-1】> ○ Society 5.0 (知識基盤社会) の実現に向け、工学と人文・社会系学問が融合する新たな工学分野を担う女性人材を養成することを目的とする「共創工学部(仮称)」の設置(令和6年度)に向けた準備を行う。</p>					

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果	
		<p>→「受験したい」391名、うち「入学したい」70名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文化情報工学科（仮称） <p>→「受験したい」292名、うち「入学したい」58名</p> <p>【②企業調査】：就職実績がある又は採用が期待される企業等、1,003件へ調査を実施し、113件の回答を得た。「採用したい」と回答した企業・機関の合計は108件であった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「人間環境工学科（仮称）の卒業生を採用したい」9件 ・「文化情報工学科（仮称）の卒業生を採用したい」10件 ・「両方の学科の卒業生を採用したい」89件 <p>【R5.1～3】設置申請書類の学内会議における審議・報告</p> <p>①R5.1.11 教授会（報告）、②R5.2.14 学長戦略機構会議（審議）、③R5.2.15 教育研究評議会（審議）、④R5.2.17 役員会（審議）、⑤R5.3.14 経営協議会（報告）、⑥R5.3.17 文部科学省へ提出</p> <p>【通年】工学系学部設置準備委員会の開催</p> <p>工学系学部設置準備委員会を7回開催し、その他各学科準備委員会や役割分担ごとの打合せを行い、設置構想を検討した。</p> <p>【通年】文科省事務相談</p> <p>文科省事務相談を、概算要求説明を含め6回行った。</p> <p>【通年】広報活動</p> <p>新聞や受験専門誌等の取材を10件受け、広報活動を行った（日本経済新聞2件、朝日新聞、東京新聞、教育家庭新聞、週刊東洋経済、共同通信、東洋経済オンライン、東進進学情報、旺文社）。</p> <p>【通年】入試に係る情報の発信</p> <p>共創工学部（仮称）の選抜方法、募集人員を検討、決定し、これら入試に係る情報を、受験対象となる高校生に早期に浸透を図る観点から、共創工学部（仮称）設置に係る広報を令和4年5月から開始した。各選抜における選抜方法も検討を進め、入試科目や配点等の詳細を同年10月に公表した。</p>
<p>評価指標に関する目標値・達成水準【9-1】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・共創工学部（仮称）の設置：文部科学省へ設置許可申請（意見伺い）を実施。 	<p>評価指標に関する達成状況【9-1】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・共創工学部（仮称）の設置：令和6年度の共創工学部（仮称）（①人間環境工学科（仮称）〔入学定員26名〕、②文化情報工学科（仮称）〔入学定員20名〕）の設置に向けて、工学系学部設置準備委員会を中心に設置構想の検討を進め、令和5年1～3月の学内諸会議における審議・報告を経て、令和5年3月17日に設置申請書類を文部科学省に提出した。 	

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>令和4年次総合評価室自己評価結果【9-1】：【ii】達成水準を満たしている (判定理由・補足等)：上記のとおり、共創工学部(仮称)の設置に向けた取組が予定どおり進捗していることから、自己評価結果を【ii】と判定した。</p> </div>
<p><中期計画【K10】></p> <p>○ 専門性と幅広い教養を身に付けた人材を養成するために、本学の特色である「文理融合リベラルアーツ」教育と「複数プログラム選択履修制度」を基盤に、分野を横断する教育を推進する。そのために、教育の実施状況を教学 IR に基づき集計・分析し、学生や教職員にフィードバックすることで PDCA サイクルを機能させ、教育プログラムの改善を行う。さらに、学位プログラムの考え方に立ち、全学的に SDGs の実現等に向けた他大学との連携を ICT の活用により進めながら、他大学等のリソースを活かして、ジェンダー、データサイエンス等に関する教育システムを充実させる。また、学生のコンピテンシーを高め、社会の多様な分野で活躍する女性を育成するため、社会との協奏による授業等を拡大するとともに、アントレプレナー育成事業を推進する。</p> <p><評価指標【S10-1】></p> <p>○ 「文理融合リベラルアーツ」及び「複数プログラム選択履修制度」の教育プログラムを推進するとともに、教学 IR に基づく集計・分析を行い、新学部設置を見据え、令和6年度までに教育プログラムの改善を行う。毎年度実施する卒業時アンケート調査において、リベラルアーツ科目と複数プログラム選択履修制度に対する満足度が、70%以上。</p> <p><評価指標【S10-2】></p> <p>○ 数理・データサイエンス・AI 教育プログラムの履修者数を 130 名以上/年、及び第4期中期目標期間最終年度までにリテラシーレベル修了者数 300 名以上。また、アントレプレナー育成のための履修者数：35 名以上/年。</p>	
<p><令和4年次計画【10-1】></p> <p>○ 「文理融合リベラルアーツ」及び「複数プログラム選択履修制度」に基づく教育を推進するとともに、両教育プログラムの改善に向け、教学 IR に基づく分析・検討を開始する。また、文理融合リベラルアーツ演習科目の合同発表会を行い、アクティブラーニングを実践する。卒業時にアンケート調査を行い、両制度の学生の満足度を測定する。</p>	<p><令和4年次計画【10-1】の実施状況></p> <p>(1) 「文理融合リベラルアーツ」及び「複数プログラム選択履修制度」に基づく教育の推進と教育プログラムの改善</p> <p>以下の「評価指標に関する達成状況(「文理融合リベラルアーツ」及び「複数プログラム選択履修制度」)」に記載しているとおり、両教育プログラムを推進するとともに、改善に向けた取組を進めた。</p> <p>また、文理融合リベラルアーツについては、令和4年8月にリベラルアーツ演習の合同発表会を Moodle により行い、50 名が参加した。</p> <p>(2) 卒業時アンケート調査</p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果																		
	<p>令和5年2～3月にかけて、教学 IR・教育開発・学修支援センターにおいて、在学中での経験・獲得した能力・満足度など本学の教育・学生支援について問い、大学の教育研究水準の向上に資するデータを得ることを目的として、「令和4年度卒業時調査（学部生）」を実施した（対象：令和4年度学部卒業生 484 名、調査方法：WEB 調査、回答数：124 名、回収率 25.4%）。</p> <p>本調査の結果において、「本学の教育全般」については満足度 99.1%、「文理融合リベラルアーツ」では満足度 99.1%、「複数プログラム選択履修制度」では満足度 86.6%といずれも高い満足度が示された。</p> <p>■ 令和4年度卒業時調査（学部生）の主な質問項目の回答の内訳について</p> <p>○本学の教育全般：満足度 99.1%（調査における質問項目 Q9）</p> <table border="1" data-bbox="922 588 2056 754"> <tr> <td>質問項目</td> <td>Q9. あなたは、本学で受けた教育全般をどのように評価しますか。</td> </tr> <tr> <td>回答の内訳 (計 124 名)</td> <td>①満足 83 名、②やや満足 26 名、③やや不満 1 名、④NA 1 名、⑤欠損値 13 名</td> </tr> <tr> <td>満足度</td> <td>99.1% (①②の合計 109 名／①～③の合計 110 名)</td> </tr> </table> <p>○文理融合リベラルアーツ：満足度 99.1%（調査における質問項目 Q8(1)）</p> <table border="1" data-bbox="922 834 2056 1032"> <tr> <td>質問項目</td> <td>Q8. あなたは大学でうけた教育を、現在どのように評価しますか。 Q8(1) 文理融合リベラルアーツ</td> </tr> <tr> <td>回答の内訳 (計 124 名)</td> <td>①満足 62 名、②やや満足 47 名、③やや不満 1 名、④欠損値 14 名</td> </tr> <tr> <td>満足度</td> <td>99.1% (①②の合計 109 名／①～③の合計 110 名)</td> </tr> </table> <p>○複数プログラム選択履修制度：満足度 86.6%（調査における質問項目 Q17(2)）</p> <table border="1" data-bbox="922 1112 2056 1351"> <tr> <td>質問項目</td> <td>Q17. 複数プログラム選択履修制度は、学生の関心や進路に応じて、専門教育のプログラムを選択できる制度です。これについて、あなたはどのように考えますか。 Q17(2) 複数プログラム選択履修制度を利用して満足している</td> </tr> <tr> <td>回答の内訳 (計 124 名)</td> <td>①あてはまる 37 名、②ややあてはまる 34 名、③あまりあてはまらない 9 名、④あてはまらない 2 名、⑤この制度を利用しなかった 22 名、⑥欠損値 20 名</td> </tr> <tr> <td>満足度</td> <td>86.6% (①②の合計 71 名／①～④の合計 82 名)</td> </tr> </table>	質問項目	Q9. あなたは、本学で受けた教育全般をどのように評価しますか。	回答の内訳 (計 124 名)	①満足 83 名、②やや満足 26 名、③やや不満 1 名、④NA 1 名、⑤欠損値 13 名	満足度	99.1% (①②の合計 109 名／①～③の合計 110 名)	質問項目	Q8. あなたは大学でうけた教育を、現在どのように評価しますか。 Q8(1) 文理融合リベラルアーツ	回答の内訳 (計 124 名)	①満足 62 名、②やや満足 47 名、③やや不満 1 名、④欠損値 14 名	満足度	99.1% (①②の合計 109 名／①～③の合計 110 名)	質問項目	Q17. 複数プログラム選択履修制度は、学生の関心や進路に応じて、専門教育のプログラムを選択できる制度です。これについて、あなたはどのように考えますか。 Q17(2) 複数プログラム選択履修制度を利用して満足している	回答の内訳 (計 124 名)	①あてはまる 37 名、②ややあてはまる 34 名、③あまりあてはまらない 9 名、④あてはまらない 2 名、⑤この制度を利用しなかった 22 名、⑥欠損値 20 名	満足度	86.6% (①②の合計 71 名／①～④の合計 82 名)
質問項目	Q9. あなたは、本学で受けた教育全般をどのように評価しますか。																		
回答の内訳 (計 124 名)	①満足 83 名、②やや満足 26 名、③やや不満 1 名、④NA 1 名、⑤欠損値 13 名																		
満足度	99.1% (①②の合計 109 名／①～③の合計 110 名)																		
質問項目	Q8. あなたは大学でうけた教育を、現在どのように評価しますか。 Q8(1) 文理融合リベラルアーツ																		
回答の内訳 (計 124 名)	①満足 62 名、②やや満足 47 名、③やや不満 1 名、④欠損値 14 名																		
満足度	99.1% (①②の合計 109 名／①～③の合計 110 名)																		
質問項目	Q17. 複数プログラム選択履修制度は、学生の関心や進路に応じて、専門教育のプログラムを選択できる制度です。これについて、あなたはどのように考えますか。 Q17(2) 複数プログラム選択履修制度を利用して満足している																		
回答の内訳 (計 124 名)	①あてはまる 37 名、②ややあてはまる 34 名、③あまりあてはまらない 9 名、④あてはまらない 2 名、⑤この制度を利用しなかった 22 名、⑥欠損値 20 名																		
満足度	86.6% (①②の合計 71 名／①～④の合計 82 名)																		

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p data-bbox="190 225 826 268">評価指標に関する目標値・達成水準【10-1】</p> <ul data-bbox="190 284 826 523" style="list-style-type: none"> ・「文理融合リベラルアーツ」及び「複数プログラム選択履修制度」の推進及び改善：教学 IR に基づく分析・検討を開始。 ・卒業時アンケート調査における「文理融合リベラルアーツ」及び「複数プログラム選択履修制度」に対する満足度：70% 	<p data-bbox="902 225 2058 268">評価指標に関する達成状況【10-1】</p> <ul data-bbox="902 284 2058 778" style="list-style-type: none"> ・「文理融合リベラルアーツ」及び「複数プログラム選択履修制度」の推進及び改善：本学の教養教育の特色である「文理融合リベラルアーツ」、及び専門教育の特色である「複数プログラム選択履修制度」による教育を引き続き推進した。また、教学 IR に基づく教育プログラムの改善に資するため、教学 IR・教育開発・学修支援センターを中心に、令和4年11月から、教学 IR システムの改修及び教学に関する統合データベースの構築について検討を開始した。統合データベースについては、令和5年度末までに構築が完了する予定である。さらに、教学 IR に基づく分析・検討を踏まえ、「文理融合リベラルアーツ」及び「複数プログラム選択履修制度」をはじめとする教育プログラムの改善を令和6年度までに行う予定である。 ・卒業時アンケート調査における「文理融合リベラルアーツ」及び「複数プログラム選択履修制度」に対する満足度：文理融合リベラルアーツ 99.1%、複数プログラム選択履修制度 86.6%であった。 <p data-bbox="902 815 2058 1066">令和4年次総合評価室自己評価結果【10-1】：【ii】達成水準を満たしている （判定理由・補足等）：上記のとおり、「文理融合リベラルアーツ」及び「複数プログラム選択履修制度」による教育を推進するとともに、教育プログラムの改善に向けた取組が予定どおり進捗していること、及び卒業時アンケート調査におけるこれらの教育プログラムに対する満足度が目標値「70%」を超える「99.1%（文理融合リベラルアーツ）」、「86.6%（複数プログラム選択履修制度）」となっていることから、自己評価結果を【ii】と判定した。</p>
<p data-bbox="163 1169 521 1201"><令和4年次計画【10-2】></p> <p data-bbox="163 1209 835 1361">○ 数理・データサイエンス・AI 教育プログラムによる教育を実践し、全学生への波及を推進する。また、全国アントレプレナーシップ人材育成プログラムを活用し、アントレプレナー育成事業を推進する。</p>	<p data-bbox="862 1169 1361 1201"><令和4年次計画【10-2】の実施状況></p> <p data-bbox="862 1209 1507 1241">(1) 数理・データサイエンス・AI 教育プログラム</p> <p data-bbox="884 1249 2089 1361">本学が提案した『データサイエンスを駆使する人文系女性リーダーの育成プログラム』が令和4年度からの文部科学省「数理・データサイエンス・AI 教育の全国展開の推進」特定分野校に採択され、引き続きデータサイエンス教育を推進している。</p> <p data-bbox="884 1369 2089 1437">数理・データサイエンス・AI 教育プログラム関連科目の履修者数は毎年度拡大しており、令和4年度の履修者数は、目標値「(延べ) 130名」を上回る延べ 185名となった。</p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果								
	<p>また、特定分野校に選定されたことを踏まえ、本学のデータサイエンス教育の他大学への波及の取組として、京都ノートルダム女子大学との文理融合データサイエンスに関する覚書を令和4年12月に締結し、文学作品のデータ分析を行う本学の授業コンテンツの提供を開始した。</p> <p>一方で、令和3年8月に認定された「数理・データサイエンス・AI教育プログラム（リテラシーレベル）」の令和4年度の修了者は14名に留まった（参考：令和3年度4名）。これを踏まえ、令和5年度以降は、リテラシーレベル修了者数の拡大に向けて、制度の周知徹底等を図っていくこととしている。さらに、本制度がより多くの学生に認知されるよう、令和4年度末時点で、カリキュラムの詳細等を大学ウェブサイトで公表している。</p> <p>■ 本学の数理・データサイエンス・AI教育の文部科学省事業への選定等の沿革の概要</p> <table border="1" data-bbox="887 587 2056 1023"> <thead> <tr> <th data-bbox="887 587 1008 630">年月</th> <th data-bbox="1008 587 2056 630">内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="887 630 1008 746">H31.1</td> <td data-bbox="1008 630 2056 746"> 「数理及びデータサイエンスに係る教育強化」協力校に選定 ・お茶の水女子大学「シミュレーションでわかる文理融合データサイエンスプログラム」 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/095/gaiyou/1412367.htm </td> </tr> <tr> <td data-bbox="887 746 1008 863">R3.8</td> <td data-bbox="1008 746 2056 863"> 「数理・データサイエンス・AI教育プログラム（リテラシーレベル）」に認定 ・お茶の水女子大学「全学データサイエンス学際カリキュラム」 https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/suuri_datascience_ai/1413155_00011.htm </td> </tr> <tr> <td data-bbox="887 863 1008 1023">R3.12</td> <td data-bbox="1008 863 2056 1023"> 「数理・データサイエンス・AI教育の全国展開の推進」特定分野校に選定 ・お茶の水女子大学「データサイエンスを駆使する人文系女性リーダーの育成プログラム（特定分野：人文科学・教育学）」 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/095/gaiyou/1412367_00002.htm </td> </tr> </tbody> </table> <p>(2) アントレプレナー育成事業</p> <p>本学が提案した「ゲームチェンジにより『クリエイティブ生活産業DX』をけん引する女性アントレプレナーの育成」が、令和4年3月に文部科学省大学改革推進等補助金（デジタル活用高度専門人材育成事業）「デジタルと専門分野の掛け合わせによる産業DXをけん引する高度専門人材育成事業」に採択された。</p> <p>これに伴い、令和4年度から女性アントレプレナー育成教育を一層推進するとともに、「アントレプレナーへの道」関連の2科目（DX演習製造業編、DX演習PoC検証編）を新規に開設した。これらの新設科目を含んだ令和4年度のアントレプレナーシップ関連科目の履修者数は、目標値「（延べ）35名」を上回る延べ98名となった。</p> <p>また、アントレプレナーシップ関連科目の「総合コース」の履修者により編成された本学の学</p>	年月	内容	H31.1	「数理及びデータサイエンスに係る教育強化」協力校に選定 ・お茶の水女子大学「シミュレーションでわかる文理融合データサイエンスプログラム」 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/095/gaiyou/1412367.htm	R3.8	「数理・データサイエンス・AI教育プログラム（リテラシーレベル）」に認定 ・お茶の水女子大学「全学データサイエンス学際カリキュラム」 https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/suuri_datascience_ai/1413155_00011.htm	R3.12	「数理・データサイエンス・AI教育の全国展開の推進」特定分野校に選定 ・お茶の水女子大学「データサイエンスを駆使する人文系女性リーダーの育成プログラム（特定分野：人文科学・教育学）」 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/095/gaiyou/1412367_00002.htm
年月	内容								
H31.1	「数理及びデータサイエンスに係る教育強化」協力校に選定 ・お茶の水女子大学「シミュレーションでわかる文理融合データサイエンスプログラム」 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/095/gaiyou/1412367.htm								
R3.8	「数理・データサイエンス・AI教育プログラム（リテラシーレベル）」に認定 ・お茶の水女子大学「全学データサイエンス学際カリキュラム」 https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/suuri_datascience_ai/1413155_00011.htm								
R3.12	「数理・データサイエンス・AI教育の全国展開の推進」特定分野校に選定 ・お茶の水女子大学「データサイエンスを駆使する人文系女性リーダーの育成プログラム（特定分野：人文科学・教育学）」 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/095/gaiyou/1412367_00002.htm								

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p data-bbox="197 1107 824 1139">評価指標に関する目標値・達成水準【10-2】</p> <ul data-bbox="206 1161 815 1310" style="list-style-type: none"> ・数理・データサイエンス・AI 教育プログラム履修者数：130 名 ・リテラシーレベル修了者数：50 名 ・アントレプレナー育成に関する履修者数：35 名 	<p data-bbox="891 228 2078 411">生チームが、第 13 回ビジネス創造コンテスト（主催：一般財団法人品川ビジネスクラブ、共催：品川区）において、ファイナリスト賞、品川区特別賞を受賞する成果を上げた。受賞したビジネスアイデア「シチュエーションまで試着する『my 試着室』」については、アパレル EC 業界の「返品」を巡る課題を解決し、さらにリアルでの試着体験を超えるオンライン試着を提供することで、アパレル EC 業界に革命を起こすことを目標とした点が評価された。</p> <p data-bbox="880 461 1581 491">(3) 他大学のリソースを活かした教育プログラムの充実</p> <p data-bbox="891 501 1682 762">令和 4 年 11 月に、中央大学との学生交流に関する協定を締結した。中央大学とは、令和 5 年度から授業における学生の交流（単位互換）を開始することとしており、同大学の理工学部が展開する産業キャリア教育プログラム群（呼称：WISE 科目）を本学学生も受講可能となっている。この他、両大学で実績を持つ文理の枠を越えた AI やデータサイエンスを学ぶ関連科目の互換等の可能性についても検討が進められている。</p> <p data-bbox="891 772 1682 1034">また、令和 5 年 1 月には、東京大学と連携及び協力に関する包括協定を締結した。令和 5 年度からは、アントレプレナーシップ関連科目として、「アントレプレナーシップ演習（ジェンダー・イノベーション実践編（モノ編・コト編））」、「アントレプレナー演習（SDGs 実践編（モノ編・コト編）」等の計 9 科目を新設し、このうち 5 科目を東京大学との共同科目として開講することとした。</p> <div data-bbox="1733 491 2040 699"> </div> <p data-bbox="1742 708 2040 756">■ 本学佐々木学長(左)と中央大学河合学長(右)(R4.11.29)</p> <div data-bbox="1733 778 2040 986"> </div> <p data-bbox="1742 995 2040 1043">■ 本学佐々木学長(左)と東京大学藤井学長(右)(R5.1.6)</p> <p data-bbox="902 1107 2056 1139">評価指標に関する達成状況【10-2】</p> <ul data-bbox="911 1161 2047 1310" style="list-style-type: none"> ・数理・データサイエンス・AI 教育プログラム履修者数：延べ 185 名 ・リテラシーレベル修了者数：14 名 ・アントレプレナー育成に関する（授業の）履修者数：延べ 98 名 <p data-bbox="902 1369 2047 1442">令和 4 年次総合評価室自己評価結果【10-2】：【ii】達成水準を満たしている （判定理由・補足等）：「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム」については、目標</p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果				
	<p>値「(延べ) 130 名」を大幅に上回る「延べ 185 名」が履修するとともに、「アントレプレナー育成に関する授業」についても、目標値「(延べ) 35 名」を大幅に上回る「延べ 98 名」が履修する成果を上げた。一方で、「数理・データサイエンス・AI 教育プログラムのリテラシーレベル修了者数」については、目標値「50 名」を下回る「14 名」に留まったが、制度の周知徹底及び大学ウェブサイトへの公表を行ったこと等を総合的に勘案して、自己評価結果を【ii】と判定した。</p>				
<p><中期計画【K11】></p> <p>○ 専門性と幅広い教養を身に付け、それらを実践知と統合して活用できる人材を養成するために、思考力・判断力・表現力を持ち、主体性・協働性を持って行動できる学生をアドミッション・ポリシーに沿って選抜する。新フンボルト入試（総合型選抜）を推進しその成果を検証するとともに、本学の多様な入試に関してオープンキャンパスによる広報活動を実施し、附属高等学校との高大接続教育を推進する。</p> <p><評価指標【S11-1】></p> <p>○ 新フンボルト入試（総合型選抜）に関する諸情報の調査（プレゼミナール参加者数及び受験者数、他の選抜試験との併願者数、選抜受験者数に占めるプレゼミナール参加者の割合）、及び総合型選抜・学校推薦型選抜・一般選抜で合格した入学者の学修成果追跡調査を毎年度実施し、解析。また、令和7年度を目途に新フンボルト入試の再評価、入試選抜方法を再評価。</p> <p><評価指標【S11-2】></p> <p>○ オープンキャンパス（学部）の参加者アンケート調査結果をもとに、令和7年度を目途にオープンキャンパスを活用した広報活動の在り方について再評価し、参加者からの満足度が第3期中期目標期間最終年度と比較して向上していること。また、高大接続教育の実施状況：附属高校生の大学授業の受講者数について、第4期中期目標期間最終年度までに延べ360名以上。</p>					
<p><令和4年次計画【11-1】></p> <p>○ 第3期中期目標期間の新フンボルト入試の検証結果を踏まえ、入試を実施するとともに、本入試制度の更なる普及に努める。</p>	<p><令和4年次計画【11-1】の実施状況></p> <p>(1) 新フンボルト入試の実施</p> <p>第3期中期目標期間より継続して総合型選抜「新フンボルト入試」を実施するとともに、令和3年度からの検証結果等を踏まえて、以下の「評価指標に関する達成状況（新フンボルト入試に関する調査及び入学者の学修成績追跡調査の実施・解析）（新フンボルト入及び入試選抜方法の再評価）」に記載しているとおり、新フンボルト入試に関する諸情報についての調査、各選抜試験により合格した入学者の学修成果追跡調査、令和7年度の新フンボルト入試の再評価に向けた各種指標の検討等を行った。</p> <p>■ 令和4年度の新フンボルト入試に関する取組・成果の概要</p> <table border="1" data-bbox="891 1422 2063 1460"> <thead> <tr> <th data-bbox="891 1422 1160 1460">区分</th> <th data-bbox="1160 1422 2063 1460">内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td> </td> <td> </td> </tr> </tbody> </table>	区分	内容		
区分	内容				

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p>評価指標に関する目標値・達成水準【11-1】</p>	<p>新フンボルト入試説明会</p> <ul style="list-style-type: none"> 令和4年7月16～18日に開催された学部オープンキャンパスでは、新フンボルト入試合格者が企画する合格者座談会を含む新フンボルト入試説明会を全4回開催し、令和3年度（253名）を大幅に上回る428名が参加した。 また、令和3年度の新フンボルト入試で合格・入学した学生たちは、在学生のみならず卒業生も参加しているオンラインコミュニケーションツールを駆使して、入学前の合格者との交流を企画する等、ますます意欲的に活動している。
	<p>プレゼミナール及び入試の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> 上記の広報活動が奏功して、一次選考の一環をなすプレゼミナール（令和4年9月23日）には、令和3年度（253名）を大きく上回る355名が参加した。 事後アンケートにおいても、プレゼミナールが有意義であったと回答した者が、とてもそう思うとどちらかと言えばそう思うの合計で、令和3年度と同様の99%に達しており、十分な成果を得た。 志願者数も文系が121名（令和3年度115名）、理系が80名（令和3年度73名）の計201名となり、令和3年度と同程度の水準を確保した。 令和4年10月15～16日に実施した文系の「図書館入試」の事後アンケートでは、令和3年度に引き続き、今年も受験者全員が図書館入試を受験したことを有益だったと回答している。令和4年11月26日に実施した理系の「実験室入試」も含め、単なる入学者選抜ではなく、挑んだことで何かを得られる入試、高校生に大学での学びとはどういうものであるかを垣間見てもらおうという新フンボルト入試の理念が実現されている。
	<p>新フンボルト入試の波及効果</p> <ul style="list-style-type: none"> 令和4年度の新フンボルト入試出願者のうち他の選抜試験との併願者数は104名（令和3年度84名）、選抜受験者数に占めるプレゼミナール参加者の割合は20.6%（令和3年度16.4%）となっている。新フンボルト入試の一環として実施するプレゼミナールや図書館入試、実験室入試を通じて本学に魅力を感じ、当該選抜試験で不合格となった場合でも他の選抜試験を再受験する等、本学の入試全体を活性化する波及効果が見られている。
<p>評価指標に関する目標値・達成水準【11-1】</p>	<p>評価指標に関する達成状況【11-1】</p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p>・新フンボルト入試に関する調査及び入学者の学修成績追跡調査の実施・解析：GPA 等の成績情報など、多様な活動評価項目について収集・記録する方法及び形式について検討。</p> <p>・新フンボルト入試及び入試選抜方法の再評価：客観的情報と評価者による主観的評価を適切に組み合わせる方法を考案。</p>	<p>・新フンボルト入試に関する調査及び入学者の学修成績追跡調査の実施・解析：</p> <p>1) 令和4年度の新フンボルト入試に関する諸情報について調査を行い、以下の①～④の実績を上げていることを確認した。</p> <p>①プレゼミナール参加者数：355名（文系222名、理系133名）</p> <p>②新フンボルト入試受験者数：201名（文系121名、理系80名）</p> <p>③他の選抜試験との併願者数：104名</p> <p>④選抜受験者数に占めるプレゼミナール参加者の割合：20.6%（受験者数*のうちプレゼミナール参加者数318名/受験者数1,546名）</p> <p>※受験者数は、新フンボルト入試（文系・理系）、学校推薦型選抜、一般選抜（前期・後期）の受験者数の合計</p> <p>2) 各選抜試験により合格した入学者の学修成果追跡調査として、令和4年度は、①入学時アンケート、②進路状況調査、③成績情報調査(1)（令和3年度後期成績データ）、④成績情報調査(2)（令和4年度前期成績データ）、⑤コンピテンシーチェックテスト調査、⑥学部生成績優秀者調査、⑦学年末アンケート調査等の各種調査を試行的に実施し、第4期中期目標期間を通じて継続的に調査を行うための基礎データの蓄積を開始した。</p> <p>・新フンボルト入試及び入試選抜方法の再評価：上記の1)及び2)を踏まえて、令和7年度を目途に新フンボルト入試の再評価、入試選抜方法を再評価するための主観的指標と客観的指標を整理し、各指標を適切に組み合わせた分析の枠組みについて検討を行った。</p> <p>令和4年次総合評価室自己評価結果【11-1】：【ii】達成水準を満たしている （判定理由・補足等）：上記のとおり、新フンボルト入試に関する諸情報の調査、及び各選抜試験により合格した入学者の学修成果追跡調査を実施するとともに、令和7年度の新フンボルト入試及び入試選抜方法の再評価に向けた検討を予定どおり進捗させたことから、自己評価結果を【ii】と判定した。</p>
<p><令和4年次計画【11-2】></p> <p>○ 第3期中期目標期間におけるオープンキャンパスの実施状況について検証を行うとともに、ハイブリット形式等での実施の方法、満足度調査アンケート</p>	<p><令和4年次計画【11-2】の実施状況></p> <p>(1) 学部オープンキャンパスの実施</p> <p>令和4年7月16～18日にかけて実施した学部のオープンキャンパス「OCHADAI OPEN CAMPUS 2022」では、オンラインで学科・講座・コース別の説明会や在学生による相談会、新フンボルト</p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p>及び体制の見直しについて検討する。また、高大接続教育の推進により、附属高校生の大学授業受入を行う。</p> <div data-bbox="185 746 826 1011" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>評価指標に関する目標値・達成水準【11-2】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オープンキャンパスを活用した広報活動の再評価及び参加者満足度の向上：第3期中期目標期間におけるオープンキャンパスの実施状況を検証。 ・附属高校生の大学授業の受講者数：60名 </div>	<p>入試説明会・合格者座談会、受験希望者が学長に直接質問できる「学長への質問コーナー」を開催し、合わせて約3,000名（延べ人数。令和3年度比約1,100名増）が参加した。また、3年ぶりに来場型によるキャンパスツアーを開催し、約840名の受験希望者が参加した。</p> <p>さらに、以下の「評価指標に関する達成状況（オープンキャンパスを活用した広報活動の再評価及び参加者満足度の向上）」に記載しているとおり、令和4年度の学部オープンキャンパスの満足度は、令和3年度を上回る81.4%となった他、アンケート結果の検証等を踏まえ、令和5年度のオープンキャンパスについては、対面開催とする方針を決定した。</p> <p>(2) 高大接続教育の推進</p> <p>附属高等学校との高大連携事業における附属高校生向けの公開授業を開講し、以下の「評価指標に関する達成状況（大学授業の受講者数）」に記載しているとおり、前期延べ65名、後期延べ18名の受講者を受け入れた。</p> <div data-bbox="891 746 2056 1225" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>評価指標に関する達成状況【11-2】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オープンキャンパスを活用した広報活動の再評価及び参加者満足度の向上：令和4年度の学部オープンキャンパスについては、申込み制でキャンパスツアーを3年ぶりに開催した他、特設サイトを設け、学長挨拶、教育紹介、各学科紹介、模擬授業等の動画、VRキャンパスツアー等のコンテンツを掲載した。実施後のアンケート（アンケート総回答者数586名）では、「満足」との回答が81.4%であり、令和3年度のオープンキャンパス実施後アンケートにおける満足度（76%）を上回った。また、第3期中期目標期間、及び令和4年度におけるオープンキャンパスの実施状況について検証を行い、アンケート結果において、対面開催の要望が多く寄せられたことを踏まえ、令和5年度のオープンキャンパスについては、対面開催とすることとした。 <p>・附属高校生の大学授業の受講者数：延べ83名（前期65名、後期18名）</p> </div> <div data-bbox="891 1265 2056 1439" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>令和4年次総合評価室自己評価結果【11-2】：【ii】達成水準を満たしている</p> <p>（判定理由・補足等）：令和4年度の学部オープンキャンパスの満足度が令和3年度と比して向上（76%→81.4%）したこと、及び附属高校生の大学授業の受講者数の目標値「（延べ）60名」を超える「延べ83名」となっていることから、進捗状況を【ii】と判定する。</p> </div>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p><中期計画【K12】></p> <p>○ 21 世紀の社会変化に対応できる高度な専門性と普遍的なスキルを備え実践力を持った人材の養成のため、学士・修士一貫トラック*教育や副専攻プログラムをはじめとする大学院のカリキュラム等の改革を行う。</p> <p>※「学士・修士一貫トラック」＝大学院進学を志願する学生に対し、学部3年次から大学院授業科目の履修や研究指導を行うことにより、学部と大学院の教育を架橋し、専門的な学修を促進する制度。</p> <p><評価指標【S12-1】></p> <p>○ 令和3年度までに整備した学士・修士一貫トラック（9トラック）を活かし、実践力を備えた修了生を第4期中期目標期間最終年度までに27名以上養成。また、令和3年度までに整備した大学院副専攻プログラムを活かし、高度な専門性と普遍的なスキルを身に付ける教育プログラムを履修した学生を第4期中期目標期間最終年度までに435名以上養成。</p> <p><評価指標【S12-2】></p> <p>○ 企業・社会で求められる実践力を身に付けさせるため、インターンシップの企業等件数：13件以上/年、参加者数が20名以上/年。</p>	
<p><令和4年次計画【12-1】></p> <p>○ 「大学院副専攻プログラム」による教育を推進するとともに新たな副専攻プログラムの設置について検討する。また、「学士・修士一貫トラック」による教育を推進し、新たなトラック（現9トラック以外）の導入を検討する。</p>	<p><令和4年次計画【12-1】の実施状況></p> <p>(1) 学士・修士一貫トラック</p> <p>大学院進学を志願する学生に対し、学部3年次から大学院授業科目の履修や研究指導を行うことにより、学部と大学院の教育を架橋し、専門的な学修を促進する制度である「学士・修士一貫トラック」について、令和4年度は同制度を活用した博士前期課程学生18名が修了し、令和4年度の目標値である4名を大幅に上回った。</p> <p>また、令和4年度時点で同制度を導入していた博士前期課程の専攻・コースのうち、ジェンダー社会科学専攻では、現在①文教育学部人文科学地理環境学主プログラム、②文教育学部グローバル文化学主プログラムをそれぞれ履修している学生を学士・修士一貫トラック特別選抜の出願資格としているが、令和5年度実施の入試から、③生活科学部人間生活学科生活社会科学主プログラムを履修している学生も対象とすることを大学院前期博士課程入試実施部会（令和4年7月）にて検討し了承された。それによって令和5年度実施入試から一貫トラック導入は現行の9トラックから10トラックへと拡大されることとなった。</p> <p>(2) 副専攻プログラム</p> <p>領域横断的な教育を推進する「副専攻プログラム」について、令和4年度の履修者数は計48名（①男女共同参画リソース・プログラム21名、②コア・サイエンス・ティーチャープログラム3名、③日本文化論プログラム2名、④キャリア副専攻【公務員】4名、⑤キャリア副専攻【産</p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p data-bbox="197 560 826 603">評価指標に関する目標値・達成水準【12-1】</p> <ul data-bbox="197 608 826 699" style="list-style-type: none"> ・ 学士・修士一貫トラック修了生数：4名 ・ 大学院副専攻プログラム履修者数：72名 	<p data-bbox="893 228 2078 296">学連携】5名、⑥キャリア副専攻【消費者科学】6名、⑦産学連携（実践編）履修者7名）に留まり、令和4年度の目標値である72名を達成することができなかった。</p> <p data-bbox="893 308 2078 491">これを踏まえ、教育担当副学長、人間文化創成科学研究科長、教育企画室長をメンバーとした大学院教員推進WGを立ち上げ、新たなプログラムの設置等も含めた具体的な対応・改善策の検討を進めていくこととした。また、履修者の拡大に向けて、令和5年度新入生オリエンテーションや、学内の学習管理システムである「Moodle」等を通じて、副専攻プログラムの周知を徹底することとした。</p> <p data-bbox="893 560 2056 603">評価指標に関する達成状況【12-1】</p> <ul data-bbox="893 608 2056 715" style="list-style-type: none"> ・ 学士・修士一貫トラック修了生数：18名 ・ 大学院副専攻プログラム履修者数：48名 <p data-bbox="893 762 2056 1007">令和4年次総合評価室自己評価結果【12-1】：【ii】達成水準を満たしている （判定理由・補足等）：「学士・修士一貫トラック修了生数」については、目標値「4名」を大幅に超える「18名」となった一方で、「大学院副専攻プログラム履修者数」については、目標値「72名」を下回る「48名」となったが、新たなプログラム設置の検討を進め、令和5年度新入生オリエンテーションで周知したこと等を総合的に勘案して、自己評価結果を【ii】と判定した。</p>
<p data-bbox="163 1110 521 1137"><令和4年次計画【12-2】></p> <p data-bbox="163 1150 837 1414">○ 第3期中期目標期間中に開始した博士前期課程学生向け就職支援に対する学生の評価や企業の採用動向などを踏まえて改善点を整理しながら、効果的なインターンシップ参加支援等のキャリア支援活動を実施・検討する。また、学生のインターンシップ参加実績を詳しく把握するため、Webで参加報告を受け付けられるようにシステムを整備する。</p>	<p data-bbox="862 1110 1361 1137"><令和4年次計画【12-2】の実施状況></p> <p data-bbox="875 1150 1697 1177">(1) 博士前期課程学生のインターンシップ参加拡大に向けた取組</p> <p data-bbox="875 1190 2087 1414">近年の就職活動がインターンシップ実施後に、早期に選考に入ることが増えていることを踏まえ、学部3年生及び博士前期課程1年生向けのインターンシップ情報提供を強化した。情報提供の件数は、面談した企業にインターンシップ情報の提供を呼びかける等の取組を継続したこともあり、令和3年度193件に対して令和4年度は257件と増加した。この他、学生に対して、産学協働イノベーション人材育成協議会（C-ENGINE）に参画する企業が行う中長期研究インターンシップや、ジョブ型研究インターンシップ推進協議会に関する案内・周知等を行った。</p> <p data-bbox="913 1425 2087 1452">また、インターンシップ参加実績を詳しく確認するため、令和4年6月に学内の学習管理シス</p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p data-bbox="197 483 826 523">評価指標に関する目標値・達成水準【12-2】</p> <ul data-bbox="197 531 826 619" style="list-style-type: none"> ・ インターンシップ企業等件数：13 件 ・ インターンシップ参加者数：20 名 	<p data-bbox="893 228 2080 300">テムである Moodle に「インターンシップ参加報告」を設置し、学生のインターンシップ先や実施日数などについて報告してもらう体制を整備した。</p> <p data-bbox="893 308 2080 419">これらの取組の成果として、令和4年度の博士前期課程学生のインターンシップ参加者数は27名（令和4年度目標値：20名）、インターンシップ企業等件数は33件（令和4年度目標値：13件）となり、いずれも目標値を達成した。</p> <p data-bbox="893 483 2058 523">評価指標に関する達成状況【12-2】</p> <ul data-bbox="893 531 2058 635" style="list-style-type: none"> ・ インターンシップ企業等件数：33 件 ・ インターンシップ参加者数：27 名 <p data-bbox="893 691 2058 850">令和4年次総合評価室自己評価結果【12-2】：【ii】達成水準を満たしている （判定理由・補足等）：「インターンシップ企業等件数」については、目標値「13件」を上回る「33件」、「インターンシップ参加者数」については目標値「20名」を上回る「27名」となっていることから、自己評価結果を【ii】と判定した。</p>
<p data-bbox="163 956 432 987"><中期計画【K13】></p> <p data-bbox="163 995 2080 1107">○ 深い専門性の涵養とともに、異なる分野の研究との協働を通じて、産学官の諸分野で活躍できる人材を養成するため、生活工学共同専攻が進める「暮らしや社会のための開発研究」等や自主協働研究 Project Based Team Study を取り入れた教育を推進する。さらに、優秀な人材に対して「科学技術イノベーション創出に向けた大学フェローシップ創設事業」に基づいた支援を実施し、社会の多様な方面で求められ、活躍できる人材の養成を行う。</p> <p data-bbox="197 1115 488 1147"><評価指標【S13-1】></p> <p data-bbox="197 1155 2080 1219">○ 文部科学省採択事業「科学技術イノベーション創出に向けた大学フェローシップ創設事業」の採用を毎年度6名、支援を受けた学生の成果に関する調査を毎年度実施。</p> <p data-bbox="197 1227 488 1259"><評価指標【S13-2】></p> <p data-bbox="197 1267 2080 1378">① 自主協働研究（「PBTSⅠ・Ⅱ」（Project Based Team Study）科目の履修者数：7名以上/年。 ② 第4期中期目標期間最終年度までに、生活工学共同専攻、PBTS等の特色ある教育プログラムから派生した産学官との連携件数が3件以上、シンポジウム・ワークショップを3件以上開催、知的財産権を3件以上申請。</p>	
<p data-bbox="163 1406 521 1437"><令和4年次計画【13-1】></p>	<p data-bbox="871 1406 1364 1437"><令和4年次計画【13-1】の実施状況></p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p>○ 文部科学省採択事業「科学技術イノベーション創出に向けた大学フェローシップ創設事業」の支援を受けた学生の研究活動の進捗状況と、進路決定に関する調査を行う。</p> <div data-bbox="185 550 826 933" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>評価指標に関する目標値・達成水準【13-1】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「科学技術イノベーション創出に向けた大学フェローシップ創設事業」採用者数：6名 ・「科学技術イノベーション創出に向けた大学フェローシップ創設事業」による支援を受けた学生の成果について、以下を調査する。 <ol style="list-style-type: none"> ①研究業績：研究論文、学会発表、共同研究等 ②キャリア形成：セミナー、インターンシップ等への参加、TAなどの業務経験など </div>	<p>(1) お茶大アカデミック・プロダクション大学院生フェローシップを通じた支援</p> <p>文部科学省「科学技術イノベーション創出に向けた大学フェローシップ創設事業」に採択（令和3年度）されたことを踏まえ設置した「お茶大アカデミック・プロダクション大学院生フェローシップ」（年額200万円支給）について、令和4年度は6名の学生を採用した。また、以下の「評価指標に関する達成状況（「科学技術イノベーション創出に向けた大学フェローシップ創設事業」による支援を受けた学生の成果についての調査）」に記載しているとおり、支援を受けた学生の研究活動の進捗状況と、進路決定に関する調査を実施した。</p> <div data-bbox="889 550 2056 1262" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>評価指標に関する達成状況【13-1】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「科学技術イノベーション創出に向けた大学フェローシップ創設事業」採用者数：6名 ・「科学技術イノベーション創出に向けた大学フェローシップ創設事業」による支援を受けた学生の成果についての調査：令和4年11～12月にかけて、お茶大アカデミック・プロダクション大学院生フェローシップに採用されている博士後期課程3年生の6名を対象に個別面談を行い、令和5年度の学位取得見込みや就職進路希望、現在の研究活動・キャリア形成に伴う活動について調査を行い、以下の調査結果が得られ、今後の支援に活用していくこととした。 <p>【調査結果概要】</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 就職進路希望については、アカデミア希望者：1名、アカデミア・企業希望者：3名、アカデミア（海外）他希望者：2名である。 (2) 海外ポストも視野に入れて活動している学生が3名いる。 (3) 国際学会や出張の場を利用して具体的な海外研究室とのコネクションづくりを通し、研究業績だけでなく、キャリア形成に向けての準備を着実に積み重ねている。 (4) 6名中5名は3年での学位・修了を目指し、研究論文や学会発表、共同研究などを通し、順調に研究活動に励んでいる。残る1名は分野の特性から最短5年が通例であり、その最短を目指している。 </div> <div data-bbox="889 1302 2056 1436" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>令和4年次総合評価室自己評価結果【13-1】：【ii】達成水準を満たしている</p> <p>（判定理由・補足等）：「お茶大アカデミックプロダクション大学院生フェローシップ」の採用者数について目標値「6名」を達成するとともに、支援を受けた学生の成果について</p> </div>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果						
	<p>予定どおり調査を実施し、研究活動等が進捗していることを確認できたことから、自己評価結果を【ii】と判定した。</p>						
<p><令和4年次計画【13-2】></p> <p>○ 理工系の実践力を広げるための PBTS 科目の履修を、博士後期課程全体に周知して推進するとともに、カリキュラム修了生の進路調査を行い、かつ、修了生と在学生間の情報共有を進めていくことでキャリアパス事例の収集に努める。また、教育の成果・効果についても Web を通して積極的に情報発信する。さらに、生活工学共同専攻において、専攻説明会をオンデマンド型で常時閲覧できる方式として入学者確保に注力する。それらの活動を通じ生活工学におけるエコシステムを充実させる。</p>	<p><令和4年次計画【13-2】の実施状況></p> <p>(1) PBTS 科目の取組</p> <p>異なる専門分野の学生がプロジェクトチームを編成し、融合的・総合的な課題を発見し解決していく自主協働研究「PBTS (Project Based Team Study)」科目について、オンライン説明会の開催等により周知を行った結果、令和4年度は計8名の学生 (PBTS I : 7名、PBTS II ・ 1名) が履修するとともに、「PBTS I」の履修者7名で2チームを編成し研究活動を推進した。また、令和5年2月には修了生の追跡調査等を行い、キャリアパス事例の収集を行った。</p> <p>■ 令和4年度の PBTS 2 チームの活動内容の概要</p> <table border="1" data-bbox="887 738 2056 1054"> <thead> <tr> <th data-bbox="887 738 1077 778">チーム名称</th> <th data-bbox="1077 738 2056 778">活動内容の概要</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="887 778 1077 898">Elderly and Childcare Team</td> <td data-bbox="1077 778 2056 898">高齢者と子育て家庭とのマッチングシステムを構築することで、高齢者の社会での活躍の場を提供するとともに、子育て家庭の親の支援を行うことを目指し、ビジネスモデルの設計を推進している。</td> </tr> <tr> <td data-bbox="887 898 1077 1054">BORROWING AND LENDING</td> <td data-bbox="1077 898 2056 1054">東京での学生生活には金銭的コストが掛かってしまう現状について、学生間での生活用品のリサイクルやリユースの取り次ぎサイトや仲介サイトを構築し、学生の生活用品に掛かるコストの削減と、環境負荷の軽減に寄与することを目指した研究活動を推進している。</td> </tr> </tbody> </table> <p>(2) 生活工学共同専攻における取組</p> <p>奈良女子大学との共同専攻として平成 28 年度に設置した生活工学共同専攻において、専攻説明会を常時閲覧できるオンデマンド説明会ビデオをウェブサイトに掲載し、令和3年度に引き続き入学者確保に注力した。また、生活工学共同専攻に所属する学生の研究成果として、第 60 回高分子と水に関する討論会学生奨励優秀賞「題目：界面活性剤水溶液中の PVA ゲルの膨潤挙動」(博士前期課程2年生)、日本建築学会関東支部大会優秀論文賞「題目：介護施設における高齢者の転倒・転落事故と季節変動の関連 ―転倒・転落事故に関するヒヤリハット・事故記録の集計・テキストマイニングを通して―」(博士後期課程3年生)等の成果を上げた。</p>	チーム名称	活動内容の概要	Elderly and Childcare Team	高齢者と子育て家庭とのマッチングシステムを構築することで、高齢者の社会での活躍の場を提供するとともに、子育て家庭の親の支援を行うことを目指し、ビジネスモデルの設計を推進している。	BORROWING AND LENDING	東京での学生生活には金銭的コストが掛かってしまう現状について、学生間での生活用品のリサイクルやリユースの取り次ぎサイトや仲介サイトを構築し、学生の生活用品に掛かるコストの削減と、環境負荷の軽減に寄与することを目指した研究活動を推進している。
チーム名称	活動内容の概要						
Elderly and Childcare Team	高齢者と子育て家庭とのマッチングシステムを構築することで、高齢者の社会での活躍の場を提供するとともに、子育て家庭の親の支援を行うことを目指し、ビジネスモデルの設計を推進している。						
BORROWING AND LENDING	東京での学生生活には金銭的コストが掛かってしまう現状について、学生間での生活用品のリサイクルやリユースの取り次ぎサイトや仲介サイトを構築し、学生の生活用品に掛かるコストの削減と、環境負荷の軽減に寄与することを目指した研究活動を推進している。						

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<div data-bbox="185 1010 826 1316" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>評価指標に関する目標値・達成水準【13-2】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自主協働研究（「PBTS I・II」(Project Based Team Study) 科目の履修者数：7名 ・生活工学共同専攻、PBTS 等の特色ある教育プログラムから派生した産学官との連携数：1件 ・シンポジウム・ワークショップの開催数：1件 ・知的財産権申請件数：1件 </div>	<p>(3) 生活工学共同専攻、PBTS 等の特色ある教育プログラムから派生した産学官との連携 生活工学共同専攻、PBTS 等の特色ある教育プログラムから派生した産学官との連携として 令和5年1月に東京大学との連携及び協力に関する包括協定を締結した（産学官の「学」の連携）。本取組は、生活工学共同専攻構成員であるイノベーションを担当する副学長が社会イノベーションの観点から推進したものであり、令和5年度からの東京大学との共同科目の設置等に繋がった。</p> <p>(4) シンポジウム・ワークショップの開催 教育の成果・効果の発信の取組として、令和4年度は計2件のセミナーを開催した。</p> <p>■ PBTS（グローバル理工学副専攻）関連：「AI と DS で変わる - 未来のクルマの作り方」自動車技術セミナー（令和4年5月17日） https://www.dc.ocha.ac.jp/s/g_scitech/news/d010505.html</p> <p>■ 生活工学共同専攻関連：環境工学特別セミナー「下水って情報の宝庫？ ～下水疫学. 下水からわかる様々なこと～」（令和4年10月24日） https://www.dc.ocha.ac.jp/d/hce/news/2022/d011423.html</p> <p>(5) 知的財産権の申請 令和4年度は、生活工学共同専攻関連の教員が計2件の知的財産権の申請を行った。</p> <div data-bbox="887 1010 2056 1326" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>評価指標に関する達成状況【13-2】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自主協働研究（「PBTS I・II」(Project Based Team Study) 科目の履修者数：8名 ・生活工学共同専攻、PBTS 等の特色ある教育プログラムから派生した産学官との連携数：1件 ・シンポジウム・ワークショップの開催数：2件 ・知的財産権申請件数：2件 </div> <div data-bbox="887 1369 2056 1461" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>令和4年次総合評価室自己評価結果【13-2】：【ii】達成水準を満たしている (判定理由・補足等)：「自主協働研究（「PBTS I・II」(Project Based Team Study) 科</p> </div>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
	<p>目の履修者数)、「生活工学共同専攻、PBTS 等の特色ある教育プログラムから派生した産学官との連携数」、「シンポジウム・ワークショップの開催数」、「知的財産権申請件数」の目標値をいずれも達成したことから、自己評価結果を【ii】と判定した。</p>
<p><中期計画【K14】></p> <p>○ お茶大女性リーダー育成塾（德音塾）、民間企業との連携や寄附による社会連携講座等の社会人女性のためのリカレント講座を開講し、SDGs、データサイエンス、企業戦略・経営、人文科学、保育・幼児教育等の、女性のキャリアアップのために必要となる基礎的な教養から高度な専門性にわたる幅広い知識を身に付けることができる機会を設け、女性人材の継続的な養成に貢献するとともに、その成果を社会に発信する。</p> <p><評価指標【S14-1】></p> <p>○ 社会人を対象とした講座（お茶大女性リーダー育成塾（德音塾）、社会連携講座など）の受講者数が 120 名以上/年、及びその受講生の満足度に関するアンケート調査結果について、第 4 期中期目標期間初年度と比較して第 4 期中期目標期間最終年度における満足度の向上。</p>	
<p><令和 4 年次計画【14-1】></p> <p>○ 德音塾と社会連携講座のカリキュラムをサイエンス系リテラシーに向けて充実させ、SDGs、データサイエンス、ジェンダード・イノベーションといった課題を重点化する等、高度なリカレント教育をカバーする先行的試みを行う。成果の社会発信について、企業向けパンフレットの発行、社会連携講座「女性活躍促進連携講座」のコンソーシアムを利用した企業懇談会を企画する。</p>	<p><令和 4 年次計画【14-1】の実施状況></p> <p>(1) お茶大女性リーダー育成塾：德音塾（きいんじゅく）</p> <p>キャリアアップを目指す女性のためのリカレント講座として平成 26 年度に開講した「お茶大女性リーダー育成塾：德音塾」（以下、德音塾）については、令和 3 年度に、企業等で指導的立場に就くことをめざす女性だけでなく、多様な分野・立場でリーダーシップを発揮することをめざす女性を応援するための講座としてリニューアルし、「女性のエンパワーメントとリーダーシップ講座」、「お茶大プロフェッショナルレクチャー」、「ビジネス講座」の 3 講座による構成としている。開講 8 年目となる令和 4 年度については、プロフェッショナルレクチャーにおいて、食糧生産、食糧消費、資源循環、生物学といったサイエンス系リテラシーの講義を増設するとともに、生活経済学でジェンダード・イノベーションに関連する講義を新たに設けた。令和 4 年度の受講者数は延べ 230 名（実人数 71 名）となり、平成 26 年度の開講以来最多となった。</p> <p>また、令和 4 年度中に德音塾の科目を 1 科目以上受講した塾生を対象に実施した德音塾受講生アンケート（対象者 71 名、回答者 23 名、回収率 32.3%）において、アンケート項目「幅広い仕事に活用できる知識・技能の習得」について「特に役立った」と回答した者の比率は 47.8%となった。講座全体の満足度を測る指標となる「受講者全体（実人数）のうち、2 講座以上を受講した者（実人数）の割合」については、69.0%（2 講座以上を受講した者 49 名（実人数）／受講者全体 71 名（実人数））となった。</p> <p>(2) 社会連携講座「女性活躍促進連携講座」</p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<div data-bbox="185 651 826 1034" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>評価指標に関する目標値・達成水準【14-1】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 社会人を対象とした講座（お茶大女性リーダー育成塾（微音塾）、社会連携講座など）の受講者数：120名 ・ 上記受講生の満足度に関するアンケート調査結果において、次の結果を得る。 <ul style="list-style-type: none"> ①受講効果（スキル向上・昇進／転職他）自覚：30% ②受講に満足：50% </div>	<p>民間企業の社員等と本学学生が協働し、女性活躍促進のための課題解決を図る社会連携講座「女性活躍促進連携講座」（令和元年度開始）について、令和4年度は年2回（令和4年11月、令和5年1月）の講座を開催し、民間企業11社から延べ22名（うち社会人女性17名）の参加があった。</p> <p>（3）保育・子育て支援ラーニングプログラム</p> <p>文部科学省の平成30年度「職業実践力育成プログラム」（BP）に認定されている「保育・子育て支援ラーニングプログラム」について、令和4年度は延べ114名（基礎科目100名、発展的科目12名、課題科目2名）が履修し、履修証明（2年以内に120時間以上受講した場合に授与）を2名に授与した。</p> <div data-bbox="889 651 2056 1090" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>評価指標に関する達成状況【14-1】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 社会人を対象とした講座（お茶大女性リーダー育成塾（微音塾）、社会連携講座など）の受講者数：延べ361名（微音塾延べ230名、社会連携講座「女性活躍促進連携講座」延べ17名、保育・子育て支援ラーニングプログラム延べ114名） ・ 上記受講生の満足度に関するアンケート調査結果：微音塾受講生に対するアンケートにおいて以下の結果を得た。 <ul style="list-style-type: none"> ①受講効果（スキル向上・昇進／転職他）自覚：47.8%（アンケートの設問「幅広い仕事に活用できる知識・技能の習得」について「特に役立った」と回答した者の比率） ②受講に満足：69.0%（受講者全体（実人数：71名）のうち、2講座以上を受講した者（実人数：49名）の割合） </div> <div data-bbox="889 1129 2056 1342" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>令和4年次総合評価室自己評価結果【14-1】：【iii】達成水準を大きく上回っている</p> <p>（判定理由・補足等）：社会人を対象とした講座の受講者数が目標値「（延べ）120名」を大きく上回る「延べ361名」となったこと、及び微音塾受講生アンケートにおける「受講効果」が目標値「30%」を上回る「47.8%」、「満足度」が目標値「50%」を上回る「69.0%」となったことから、自己評価結果を【iii】と判定した。</p> </div>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p><中期計画【K15】></p> <p>○ 社会情勢が変化しても、本来の留学の目的である学生の国際力の向上、人的ネットワークの拡大を考え、実際に留学する経験を持つ人材を増やすとともに、海外の研究・教育機関とのオンラインプログラムの受講を推進する。さらに、本学で行うサマープログラム、オンライン授業の活用等により学生の語学力や国際感覚を醸成する。</p> <p><評価指標【S15-1】></p> <p>○ 海外大学との大学間交流協定大学をこれまでの伸びを勘案して第4期中期目標期間最終年度には合わせて100大学以上と締結。</p> <p><評価指標【S15-2】></p> <p>○ 学部卒業時に留学経験を持つ学生の比率を第3期中期目標期間の平均実績を上回る数値として24%と設定。</p> <p><評価指標【S15-3】></p> <p>○ 学部卒業時に外国語カスタンダード*を満たす学生の比率を第3期中期目標期間の平均実績を上回る数値として20%と設定。</p> <p>※「外国語カスタンダード」＝語学のコミュニケーション能力別のレベルを示す国際標準規格である「CEFR」に基づいて設定した基準レベルを達成する者 【英語】基準) CEFR B2 レベル、【中国語】基準) CEFR C1 レベル、【韓国語】基準) CEFR B2 レベル、【フランス語】基準) CEFR B1 レベル、【ドイツ語】基準) CEFR B1 レベル</p> <p><評価指標【S15-4】></p> <p>○ 海外の教育研究機関との国際交流プログラム数（オンライン含む）が12件以上/年、受講者数が243名以上/年、受講者のアンケート調査結果について、第4期中期目標期間初年度と比較して第4期中期目標期間最終年度における満足度の向上。</p>	
<p><令和4年次計画【15-1】></p> <p>○ 新型コロナウイルス収束後の交流のあり方について、海外の協定大学と協議するとともに、留学フェアに参加し、新たな協定校を開拓する。また、オンライン交流の利点を積極的に活用し交流のあり方を模索し、オンラインでの交流を定着させる。</p>	<p><令和4年次計画【15-1】の実施状況></p> <p>(1) 協定校の拡大・留学生獲得に向けた取組</p> <p>新型コロナウイルス感染症収束後の協定校の新規開拓に向けて、世界の大学の国際交流担当者が集うNAFSA総会(米)等へ積極的に参加するとともに、コロナ後の交流再開と発展のために5ヵ国9協定校と今後の交流のあり方について協議を行った。</p> <p>また、日本学生支援機構(JASSO)や国費留学生予備教育実施大学等が主催するオンライン留学フェア、日中大学フェア・フォーラム等に参加し、本学の概要や留学環境、魅力等を紹介することにより、新規の受入留学生獲得に向けた広報に取り組んだ。</p> <p>(2) オンライン等による国際交流の推進</p> <p>令和4年度も引き続きオンラインを積極的に活用した交流を推進し、海外の研究者を招いた国際交流講演会等を開催した。また、オンラインツールを利用した日米、日韓の国際合同授業、学生主導の留学生交流イベント等、日常的な国際交流活動を実施し、キャンパスのグローバル化を進めた。海外渡航方針の改定による実渡航での留学再開後も、オンラインならではの特性を活かし、オンライン留学やオンラインでの短期研修を実渡航と併せて継続実施した。</p>

中期計画／評価指標／年次計画

年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果

さらに、入国制限の影響で渡日が遅れた留学生に対するフォロー等の取組として、令和3年度に構築したオンライン授業体制を活用し、留学生の状況に対応した授業を実施した。

また、令和4年度は文部科学省「大学の世界展開力強化事業～COIL型教育を活用した米国等の大学間交流形成支援～」の最終年度に当たり、国際オンライン協働学習「COIL」(Collaborative Online International Learning)を活用した授業の拡大に向けた取組として、日本語及び英語で作成した「COIL導入ガイドブック」を学内に配付したほか、ヴァッサー大学(米)、イーストアングリア大学(英)、ブルゴス大学(スペイン)、釜山外国語大学(韓)等との合同授業を行った。加えて、ヴァッサー大学とのオンラインでの国際学生フォーラム(参加者:本学学生8名、海外の学生8名)やゴンザガ大学(米)での短期研修を実施するなど、積極的な交流を推進した。



▲「COIL 導入ガイド」(日本語版)

(https://www.cf.ocha.ac.jp/coil/j/body/d009300_d/fil/COIL_Guidebook_ja.pdf)

(3) 大学の世界展開力強化事業「グローバルリーダー育成のための「女子大学発」実学型 EDI プログラム」によるグローバルリーダーの育成

公平性(Equity)、多様性(Diversity)、包摂性(Inclusion)を兼ね備えたグローバルリーダー育成をめざす、大学の世界展開力強化事業「グローバルリーダー育成のための「女子大学発」実学型 EDI プログラム」(令和4～8年度。以下、「EDI プログラム」という。)の採択を受け、連携大学担当者を対象とした本学の留学説明会の開催に向けて、募集要項やカリキュラム、本学紹介動画の作成を開始した。また、協力大学とは、EDI プログラム実施のための協定書を取り交わ

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p data-bbox="188 320 826 427"> 評価指標に関する目標値・達成水準【15-1】 ・海外大学との大学間交流協定締結数：90 大学 </p>	<p data-bbox="887 316 2056 427"> 評価指標に関する達成状況【15-1】 ・海外大学との大学間交流協定締結数：90 大学 </p> <p data-bbox="887 467 2056 600"> 令和4年次総合評価室自己評価結果【15-1】：【ii】達成水準を満たしている （判定理由・補足等）：協定校の新規開拓に取り組み、目標値と同数の「90 大学」との締結を達成したため、自己評価結果を【ii】と判定した。 </p>
<p data-bbox="165 703 833 1046"> <令和4年次計画【15-2】> ○ 学期初めの国際ショナルウィーク、留学説明会、個別相談、受入留学生との交流会を開催し、留学を促進するとともに、留学経験者による体験談の報告書、及び留学ガイドの発刊を行う。また、実渡航の留学だけでなく、オンライン（COIL 含む）による海外プログラムを充実させ、経済的、身体的な理由等で実渡航ができない学生の留学機会を構築する。 </p>	<p data-bbox="869 703 2078 1358"> <令和4年次計画【15-2】の実施状況> （1）留学奨励のための取組 短期研修（夏・春）及び長期交換留学促進のため留学促進月間を設け、国際教育センター等において、各種留学説明会（計 18 回、参加者：748 名）や、各種個別留学相談・交流会等（留学経験者による相談会（計 4 回）、留学中の学生による座談会（計 6 回）、受入留学生との交流会（計 3 回）、日常的な対面での個別相談やその他のオンライン相談）を開催した。 留学の成果については、留学報告書をウェブサイトや冊子にまとめ、SNS、説明会及び個別相談等を通じて学生に周知したほか、論文（1 件）、口頭発表（1 件）及び講演（5 件）等により発信した。また、実施後のアンケート等を元に留学や国際交流等の取組成果の検証を行った。 </p> <p data-bbox="880 1094 2078 1358"> （2）留学機会の構築 「大学の世界展開力強化事業～COIL 型教育を活用した米国等の大学間交流形成支援～」の取組として、オンラインにより、海外協定校との講演会や第 12 回国際学生フォーラム等のイベントを開催するとともに、個別授業における COIL 活用等、海外協定校等との交流の活性化や留学促進の機運作りに継続して取り組んだ。また、外国の大学教員による講演・講義等の開催や、海外の学生とオンライン交流（海外協定校とのオンライン交流会：計 12 回）を実施する等、コロナ禍においても留学に近い体験ができるよう環境作りを進めた。 </p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p data-bbox="188 225 826 272">評価指標に関する目標値・達成水準【15-2】</p> <p data-bbox="188 274 826 330">・学部卒業時に留学経験を持つ学生比率：24%</p>	<p data-bbox="889 225 2051 272">評価指標に関する達成状況【15-2】</p> <p data-bbox="889 274 2051 330">・学部卒業時に留学経験を持つ学生比率：21.6%</p> <p data-bbox="889 368 2051 852"> 令和4年次総合評価室自己評価結果【15-2】：【i】達成水準を満たしていない （判定理由・補足等）：コロナ禍においても継続してオンライン等のツールを活用することにより留学促進に取り組んだが、令和4年度卒業生を含む在學生は最も新型コロナウイルス感染症拡大による海外渡航制限等の影響を受けた世代に該当し、令和4年夏以降、渡航制限は緩和されたものの、なお渡航機会はコロナ禍以前の水準に回復しておらず、参加費用や渡航費用の高騰による経済的な負担も大きかったことから、学部卒業時に留学経験を持つ学生比率は「21.6%」に留まった。目標値「24%」を達成できなかったことにより、自己評価結果を【i】と判定した。 なお、本評価指標に関する実績については、令和3年度に派遣開始した学生の件数：110件に対して令和4年度：202件となり、派遣学生件数の増加傾向が見られている。さらに、令和5年度には大学の世界展開力事業「EDIプログラム」による奨学金付きの実渡航を開始することもあり、「卒業時に留学経験を持つ学生比率」実績も回復する見込みである。 </p>
<p data-bbox="165 956 517 987"><令和4年次計画【15-3】></p> <p data-bbox="165 995 837 1450">○ 外国語教育センター・学務課・国際教育センター及び外国語授業担当教員の連携を強化し、Moodle・Slack・Zoomを利用したオンラインでの外国語学習の機会を増加させるとともに、Language Study Commons (LSC)における対面の学習支援体制を充実させ、外国語力スタンダードを満たす学生の割合の上昇を目指す。特にオンラインと対面による外国語交流会、検定試験対策や留学準備に関する外国語学習相談の機会を拡充する。学生の履修状況やTOEFL-ITPなどの外国語試験の結果を踏まえ、卒業後の就職・進学・大学院レベルでの留学を見据えて学習支援を促進する。</p>	<p data-bbox="866 956 1359 987"><令和4年次計画【15-3】の実施状況></p> <p data-bbox="882 995 1554 1027">(1) オンラインによる外国語検定及び学習機会の増加</p> <p data-bbox="882 1035 2078 1182">令和4年4月から授業形態が全面对面授業となりコロナ禍以前の活動様式に戻っているが、引き続きオンラインによる試みを取り入れつつ、外国語教育センター・学務課・国際教育センター・外国語授業担当教員が連携することにより、グローバル人材育成のための学習支援体制を更に強化した。</p> <p data-bbox="882 1190 2078 1299">令和4年度は、4月に新入生向けTOEFL ITPをペーパー版で実施したほか、9月に外国語力スタンダード増強を目的としてTOEIC-LRデジタル版を実施し、124名が受検した。令和5年1月には令和3年度に引き続きTOEFL-ITPデジタル版を実施し、102名が受検した。</p> <p data-bbox="882 1307 2078 1450">さらに、令和4年度新規の試みとして、令和5年2月に、EDIプログラムでの留学を検討している1～3年生を対象に、IELTS対策講座・TOEFL iBT対策講座をオンラインで開催した（IELTSテストセンター実施、20名ずつ5日間開催）。また、講座終了後はIELTSプロGRESS・チェック及びTOEFL ITPにより対策講座の効果を計測した。</p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p data-bbox="197 1185 824 1225">評価指標に関する目標値・達成水準【15-3】</p> <p data-bbox="197 1241 824 1313">・学部卒業時に外国語力スタンダードを満たす学生比率：20%</p>	<p data-bbox="880 268 1552 300">(2) 外国語教育センターによる外国語学習支援の取組</p> <p data-bbox="880 308 2078 531">外国語教育センターにおける外国語学習支援の取組として、留学準備を行っている学生に対して、外国語学習相談（オンライン及び対面）及び外国語交流会「語学カフェ」（対面）により自律的語学学習をサポートするとともに、交換留学・ACT プログラム・サマープログラムへの参加の推奨や語学講座の紹介等を実施した。また、新フンボルト入試合格者に対する入学前教育として、英語ライティング指導ツール「Criterion」を使用した英文エッセイ作成のサポートを行った。</p> <p data-bbox="880 539 2078 651">英語以外の外国語教育拡充の一環として昼休みに開催している「語学カフェ」（オンライン及び対面）では、令和4年度は5ヶ国語（英語・フランス語・中国語・ロシア語・韓国語）により計141回開催、延べ727名が参加した（令和4年5月～令和5年3月）。</p> <p data-bbox="880 659 2078 802">また、検定試験の面接対策、外国語による学会発表、留学等に関して、1対1の形式で相談を希望する学生に対しても、対面とオンラインの両方で外国語学習相談を行い、センター講師及び各言語や留学事情に精通する大学院生TAが相談に応じた（令和4年5月～令和5年3月で計229回実施）。</p> <p data-bbox="880 810 2078 962">さらに、外国語検定試験を受検する学生のスコア向上を支援するため、令和4年度は初めての試みとしてTOEIC-LR デジタル版の実施の前に8回のTOEIC 対策講座を行い、計81名が参加したほか、TOEFL ITP に向けた対策講座を4回開催し、計56名が参加した。また、独語検定3、4級対策講座を計22回、2、3級対策講座を計28回行い、延べ88名が参加した。</p> <p data-bbox="880 970 2078 1121">その他の取組として、外国語教育センターでは、大学院生TAが様々な外国語の効果的な学習方法や学習教材の勧め等を、学修管理システム「Moodle」にスタッフブログとして掲載して語学学習支援を行っている。計43件の投稿に対して1,129回の閲覧を得ており、注目度が高いことが伺える。</p> <p data-bbox="902 1185 2056 1225">評価指標に関する達成状況【15-3】</p> <p data-bbox="902 1241 2056 1313">・学部卒業時に外国語力スタンダードを満たす学生比率：18.5%（外国語力スタンダード達成者：89名/卒業予定者481名）</p> <p data-bbox="902 1377 2056 1449">令和4年次総合評価室自己評価結果【15-3】：【i】達成水準を満たしていない （判定理由・補足等）：コロナ禍により、語学検定試験の受検機会や学習機会が限定されて</p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
	<p>いた影響等もあり、学部卒業時に外国語力スタンダードを満たす学生比率は「18.5%」となった。目標値「20%」を達成できなかったことにより、自己評価結果を【i】と判定した。なお、外国語教育センターを中心とした様々な取組により、本評価指標について目標値に近い実績を上げていることに加えて、学生の学習環境は令和4年度からコロナ禍前の状況に戻りつつあるため、対面での学習相談や交流の機会が更に増えることが予測され、今後は学生のこれまで以上の学習意欲の向上が期待できる。目標値の達成のため、語学検定試験対策講座の開催や外国語交流会の活動に更に力を入れるなど、学生の自主的な学習意欲を高める取組を引き続き実施することとしている。</p>
<p><令和4年次計画【15-4】></p> <p>○ 従来のオンラインによる国際交流プログラムについて、恒常的な見直しと改善を行い、新型コロナウイルス収束後の発展的継続のために学生のニーズに合わせて、新たな国際交流プログラムの開拓に努める。コロナ禍で滞っていた実渡航を伴う国際交流プログラムを回復させ、コロナ禍以前のレベルにまで戻すとともに、更なる発展に向けた体制を整える。国際交流プログラムの受講学生の満足度調査の調査手法を構築し、実施する。</p>	<p><令和4年次計画【15-4】の実施状況></p> <p>(1) 国際交流プログラムの新規開拓及び実施</p> <p>新たな国際交流プログラムとして、令和4年度大学の世界展開力強化事業「グローバルリーダー育成のための「女子大学発」実学型 EDI プログラム」(EDI プログラム) が採択されたことにより、令和5年度以降に本格的に交流を活発化させるため、本学学生や海外協力大学に対する説明会等の準備を開始した。</p> <p>また、令和4年度は実渡航による交流や交換留学(派遣・受入)を再開し、夏季短期プログラムとして啓明大学(韓)、梨花女子大学(韓)、マンチェスター大学(英)、ロンドン大学 SOAS(英)、マギル大学(カナダ)、カリフォルニア大学デイビス校(米)等に計35名の学生が参加した他、春季短期プログラムとしてハル大学(英)、開南大学(台湾)に計14名が参加した。さらに、令和5年2月から3名の学生がニューサウスウェールズ大学(オーストラリア)の海外実習に参加している。実渡航に際しては、令和3年度に策定した「新型コロナウイルス感染症流行下における海外留学渡航方針」について、文部科学省の方針等を踏まえて一部内容を改定するとともに、ウェブサイトへの掲載等により渡航方針の周知を徹底した。加えて、留学生危機管理サービス(OSSMA)の運用要項を改定してサービスの適用対象を広げ、学生及び教職員に広く周知したことで、コロナ禍においても安心して海外渡航ができる環境作りに努めた。</p> <p>その他、オンラインでサマープログラムを開催し、学生の短期留学・長期留学に向けた意識の醸成に寄与した(サマープログラムに関する実績については、【16-3】(p.60)を参照)。</p> <p>(2) 満足度調査の実施</p> <p>国際交流プログラム受講学生の満足度を調査するため、国際交流を授業として開講しているも</p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<div data-bbox="185 395 826 660" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>評価指標に関する目標値・達成水準【15-4】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 海外の教育研究機関との国際交流プログラム数（オンライン含む）：12 件 ・ 上記受講者数：243 名 ・ 国際交流プログラムに関する満足度の向上：満足度調査の手法を構築し、実施。 </div>	<p>のは、実施後にその成果や課題に関するレポートを提出することとした。また、国際教育センターが主催する国際交流プログラムでは、実施後にアンケートを行い、成果や課題について確認した。</p> <div data-bbox="891 395 2056 1425" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>評価指標に関する達成状況【15-4】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 海外の教育研究機関との国際交流プログラム数（オンライン含む）：23 件 ・ 上記受講者数：約 563 名 ・ 国際交流プログラムに関する満足度の向上：令和 4 年度については、以下の 5 つのプログラムについて満足度アンケートを実施し、いずれも高い満足度を得ることができた。 <p><令和 4 年度アンケート結果の概要></p> <p>①サマープログラム</p> <p><Subject Based Courses></p> <ul style="list-style-type: none"> ○留学生（参加者 16 名、回答者 7 名） <ul style="list-style-type: none"> ・ 非常に満足 57%（4 名） ・ 満足 43%（3 名） ○日本人（参加者 37 名、回答者 11 名） <ul style="list-style-type: none"> ・ 非常に満足 27%（3 名） ・ 満足 64%（7 名） ・ 許容範囲 9%（1 名） <p><日本語クラス></p> <ul style="list-style-type: none"> ○留学生（参加者 14 名、回答者 13 名） <ul style="list-style-type: none"> ・ 非常に満足 62%（8 名） ・ 満足 38%（5 名） <p>②マギル大学研修（参加者 4 名、回答者 2 名）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ とても満足：50%（1 名） ・ 満足：50%（1 名） <p>③カリフォルニア大学デイビス校研修（参加者 1 名、回答者 1 名）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ とても満足 100%（1 名） <p>④チェンマイ大学研修（参加者 10 名、回答者 8 名）</p> </div>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
	<p>・とても満足：62.5%（5名） ・満足：37.5%（3名） ⑤文化教室 ・前期4教室、後期6教室の参加者を総括した満足度：98.7%（76名/77名）</p> <p>令和4年次総合評価室自己評価結果【15-4】：【ii】達成水準を満たしている （判定理由・補足等）：オンライン及び実渡航も含む国際交流プログラムの実施を促進し、目標値「12件」、「243名」を上回る「23件」のプログラムを実施し、「約563名」が受講・参加した。また、国際交流プログラムの満足度調査については、5件のプログラムの満足度に関するアンケートを行うことにより、いずれも100%に近い高い満足度を示し、第4期中期目標期間においては本調査を継続的に実施していくこととした。国際交流プログラム数及び参加者数に関する評価指標の目標値を達成したこと、国際交流プログラムの満足度調査に関する評価指標を達成したことにより、自己評価結果を【ii】と判定した。</p>
<p><中期計画【K16】></p> <p>○ 優れた留学生の受入を促す取組として、留学生との卒業・修了後のネットワーク化を進める。外国語で開講する授業等の拡充やオンラインも活用した教育研究環境のグローバル化を進めるとともに、外国人の正規生、研究生、日本語日本文化研修留学生、交換留学生及び短期留学生の受入とその拡大を推進し、外国人留学生数の割合の増加を図る。</p> <p><評価指標【S16-1】></p> <p>○ 第4期中期目標期間最終年度までに、外国人留学生の卒業・修了後の本国における外国人留学生同窓会の会員数を450名以上。</p> <p><評価指標【S16-2】></p> <p>○ 全学生に占める外国人留学生の比率を第3期中期目標期間の平均実績を上回る数値として14%以上と設定。</p> <p><評価指標【S16-3】></p> <p>○ 外国語で開講する授業数を第3期中期目標期間の平均実績を上回る数値として110科目以上と設定。</p> <p><評価指標【S16-4】></p> <p>○ 国際交流プログラム数を3件以上/年実施、参加外国人学生・外国人研究生数を135名以上/年、受講生のアンケート調査について、第4期中期目標期間初年度と比較して第4期中期目標期間最終年度における満足度の向上。</p>	
<p><令和4年次計画【16-1】></p> <p>○ 外国人留学生の卒業・修了者を対象に同窓会をオ</p>	<p><令和4年次計画【16-1】の実施状況></p> <p>本学への留学を終えて帰国する外国人留学生に対し、母国における海外同窓会組織の案内を行</p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p>ンラインで開催する。また、全国・地域の留学生同窓会会員を対象としたメーリングリストの構築等を行う。</p> <div data-bbox="185 628 826 778" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>評価指標に関する目標値・達成水準【16-1】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外国人留学生の本国における留学生同窓会会員数：360名 </div>	<p>うとともにメーリングリストを整備する等、留学生の卒業後のネットワーク構築を推進した。</p> <p>令和4年9月には韓国同窓会が開かれ、同窓生が開催する国際学術大会に本学教員1名が参加した。12月には、米地域の留学生OGを対象に「第2回オンライン海外同窓生懇談会」を開催した。本懇談会には、15か国から19名の留学生OGが参加したほか、学長や理事、同窓生の指導教員、大学同窓会（桜蔭会）会長等も出席し、留学中の思い出の発表や現在の活動報告等を行った。懇談会をきっかけとして、初対面の留学生OG同士が専門分野や職業等の情報交換を行う様子も見られ、新たな交流を促進する場としての役割も果たしている。参加者を対象としたアンケートでは、回答者全員が「とても満足した」又は「満足した」と回答し、次回の参加にも好意的な回答が得られている。</p> <div data-bbox="889 628 2056 740" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>評価指標に関する達成状況【16-1】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外国人留学生の本国における留学生同窓会会員数：470名 </div> <div data-bbox="889 778 2056 991" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>令和4年次総合評価室自己評価結果【16-1】：【iii】達成水準を大きく上回っている （判定理由・補足等）：外国人留学生の帰国後のネットワーク構築を促進したことで、本国における留学生同窓会会員数は令和4年度目標値「360名」及び第4期中期目標期間における目標値「450名」を大きく上回る「470名」となったことにより、自己評価結果を【iii】と判定した。</p> </div>
<p><令和4年次計画【16-2】></p> <p>○ 優れた留学生を確保するために、留学生のニーズに合わせたさまざまな授業（日本語・日本事情演習、特設日本語）やホームルーム、オリエンテーション、留学生日本語学習支援・交流室での日本語添削、留学生向けの情報提供のためのホームページなどのサポート体制を整備する。また、交流型授業や交流プログラムを通じ、日本人学生との交流を拡大する。</p>	<p><令和4年次計画【16-2】の実施状況></p> <p>(1) 留学生支援の取組</p> <p>海外の学生へ向けた広報及び受入れ中の留学生への情報提供のため、留学生向けウェブサイトの英語版を更新し、内容を充実させた。また、留学生のニーズに合わせた取組として、留学生の渡日前にオリエンテーションを実施し、カリキュラム紹介、学生宿舎等の生活面や危機管理に関する情報提供を行ったほか、コロナ禍で来日が遅れた留学生に対しては、授業のオンライン履修・聴講を可能な限り認めた。さらに、生活面のサポートや海外からオンラインで参加する学生のサポートとして、日本語学習支援・交流室や学生チューターによる日本語指導や生活相談等を行った（学生チューターの配置実績：前期76名、後期101名）。その他、令和4年度から新た</p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果												
	<p>に、非正規留学生を対象とした入学式を開催するとともに、チューター学生との顔合わせやキャンパスツアーも実施するなど、留学生が新生活に馴染めるよう支援を行った。また、広報の側面、経済面及び生活面での支援として、留学生用の各種奨学金の支給手続きを行ったほか、備蓄非常食や衛生用品を新入留学生に配付した。</p> <p>さらに、留学生の学習支援体制を強化するため、日本語学習支援・交流室のチューターを対象に、外部講師による日本語のライティング指導に関するワークショップを実施した。これら支援による留学生の学習成果の検証として、本学での学修を半年以上継続している留学生に対して文法力の向上を事前・事後テストを実施し、数値、レベルの上昇がみられることを確認した。令和4年度前期に交換留学を終えた学生の事後テストの結果では、中級レベルの学習者に関しては、2学期留学した学生の点数は7点から11点の間で上昇し、上級レベルの学習者は、最大で5点上昇した。日本語日本文化研修留学生に対しては口頭技能のテストを行い、中級から上級レベルに上がる学生が多く認められている。</p> <p>(2) 日本人学生との交流の拡大</p> <p>多様な留学生のニーズを調査し、その結果をもとにした授業の提供に努め、日本語日本事情、補講（特設日本語）、留学生対象のホームルーム授業（日研生・交換留学生）、調査レポート報告会と報告書の作成、本学学生との交流型授業などを実施した。また、日本語や日本文化（生け花、歌舞伎、書道、茶道等）への理解を促進する企画として、日本文化教室、附属学校との交流を実施した。日本文化教室の成果については、紹介冊子を日本語及び英語で作成し、ウェブサイトでも公開している。</p> <p>その他の交流拡大の取組として、留学生が自身の言語を教える「留学生による外国語講座」を各学期に開催した（前期：スペイン語、後期：スウェーデン語）。また、日本人学生との交流の場として、本学学園祭（11月）に際しても、海外の協定校（7か国14大学）と連携してオンラインで海外からの参加を促し、英語圏、中国、韓国、イタリア等から学生が参加したほか、学生の国際交流サークルと連携し、12月に「国際交流の集い」を開催し、約60名が参加した。</p> <p>○外国人留学生比率</p> <table border="1" data-bbox="875 1268 1561 1457"> <thead> <tr> <th>区分</th> <th>R3 (参考)</th> <th>R4</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>全学生数(A)</td> <td>2,872</td> <td>2,870</td> </tr> <tr> <td>外国人留学生数(B)</td> <td>303</td> <td>289</td> </tr> <tr> <td> 正規生数</td> <td>167</td> <td>150</td> </tr> </tbody> </table>	区分	R3 (参考)	R4	全学生数(A)	2,872	2,870	外国人留学生数(B)	303	289	正規生数	167	150
区分	R3 (参考)	R4											
全学生数(A)	2,872	2,870											
外国人留学生数(B)	303	289											
正規生数	167	150											

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果																				
<table border="1" data-bbox="188 557 826 667"> <tr> <th data-bbox="188 557 826 611">評価指標に関する目標値・達成水準【16-2】</th> </tr> <tr> <td data-bbox="188 614 826 667">・外国人留学生比率：12%</td> </tr> </table>	評価指標に関する目標値・達成水準【16-2】	・外国人留学生比率：12%	<table border="1" data-bbox="875 220 1561 461"> <tr> <td data-bbox="875 220 1227 268">研究生数</td> <td data-bbox="1227 220 1395 268">37</td> <td data-bbox="1395 220 1561 268">56</td> </tr> <tr> <td data-bbox="875 268 1227 316">日本語日本文化研修留学生数</td> <td data-bbox="1227 268 1395 316">7</td> <td data-bbox="1395 268 1561 316">9</td> </tr> <tr> <td data-bbox="875 316 1227 363">交換留学生数</td> <td data-bbox="1227 316 1395 363">25</td> <td data-bbox="1395 316 1561 363">46</td> </tr> <tr> <td data-bbox="875 363 1227 411">短期留学生数</td> <td data-bbox="1227 363 1395 411">67</td> <td data-bbox="1395 363 1561 411">28</td> </tr> <tr> <td data-bbox="875 411 1227 461">比率(B)/(A)</td> <td data-bbox="1227 411 1395 461">10.6%</td> <td data-bbox="1395 411 1561 461">10.1%</td> </tr> </table> <table border="1" data-bbox="887 557 2056 667"> <tr> <th data-bbox="887 557 2056 611">評価指標に関する達成状況【16-2】</th> </tr> <tr> <td data-bbox="887 614 2056 667">・外国人留学生比率：10.1%</td> </tr> </table> <div data-bbox="887 708 2056 1114"> <p>令和4年次総合評価室自己評価結果【16-2】：【i】達成水準を満たしていない (判定理由・補足等)：外国人留学生に対する生活・学習面における支援強化や外国人学生に対する広報の取組を推進したものの、中国におけるロックダウンの影響を受けた私費留学生の減少、来日して入学試験を受験できなかったことによる大学院留学生の減少、欧州の大学がオンライン受講を単位認定しない方針としたことによる短期留学生数の減少等の影響を受け、外国人留学生比率はコロナ禍以前の水準に回復せず、「10.1%」となった。目標値「12%」を達成できなかったことにより、自己評価結果を【i】と判定した。 なお、外国人留学生の増加に向けた取組として、大学の世界展開力事業「EDI プログラム」に採択されたことを踏まえて、英語によるコースを開講することで、日本語を話せない留学生の受け入れも可能になるよう抜本的な改革を行っている。</p> </div>		研究生数	37	56	日本語日本文化研修留学生数	7	9	交換留学生数	25	46	短期留学生数	67	28	比率(B)/(A)	10.6%	10.1%	評価指標に関する達成状況【16-2】	・外国人留学生比率：10.1%
評価指標に関する目標値・達成水準【16-2】																					
・外国人留学生比率：12%																					
研究生数	37	56																			
日本語日本文化研修留学生数	7	9																			
交換留学生数	25	46																			
短期留学生数	67	28																			
比率(B)/(A)	10.6%	10.1%																			
評価指標に関する達成状況【16-2】																					
・外国人留学生比率：10.1%																					
<p><令和4年次計画【16-3】> ○ 優れた外国人留学生の受入を促す取組として、サマープログラムを外国語で開講し、本学の教育プログラム参画に寄与する。外国語による授業の開講について次年度の授業計画策定時に全学的に依頼する。また、状況に応じてサマープログラムのコース</p>	<p><令和4年次計画【16-3】の実施状況> オンラインで開催したサマープログラム(6月20日～7月16日、7月18日～8月6日開催)では、海外協定校の学生と本学学生が共に英語による授業を受け、プロジェクトワークを行うことにより、本学学生の国際経験や英語力の向上、学生間の国際的なネットワークの発展や、学生の短期留学・長期留学に向けた意識の醸成に寄与した。さらに、サマープログラムの企画立案・運営を担う「サマープログラム運営委員会」を授業化することにより、国際交流イベントの企画</p>																				

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p>新設について検討する。</p> <div data-bbox="185 798 826 908" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 20px;"> <p>評価指標に関する目標値・達成水準【16-3】</p> <p>・外国語で開講する授業数：90 科目</p> </div>	<p>運営や海外の学生との交流を通じて、異文化間理解を深めつつ、リーダーシップを身に付ける機会とした（サマープログラム参加者：本学 101 名（うち、英語の授業履修者 44 名、サマープログラムを運営する授業履修者 57 名）、海外の学生 25 名）。</p> <p>また、外国語で開講する授業の拡充として、令和 5 年度授業実施計画（シラバス）の策定の際に、全学的に外国語による授業の開講について依頼を行った。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div data-bbox="936 427 1323 627" style="text-align: center;">  </div> <div data-bbox="1435 427 1794 627" style="text-align: center;">  </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div data-bbox="936 627 1368 735" style="text-align: center;"> <p>▲サマープログラムの様子① (Special Lecture "Sticking out or standing out? - Leveraging diversity as a strength")</p> </div> <div data-bbox="1435 627 1727 683" style="text-align: center;"> <p>▲サマープログラムの様子② (Student Event)</p> </div> </div> <div data-bbox="891 798 2056 908" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 20px;"> <p>評価指標に関する達成状況【16-3】</p> <p>・外国語で開講する授業数：142 科目</p> </div> <div data-bbox="891 949 2056 1121" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 20px;"> <p>令和 4 年次総合評価室自己評価結果【16-3】：【ii】達成水準を満たしている (判定理由・補足等)：優れた留学生を受け入れるため、英語によるサマープログラムの開催や外国語による授業の拡充を推進し、外国語で開講する授業数は目標値「90 科目」を上回る「142 科目」となったことにより、自己評価結果を【ii】と判定した。</p> </div>
<p><令和 4 年次計画【16-4】></p> <p>○ 学内のサマープログラム、COIL 等の国際交流プログラムの実施状況（実施年度、開催内容、参加者数等）を把握し、着実に実施する。また、受講生向けの満足度アンケートの仕組みを構築し、初回の調査を行う。</p>	<p><令和 4 年次計画【16-4】の実施状況></p> <ul style="list-style-type: none"> ・サマープログラムの実施状況（開催内容、参加者数等）については、【16-3】（p. 60）を参照。 ・COIL 等の国際交流プログラムの実施状況（開催内容、参加者数等）については、【15-1】（p. 50）及び【15-4】（p. 55）を参照。

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p data-bbox="188 225 826 268">評価指標に関する目標値・達成水準【16-4】</p> <ul data-bbox="188 277 826 483" style="list-style-type: none"> ・国際交流プログラム数：3件 ・国際交流プログラムへの参加外国人学生・外国人研究生数：135名 ・受講生のアンケート調査：満足度アンケートの仕組みを構築し初回調査を実施。 	<p data-bbox="898 225 2056 268">評価指標に関する達成状況【16-4】</p> <ul data-bbox="898 277 2056 1406" style="list-style-type: none"> ・国際交流プログラム数：18件 ・国際交流プログラムへの参加外国人学生・外国人研究生数：約467名 ・受講生のアンケート調査：【15-4】と同様、令和4年度については、以下の5つのプログラムについて満足度アンケートを実施し、いずれも高い満足度を得ることができた。 <令和4年度アンケート結果の概要> ①サマープログラム <ul data-bbox="931 555 1400 858" style="list-style-type: none"> <Subject Based Courses> ○留学生（参加者16名、回答者7名） <ul data-bbox="965 635 1279 703" style="list-style-type: none"> ・非常に満足57%（4名） ・満足43%（3名） ○日本人（参加者37名、回答者11名） <ul data-bbox="965 746 1245 858" style="list-style-type: none"> ・非常に満足27%（3名） ・満足64%（7名） ・許容範囲9%（1名） <日本語クラス> ○留学生（参加者14名、回答者13名） <ul data-bbox="965 943 1279 1011" style="list-style-type: none"> ・非常に満足62%（8名） ・満足38%（5名） ②マギル大学研修（参加者4名、回答者2名） <ul data-bbox="931 1054 1272 1123" style="list-style-type: none"> ・とても満足：50%（1名） ・満足：50%（1名） ③カリフォルニア大学デイビス校研修（参加者1名、回答者1名） <ul data-bbox="931 1166 1263 1203" style="list-style-type: none"> ・とても満足100%（1名） ④チェンマイ大学研修（参加者10名、回答者8名） <ul data-bbox="931 1246 1301 1315" style="list-style-type: none"> ・とても満足：62.5%（5名） ・満足：37.5%（3名） ⑤文化教室 <ul data-bbox="931 1358 1995 1394" style="list-style-type: none"> ・前期4教室、後期6教室の参加者からの回答を総括した満足度：98.7%（76名/77名）

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
	<p>令和4年次総合評価室自己評価結果【16-4】：【ii】達成水準を満たしている</p> <p>(判定理由・補足等)：サマープログラムや各種国際交流プログラムを実施し、その状況を把握した。目標値「国際交流プログラム数：3件」、「左記参加外国人学生・外国人研究者数：135名」を上回る「18件」のプログラムを実施し、「約467名」が受講・参加した。また、受講生の満足度調査については、5件のプログラムの満足度に関するアンケートを行うことにより、いずれも100%に近い高い満足度を示し、第4期中期目標期間においては本調査を継続的に実施していくこととした。国際交流プログラム数及び参加者数に関する評価指標の目標値を達成したこと、国際交流プログラムの満足度調査に関する評価指標を達成したことにより、自己評価結果を【ii】と判定した。</p>
<p><中期計画【K17】></p> <p>○ 多様な学生（外国人留学生、トランスジェンダー学生、障害のある学生、メンタルヘルス上の困難を抱える学生等を含む）の本学における学びを保障するため、学生個々の事情に対応するとともに、キャンパス内の設備整備、奨学金制度、授業料免除、学生相談体制等の学生支援体制を拡充する。また、キャンパス内の新学生宿舎（課外活動施設を合築）の開寮（令和4年4月予定）等により、安全・安心・快適な学生生活の実現を図る。</p> <p><評価指標【S17-1】></p> <p>○ 学長、副学長及び大学関係者による学生懇談会等を2回以上/年実施し、学生へのサービスを改善する。本学独自の奨学金数：33基金/年を含め学生支援体制を第4期中期目標期間最終年度までに拡充する。また、新学生宿舎に学生RA（レジデント・アシスタント）を配置し快適な学生生活実現のため意見交換会を実施：2回以上/年。</p>	
<p><令和4年次計画【17-1】></p> <p>○ 留学生を対象とした学生懇談会を開催し、学生が安心して学べる学生生活の実現を図る。また、新学生宿舎「音羽館」に学生RA7名（学生委員会）を配置し、各フロアの要望・意見を聴取して、学生寮担当副学長を中心として意見交換を行う（新学生宿舎意見交換会・年2回）。学生委員会はコンセプトルームの管理、広報活動等を行う。奨学基金の新規設置及び執行計画が終了する奨学基金の今後について検討を行う。</p>	<p><令和4年次計画【17-1】の実施状況></p> <p>(1) 学生懇談会の開催</p> <p>令和4年11月に第1回、令和5年2月に第2回の学生懇談会を開催した。第1回は一般学生を対象として開催し、予め収集した学生の質問について回答するとともに、出席学生が自由に発言する時間を設ける等により活発な意見交換を行った。第2回目は外国人留学生を対象として開催し、留学生から見た本学の現状について意見交換を行った。留学生による要望として、大学食堂でのヴィーガン料理の提供希望があり、今後生協の協力のもと検討する旨回答したほか、チューター予算の増額、日本語学習支援・交流室の開室期間の延長を予定している。</p> <p>(2) 新学生宿舎「音羽館」の運営</p> <p>令和4年度から新規に開設した学生宿舎「音羽館」に学生委員7名を配置し、学生委員会がコ</p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<div data-bbox="185 1329 826 1385" style="border: 1px solid black; padding: 2px;"> 評価指標に関する目標値・達成水準【17-1】 </div> <div data-bbox="185 1385 826 1439" style="border: 1px solid black; padding: 2px;"> ・学長、副学長及び大学関係者による学生懇談会 </div>	<p>ンセプトルーム（宿舎に入居する学生の共同利用施設である、キッチンスタジオ、たたみの間、ミーティングルーム、シアタールーム及びフィットネススタジオの総称）の管理方法の検討、オープンキャンパスでの広報資料の作成を担った。また、大学側からは教育を担当する副学長及び関係課長が出席し、音羽館に関する意見交換会を4月及び11月に開催した。意見交換会においては、学生委員会が取りまとめた寮生の意見を共有したうえ、日常生活や施設の利用等に関する問題点等を確認した。11月開催の意見交換会では、休日に閉門する南門の常時開門について要望があり、警備上の理由から常時は不可能であるものの、イベント開催等に伴う南門の開門日の情報について、学生委員会へ提供していくこととした。</p> <p>(3) その他学生支援の取組</p> <p>学生への経済面での支援として、新規奨学金を1基金（小澤美奈子奨学基金）開設し、本学の独自奨学基金数は計34基金となったほか、終了する奨学基金についても、適正な執行が行えるよう、支給金額の検討を行った。</p> <p>また、障害学生への支援として、専任の障害学生支援コーディネーターを雇用することで、支援の必要な学生への継続的なサポート及び現状の確認をきめ細かく行うことが可能となり、対象者には個々の要望等に応じた配慮を提供した。支援内容の変更等が必要な場合には、学生の希望に基づいて随時対応を行うことが可能となった。その他、障害学生の支援方針に基づき、附属図書館のシステムを改修し、図書の貸出期間を延長する対応を行った。</p> <p>さらに、附属図書館における学生支援として、留学生を対象とした学習支援サービスの認知度向上と、学習支援を担当する学生同士の連携を深めるため、留学生交流室とLALA（学習支援サポーター：Library Academic Learning Adviser）による合同セミナーを開催し、それぞれの支援内容を紹介した。また、図書館利用者アンケートを実施し、学生からの要望を受けた改善の取組として、自習時の消しくずを捨てるためのごみ箱を設置したほか、蔵書の充実のため、附属図書館の職員全体による選書や教員による学生用図書の選書の試行等、選書方法の変更を行った。同アンケートの結果、学生からの認知度が低い図書館サービスが見られたため、既存サービスの周知として、LiSA(学生と図書館スタッフとの協働による図書館活性化プログラム:Library Student Assistant)によるTwitterを通じた広報を行った。</p> <div data-bbox="887 1329 2056 1385" style="border: 1px solid black; padding: 2px;"> 評価指標に関する達成状況【17-1】 </div> <div data-bbox="887 1385 2056 1439" style="border: 1px solid black; padding: 2px;"> ・学長、副学長及び大学関係者による学生懇談会等開催数：2回 </div>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p>等開催数：2回</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本学独自の奨学基金数：34基金（1基金新設） ・新学生宿舎「音羽館」において、以下を実施する。 <p>①学生 RA（レジデント・アシスタント）配置：7名</p> <p>②意見交換会開催数：2回</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多様な学生のうち障害のある学生、メンタルヘルス上の困難を抱える学生に対する支援体制の拡充： <p>①障害学生支援コーディネーターの雇用：1名</p> <p>②専門家による学生又は教職員向け講演会開催数：1回</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本学独自の奨学基金数：34基金（1基金新設） ・新学生宿舎「音羽館」における「①学生 RA（レジデント・アシスタント）配置人数」：7名 ・新学生宿舎「音羽館」における「②意見交換会開催数」：2回 ・多様な学生のうち障害のある学生、メンタルヘルス上の困難を抱える学生に対する支援体制の拡充：「①障害学生支援コーディネーターの雇用」：1名 ・多様な学生のうち障害のある学生、メンタルヘルス上の困難を抱える学生に対する支援体制の拡充：「②専門家による学生又は教職員向け講演会開催数」：1回（トランスジェンダー学生を招いた講演会の実施） <p>令和4年次総合評価室自己評価結果【17-1】：【ii】達成水準を満たしている</p> <p>（判定理由・補足等）：学生懇談会について、目標値「2回」のとおり開催し、学生からの要望を収集し、可能なものから対応を検討した。また、経済的な支援として、目標値「34基金」、「1基金新設」のとおり奨学金を整備して、支援を実施した。音羽館に関する取組においても、学生 RA を目標値「7名」のとおり配置するとともに、目標値と同数の「2回」の意見交換会を実施し、運営等の改善を図った。その他の多様な学生に対する支援体制の拡充として、目標値と同数である障害学生支援コーディネーターを「1名」雇用し、専門家を招いた講演会を「1回」開催した。評価指標を全て達成したことにより、自己評価結果を【ii】と判定した。</p>

I 教育研究等の質の向上に関する事項
(3) 研究に関する事項

中期 目 標	<p>【M10】若手、女性、外国人など研究者の多様性を高めることで、知の集積拠点として、持続的に新たな価値を創出し、発展し続けるための基盤を構築する。（中期目標大綱⑰） ⇒ 関連する中期計画：【K18】</p>
--------------	--

※各年次計画の「総合評価室自己評価結果」は、以下の三段階の区分によって判定を行っています。

【iii】達成水準を大きく上回っている 【ii】達成水準を満たしている 【i】達成水準を満たしていない

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p><中期計画【K18】></p> <p>○ 将来の我が国の科学技術・イノベーション創出の担い手となる若手研究者に対する支援や研究者のライフスタイルに応じた研究の支援を継続するとともに、女性教員や外国人教員の積極的採用により教育研究活動の活性化につなげる。こうして研究者の多様性を高めること、及び他大学、他機関等との教員のクロスアポイントメントを推進することにより、研究レベルの継続的な向上を目指す。</p> <p><評価指標【S18-1】></p> <p>○ 全教員に占める女性教員の比率を、第4期中期目標期間平均で40%以上、教授職については30%以上に設定。</p> <p><評価指標【S18-2】></p> <p>○ ライフスタイルに応じた研究支援3計画（子育て中の女性研究者支援、学内研究者の一時支援、女性研究者のための研究継続奨励型「特別研究員制度（みがかずば研究員制度）*」）を利用した研究者数：31名以上/年。</p> <p>※「特別研究員制度（みがかずば研究員制度）」＝常勤職に就いてない女性研究者を対象に、継続的な研究活動を支援するとともに、女性研究者が研究中断後に円滑に研究現場に復帰する機会を提供する制度。</p> <p><評価指標【S18-3】></p> <p>○ 研究者の多様性を高めるため、クロスアポイントメント制度利用者数（本学採用者）を第4期中期目標期間最終年度時点で10名以上に設定。</p>	<p><令和4年次計画【18-1】の実施状況></p> <p>ダイバーシティを尊重し、多様な働き方を可能とすることを通じて、本学のミッションの実現、組織の活性化及び教育研究の促進等を図るため、若手研究者、外国人研究者、女性研究者等の多様な人材を積極的に採用することを本学の方針として、令和4年度に、基幹研究院において2名の女性教員、1名の外国人教員を採用した（全採用者6名）とともに、同方針を「人事に関する</p>
<p><令和4年次計画【18-1】></p> <p>○ 研究者の多様性を高め、教育研究活動の活性化につなげるため、女性教員や外国人教員を採用するとともに、優秀な女性教員の昇格を促進する。</p>	

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p data-bbox="188 432 826 488">評価指標に関する目標値・達成水準【18-1】</p> <ul data-bbox="188 488 826 584" style="list-style-type: none"> ・全教員に占める女性教員比率：40% ・教授職に占める女性教員比率：30% 	<p data-bbox="887 432 2056 488">評価指標に関する達成状況【18-1】</p> <ul data-bbox="887 488 2056 600" style="list-style-type: none"> ・全教員に占める女性教員比率：44.8% (87/194名) ・教授職に占める女性教員比率：35.5% (27/76名) <p data-bbox="887 639 2056 810">令和4年次総合評価室自己評価結果【18-1】：【ii】達成水準を満たしている (判定理由・補足等)：ダイバーシティを尊重した多様な採用を進めることにより、全教員及び教授職に占める女性教員の比率について、それぞれ目標値「40%」、「30%」を上回る「44.8%」、「35.5%」となったことにより、自己評価結果を【ii】と判定した。</p>
<p data-bbox="165 916 517 943"><令和4年次計画【18-2】></p> <p data-bbox="165 954 837 1294">○ 育児・介護等と研究との両立が可能となるよう、引き続き、子育て中の女性教員を対象として研究補助者を配置する支援制度や、男女に関わらず、子育て、看護、介護に携わる学内研究者への一時支援を継続するとともに、支援の改善を検討する。学位を取得した女性研究者の研究中断からの復帰と研究の継続支援のための「みがかずば研究員」制度を継続し、発表の機会を設けることにより研究力向上を支援する。</p>	<p data-bbox="864 916 1357 943"><令和4年次計画【18-2】の実施状況></p> <p data-bbox="875 954 1608 981">(1) 子育て中の女性研究者支援・学内研究者への一時支援</p> <p data-bbox="887 992 2078 1102">令和3年度に引き続き、子育てをしながら優れた研究を行う女性教員を対象とする研究者支援を募集し、2名の女性研究者に対して支援を行った。支援対象となった教員のうち1名の成果事例として、外部資金を2件(計2,000千円)獲得したほか、令和5年度に昇任が決定している。</p> <p data-bbox="887 1114 2078 1294">また、令和3年度に引き続き、育児・介護等をしながら研究を行う研究者に対する一時支援を募集し、前期、後期とも各7名(男性4名、女性3名)に対して支援を行った。支援を受けた教員の成果事例として、年間10回以上の学会発表(2名)、外部資金を5件獲得(計18,730千円、3名)、支援を受けた教員の昇任等が挙げられる。被支援者からも「一時支援は物理的なサポートだけではなく、メンタル的なサポートにもつながったと感じている」等、好評を得ている。</p> <p data-bbox="887 1305 2078 1415">上記2つの支援制度について、令和5年度の募集に向けて利便性等の観点から改善し、募集要項や申請書の文言を整理するとともに、被支援者の繁忙期の業務負担を解消するため、学内研究者支援の支援時間の上限を週10時間から月40時間に変更した。</p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<div data-bbox="190 1059 826 1209" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>評価指標に関する目標値・達成水準【18-2】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ライフスタイルに応じた研究支援3計画を利用した研究者数：31名 </div>	<div data-bbox="875 225 2078 531"> <p>(2) 「みがかずば研究員」制度による研究継続支援</p> <p>令和3年度に引き続き、女性研究者の研究中断からの復帰や研究の継続支援のための「みがかずば研究員制度」として、継続者を含め、前期に10名、後期に11名採用するとともに、交流会やセミナーの場において研究等を発表する機会を設けたほか、グローバルリーダーシップ研究所で「若手研究者支援」（海外調査）を公募し、みがかずば研究員2名を採択するなどの支援を行った。みがかずば研究員の自主企画であるセミナーには、対面、オンライン合わせて延べ50名以上が参加し、若手研究者への貴重な情報提供の機会となった。また、みがかずば研究員のうち1名は准教授、2名は講師、1名はリサーチフェローに内定している。</p> </div> <div data-bbox="875 576 1563 997"> <p>(3) 本学の研究者支援の取組に関する広報活動</p> <p>本学が実施してきた、女性研究者・子育て中の研究者等に対する支援（研究補助者の配置、育児期間中の職務軽減制度、学内保育所の設置、育児支援奨学金の授与等）を広く社会に向けて発信し、多様なライフスタイルに応じた働き方の社会全体での推進に資するため、小冊子「ワークライフマネジメントに向けた研究者支援」を作成し、女性学長サミット「私たちの歩んだ道、歩む道—女性リーダーシップの新時代を拓く」（令和5年2月開催）等での配付や大学ウェブサイトへの掲載等、普及のための取組を行った。</p> </div> <div data-bbox="1585 568 2042 890">  </div> <div data-bbox="1599 895 2042 1034"> <p>▲小冊子「ワークライフマネジメントに向けた研究者支援」 https://www.ocha.ac.jp/danjo/info/worklife_management_d/fil/worklife_management.pdf</p> </div> <div data-bbox="891 1059 2056 1169" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>評価指標に関する達成状況【18-2】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ライフスタイルに応じた研究支援3計画を利用した研究者数：37名 </div> <div data-bbox="891 1209 2056 1382" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>令和4年次総合評価室自己評価結果【18-2】：【ii】達成水準を満たしている （判定理由・補足等）：ライフスタイルに応じた研究支援を実施し、目標値「31名」を上回る「37名」を支援するとともに、制度を利用した研究者の昇任や外部資金の獲得に繋がる等の成果を上げていることにより、自己評価結果を【ii】と判定した。</p> </div>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p data-bbox="163 228 521 256"><令和4年次計画【18-3】></p> <p data-bbox="163 268 819 336">○ 研究者の多様性や研究力の継続的な向上のため、他機関とのクロスアポイントメントを促進する。</p> <div data-bbox="185 592 826 738" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p data-bbox="199 603 741 632">評価指標に関する目標値・達成水準【18-3】</p> <p data-bbox="208 659 813 727">・クロスアポイントメント制度利用者数（本学採用者）：5名</p> </div>	<p data-bbox="862 228 1357 256"><令和4年次計画【18-3】の実施状況></p> <p data-bbox="887 268 2083 451">クロスアポイントメント制度利用者（本学採用者）の人数は、他大学等への働きかけ等も行ったものの、新規利用者がなかったこと、また、年度途中で退職者があったことにより、令和3年度の3名から、令和4年度は2名へと減少した。一方、他大学への派遣については、東北大学へ1名の増員、令和4年度から民間企業への派遣（1名）をスタートしており、研究者の研究力の持続的な向上にも寄与している。</p> <p data-bbox="887 462 2078 531">さらに、今後の研究者の多様性の促進、研究の深化・活性化を図るため、包括連携協定を締結し、他の国立大学と今後の教員の交流等について検討を開始した。</p> <div data-bbox="887 592 2056 700" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p data-bbox="900 603 1330 632">評価指標に関する達成状況【18-3】</p> <p data-bbox="909 659 1675 687">・クロスアポイントメント制度利用者数（本学採用者）：2名</p> </div> <div data-bbox="887 743 2056 991" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p data-bbox="900 754 1906 783">令和4年次総合評価室自己評価結果【18-3】：【i】達成水準を満たしていない</p> <p data-bbox="900 794 2047 978">（判定理由・補足等）：クロスアポイントメント制度（本学採用者）について、利用者増加に向けた協議等は行ったものの、新規利用者がなかったこと等により、利用者数は「2名」となった。目標値「5名」を達成できなかったことから、自己評価結果を【i】と判定した。なお、目標値の達成に向けては、令和5年度のクロスアポイントメント（本学採用者）実施について複数件の協議を行っている。</p> </div>

I 教育研究等の質の向上に関する事項
(4) その他社会との共創、教育、研究に関する重要事項

中期 目 標	<p>【M11】学部・研究科等と連携し、実践的な実習・研修の場を提供するとともに、全国あるいは地域における先導的な教育モデルを開発し、その成果を展開することで学校教育の水準の向上を目指す。(附属学校) (中期目標大綱⑱) ⇒ 関連する中期計画：【K19】</p>
--------------	--

※各年次計画の「総合評価室自己評価結果」は、以下の三段階の区分によって判定を行っています。

【iii】達成水準を大きく上回っている 【ii】達成水準を満たしている 【i】達成水準を満たしていない

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p><中期計画【K19】></p> <p>○ 各附属学校園において、それぞれの年齢段階に応じた特色ある教育モデルに関する研究・実践を行うとともに、社会貢献及び学校教育水準の高度化等に資するため、その成果を社会に発信する。また、大学と附属学校園が緊密に連携する「オールお茶の水」体制のもとで、連携を推進するための体制や教育研究環境の整備を図りながら研究や取組を協働して進め、学生の実習や教員の研修を行うとともに、先導的な教育モデルや教材等の開発及びそれらの成果の発信を進める。</p> <p><評価指標【S19-1】></p> <p>○ 「お茶の水女子大学附属学校園教材・論文データベース」への記載件数を 52 件以上/年、利用者数を 1,500 名以上/年、シンポジウム・セミナー等を 4 件以上/年、実施。</p> <p><評価指標【S19-2】></p> <p>○ 附属学校園で実施する教育実習生の受入数を 100 名以上/年、インターンシップの受入を 35 名以上/年、教員の FD 件数を 3 回以上/年、実施及び参加者に対するアンケート調査を実施し、FD を通じて大学と附属学校園の連携が重要・必要であるという意識が高まった、及び授業内容・授業方法の改善に活かすことができたとする割合が 80%以上/年。</p>	<p><令和 4 年次計画【19-1】の実施状況></p> <p>(1) 「お茶の水女子大学附属学校園教材・論文データベース」の充実</p> <p>幼稚園、小学校、中学校、高等学校での教育に活用できる教育コンテンツを公開する「附属学校園教材・論文データベース」を通じて、令和 4 年度に附属学校園で新たに開発した授業案をはじめとする教材及び論文の掲出による成果発信と、他校での活用を促進するための各附属学校での公開教育研究会や学会等での周知活動を行った。</p>
<p><令和 4 年次計画【19-1】></p> <p>○ 各附属学校園において、それぞれの年齢段階に応じた特色ある教育モデルに関する研究・実践を行い、幼稚園、小学校、中学校、高等学校での教育に活用できる教育コンテンツを広く公開している「お茶の水女子大学附属学校園教材・論文データベース」に</p>	

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p>において、52 件以上の記載、1,500 名以上の利用者を得られるよう、同データベースの充実化を図る。さらに、シンポジウム・セミナー等を 4 件以上開催し、広く社会に発信する。</p>	<p>令和 4 年度には、新たに 79 件の新規コンテンツを掲載し、データベースの総コンテンツ数は令和 3 年度末比 15% 増の 614 件となった。利用状況も好調に推移しており、延べ利用者数は令和 3 年度比 43% 増となり、自校コンテンツのページビューは令和 3 年度比 68% 増、コンテンツダウンロード数は 13% 増と、広く活用されている状況である。</p> <p>○ 主要な効果測定指標の数値は以下のとおり。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・総掲載件数：614 件（令和 3 年度末比 15% 増） ・自校コンテンツページビュー：39,464 ビュー（令和 3 年度比 68% 増） ・コンテンツダウンロード数：10,107 件（令和 3 年度比 13% 増） <p>(2) 附属高等学校における教育等の成果発信</p> <p>附属高等学校では、令和元年度よりスーパーサイエンスハイスクール（以下 SSH）事業を展開しており、「女性の力をもっと世界に～協働的イノベーターとイノベーションを支える市民の育成～」をテーマに研究開発に取り組んでいる。令和 4 年度は学校設定科目「課題研究 I・II」と「持続可能な社会の探究」（総合的な探究の時間）の質的向上を図り、SSH プログラムの指導内容・評価方法の改善を行った。公開教育研究会（11 月）ではテーマを「新学習指導要領で培うコンピテンシー」とし、SSH 総合的な探究の時間「持続可能な社会の探究」、国語科新科目「言語文化」、「数学 I」の研究授業を公開した。SSH 生徒成果発表会（3 月）では、SSH の実践・成果報告を行った。</p> <p>(3) 附属中学校における教育等の成果発信</p> <p>附属中学校では、令和 4 年度新たに設定した研究テーマ「試行錯誤と創意工夫のある『つくる学び』をつくる～各教科における見方・考え方を生かした創造的思考力を伸ばす授業のデザイン～」のもとで実践研究に取り組み、10 月には公開研究会を開催し、全国から 550 名を超える申込みがあった。参加者のアンケートへの回答では、参加した理由として「本校の授業への関心」が 8 割、研究テーマ「創造的思考」への関心が約 7 割を占めており、本校の研究が全国の教育関係者のニーズに合ったものであると言える。</p> <p>(4) 附属小学校における教育等の成果発信</p> <p>附属小学校では、令和元年度に文部科学省より研究開発学校の指定（指定期間：～令和 5 年度）を受け、「自ら学びを構想し、主体的に学びを進める新領域「てつがく創造活動」を中核とする教育課程の開発」に取り組んでいる。令和 5 年 2 月には、研究主題「学びをあむー新領域『てつがく創造活動』を中核とする教育課程の開発ー」のもと、第 85 回教育実際指導研究会（公開研</p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p data-bbox="197 978 826 1034">評価指標に関する目標値・達成水準【19-1】</p> <ul data-bbox="197 1042 826 1281" style="list-style-type: none"> ・「お茶の水女子大学附属学校園教材・論文データベース」について、次の成果を挙げる。 <ul style="list-style-type: none"> ①データベース記載件数：52件 ②データベース利用者数：1,500名以上 ・附属学校が取り組む特色ある教育モデルに関するシンポジウム・セミナー開催数：4件 	<p data-bbox="891 225 2078 451">究会)をオンラインで開催した。事前の全体提案及び授業動画のオンデマンド配信の他、当日は、3部構成で課題別協議会や教科・食育協議会等を開催した。参加申込者は約350名で、3部構成の研究協議会参加者数は延べ約490名であった。研究成果は、公開研究会要項冊子の他、教育雑誌『児童教育』や研究紀要として発表している。また、理科部の研究をまとめた書籍『探究する空間～ヒト・モノ・コトを見つめ直す～』(NPO法人お茶の水児童教育研究会)を刊行するなど、全国の教育関係者への情報発信を行っている。</p> <p data-bbox="880 499 1417 531">(5) 附属幼稚園における教育等の成果発信</p> <p data-bbox="891 539 2078 922">附属幼稚園では、平成30年度に文部科学省より研究開発学校の指定(当初指定期間：～令和4年度)を受け、幼児の発達と学びの連続性を踏まえた幼稚園の教育課程(3歳児～5歳児)の編成及び保育の実際とその評価の在り方についての研究開発に取り組んできた。令和4年度は事業最終年度に当たり、令和5年1月に文部科学省主催の研究開発学校フォーラムで発表したほか、2月には研究発表(オンデマンド申込み150名)や公開保育(参加者51名)を開催した。5～6月にかけては、地域の幼稚園等を対象として、学年ごとに「保育を語り合う会」を開催し、事例提供、情報交換や他大学講師からの指導や助言等を実施した(各回参加者約30名)。さらに、令和5年3月には、学内保育施設いずみナーサリーと文京区立お茶の水女子大学こども園と合同で「こどもフォーラム」を開催し、様々な乳幼児教育機関や地域の保護者に向けて現状と課題に関する情報発信を行った。</p> <p data-bbox="891 978 2056 1034">評価指標に関する達成状況【19-1】</p> <ul data-bbox="891 1042 2056 1281" style="list-style-type: none"> ・「お茶の水女子大学附属学校園教材・論文データベース」における「①データベース記載件数」：79件 ・「お茶の水女子大学附属学校園教材・論文データベース」における「②データベース利用者数：1,500名以上」：2,845名 ・附属学校が取り組む特色ある教育モデルに関するシンポジウム・セミナー開催数：7件 <p data-bbox="891 1329 2056 1449">令和4年次総合評価室自己評価結果【19-1】：【iii】達成水準を大きく上回っている (判定理由・補足等)：「お茶の水女子大学附属学校園教材・論文データベース」の充実化の成果として、新規の記載件数は目標値「52件」を上回る「79件」、データベース利用者数</p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
	<p>は目標値「1,500名以上」の2倍に近い「2,845名」となり、活用が進んでいる状況である。また、附属学校におけるシンポジウム・セミナー開催数も、目標値「4件」を超える「7件」開催し、広く社会に情報を発信している。評価指標を全て大きく上回って達成したことにより、自己評価結果を【iii】と判定した。</p>
<p><令和4年次計画【19-2】></p> <p>○ 大学との連携のもと100名以上の教育実習生、35名以上のインターンシップを受け入れるとともに、3回以上の教員FDを行うことにより、学生及び教員の実習や研修の場として附属学校園が十分な機能を果たす。また、それらの参加者に対しアンケート調査を行うことにより、授業や研修の内容及び方法のあり方を検討し、次年度の受入体制を構築する。</p>	<p><令和4年次計画【19-2】の実施状況></p> <p>(1) 附属学校における教育実習・インターンシップ、FDの取組</p> <p>附属学校全体（附属高等学校、中学校、小学校、幼稚園、学内保育施設いずみナーサリーや文京区立お茶の水女子大学こども園）で、教育実習生を102名、インターンシップ生を39名受け入れた。また、附属高等学校の「新教養基礎」「キャリアガイダンス」、中学校の「研究室訪問」、小学校の「公開研究会」等は、大学教員のFDの機会としても利用されている。これらの参加者60名に対してアンケートを実施したところ、37名から回答（回収率61.7%）があり、連携に関する意識や授業改善について86%から肯定的評価を得た。各附属学校の実施状況の詳細は以下のとおりである。</p> <p>(2) 附属高等学校における取組</p> <p>附属高校では、教育実習生26名、インターンシップ1名を受け入れた。SSH運営指導委員会では、アドバイザーボードとして大学教員が参加した（6月：4名、11月：5名、3月：11名）。また、SSH学校設定科目「課題研究I」4講座及び、「課題研究基礎」でも、本学教員による授業を行った。その他、アカデミックガイダンスとキャリア教育を融合した高大連携事業の講座として、大学教員10名による1年生対象の授業「新教養基礎」（年間10回）及び延べ58講座・78名の大学教員による「キャリアガイダンス」（2回）を実施した。</p> <p>(3) 附属中学校における取組</p> <p>附属中学校では、教育実習生39名、インターンシップ3名を受け入れるとともに、公認心理師実習（スクールフレンド）2名を受け入れた。さらに、大学教員の協力のもと、放課後の学習指導ボランティアとして学生4名を受け入れた。また、FDとして、10月に開催した公開研究会では、大学教員3名が助言者として参画し、11月に実施した生徒による大学の研究室訪問では、延べ16名の大学教員が参画した。そのほか、自主研究の時間に大学教員がオンラインで質問に答える機会も設けた。</p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<div data-bbox="185 938 826 1361" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>評価指標に関する目標値・達成水準【19-2】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 附属学校園で実施する教育実習生受入数：100名以上 ・ 附属学校園におけるインターンシップ受入数：35名以上 ・ 教員 FD 実施数：3回以上 ・ 上記 FD 参加者に対するアンケート結果において、大学と附属学校の連携に関する意識向上及び授業改善に活かすことができたとする割合：80%以上 </div>	<p>(4) 附属小学校における取組</p> <p>附属小学校では、教育実習生（事前指導含む）16名、栄養教育実習生6名、公認心理師実習（スクールフレンド、大学院生）5名、学校インターンシップ15名、公認心理師見学実習（学部学生）17名等を受け入れ、多くの学生の研修の場となった。FD に関しては、大学教員と連携して研究に取り組んでいるほか、参観や研修会を実施しており、文部科学省研究開発学校の運営指導委員として3名の大学教員に指導助言を受けている。さらに、2月の公開研究会には大学教員12名が指導助言者として参画した。</p> <p>(5) 附属幼稚園における取組</p> <p>附属幼稚園では、教育実習生（事前指導含む）15名、インターンシップを2名受け入れたほか、11月には公認心理師見学実習として5名を受け入れ、実習後の振り返りを12月に行っており、幼児期の子どもの育ちを知ることのできる研修の場として貢献した。また、FDとして、ポルトガルから教育視察団が来訪した折に、大学教員1名の参画のもと、園の紹介資料の作成や当日の案内を実施した。さらに、文部科学省研究開発学校の推進にあたり、運営指導委員として大学教員2名に指導を受けた。令和5年2月の公開保育研究会においては、大学教員1名に企画運営及び講話を依頼したところ、参観者から学び深い研究会になったとの感想が寄せられた。</p> <div data-bbox="889 938 2056 1294" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>評価指標に関する達成状況【19-2】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 附属学校園で実施する教育実習生受入数：102名 ・ 附属学校園におけるインターンシップ受入数：39名 ・ 教員 FD 実施数：4回（附属高等学校「新教養基礎」「キャリアガイダンス」、中学校「研究室訪問」、小学校「公開研究会」） ・ 上記 FD 参加者に対するアンケート結果において、大学と附属学校の連携に関する意識向上及び授業改善に活かすことができたとする割合：86%（32/37名） </div> <div data-bbox="889 1337 2056 1430" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>令和4年次総合評価室自己評価結果【19-2】：【ii】達成水準を満たしている （判定理由・補足等）：大学と附属学校の協働を推進し、附属学校園で受け入れた教育実習</p> </div>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
	<p>及びインターンシップは、それぞれ目標値「100名以上」、「35名以上」を上回る「102名」及び「39名」となった。また、教員のFDについても、目標値「3回以上」を超える「4回」を実施しており、FD参加者に対するアンケート「回答者37名」では、目標値「80%以上」を上回る「86%」から、大学と附属学校との連携意識の向上及び授業改善に活用したとの結果が得られた。評価指標を全て達成したことにより、自己評価結果を【ii】と判定した。</p>

II 業務運営・財務内容等の状況
(1) 業務運営の改善及び効率化に関する事項

中期目標	<p>【M12】 内部統制機能を実質化させるための措置や外部の知見を法人経営に生かすための仕組みの構築、学内外の専門的知見を有する者の法人経営への参画の推進等により、学長のリーダーシップのもとで、強靱なガバナンス体制を構築する。（中期目標大綱㉑） ⇒ 関連する中期計画：【K20】 【K21】</p> <p>【M13】 大学の機能を最大限発揮するための基盤となる施設及び設備について、保有資産を最大限活用するとともに、全学的なマネジメントによる戦略的な整備・共用を進め、地域・社会・世界に一層貢献していくための機能強化を図る。（中期目標大綱㉒） ⇒ 関連する中期計画：【K22】</p>
------	---

※各年次計画の「総合評価室自己評価結果」は、以下の三段階の区分によって判定を行っています。

【iii】 達成水準を大きく上回っている 【ii】 達成水準を満たしている 【i】 達成水準を満たしていない

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p><中期計画【K20】></p> <p>○ 魅力ある大学として成長し続けるためのガバナンス体制を強化するため、学長の強いリーダーシップのもと、人事制度改革を行い、大学経営において学内外から専門性の高い人材の参画を得るとともに、ステークホルダーからの意見を積極的に大学運営に取り入れ、大学改革ビジョンに反映させる。このような取組みにより、一層強靱なガバナンス体制を構築しながら、内部統制にかかる体制を見直し、更なる実質化と透明化を図る。</p> <p><評価指標【S20-1】></p> <p>○ 経営協議会開催数が4回/年、学長特別顧問など有識者と学長及び法人執行部との話し合いの場の数を4回以上/年、実施。</p> <p><評価指標【S20-2】></p> <p>○ 経営協議会の学外委員からの提言の中で法人経営や大学改革ビジョンに活用した数：4件以上/年（内容は大学ウェブサイトで公表）。</p> <p><評価指標【S20-3】></p> <p>○ 人事制度改革や次代の経営人材を養成するための仕組みと人材養成方針を令和4年度までに策定し、内部評価・外部評価を第4期中期目標期間最終年度まで毎年度実施・検証。</p>	<p><令和4年次計画【20-1】の実施状況></p> <p>経営協議会の学外委員は、産業界、教育研究機関等から、経営的観点、国際的観点に加え、男女共同参画社会の実現のために高い見識をもって助言いただける者を選出しており、4回（6月、10月、1月、3月）開催した経営協議会において、法人経営、教育改革に関する専門的な見地からの意見を受け、大学運営に反映している。</p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果						
<p>の支援を受ける。会議においては、専門性の高い案件について意見を求め参考とする。学長特命補佐については、専門的知見に基づき、特定の事項について学長が補佐を受けられるような体制を整える。学長特別顧問については、学長の求めに応じて、大学の各種施策について、総合的・専門的見地から提言又は助言を得られるような体制を整える。特に、国立大学イノベーション創出環境強化事業を、学長を中心として推進するために、当該事業に関する専門性を有する学長特命補佐及び学長特別顧問を置く。</p> <div data-bbox="185 743 826 935" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>評価指標に関する目標値・達成水準【20-1】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・経営協議会開催数：4回 ・有識者と学長及び法人執行部との懇談会数：4回 </div>	<p>学長特命補佐より、共創工学部（仮称）設置準備への学術的観点からの助言を得て、設置申請書類に反映することができた。また、内閣府「国立大学イノベーション創出環境強化事業」においては、産学連携に係る有益な情報及び提言により複数の民間企業との産学連携が実現した。さらに、コロナ禍で滞りがちであった海外との交流についても、専門的見地からの支援により、オンラインでの国際交流を継続することが可能となった。</p> <p>学長特別顧問からは、大学間の連携に関して、経験に基づいた助言を得て、中央大学、東京大学との大学間包括連携協定を結ぶに至り、クロスアポイントメントやオムニバス授業の開催などの実質的な交流が検討された。加えて大学間の連携に基づく公募申請についても、申請準備が進められた。</p> <p>さらに、学内外の専門的意見を法人運営に反映させるため、有識者と学長及び法人執行部との懇談会を、計4回（学長特別顧問：5月、7月、10月、2月）実施した。なお、学長特命補佐からは定期的にメール等で専門的見地に基づく助言を得ている。</p> <div data-bbox="889 743 2056 911" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>評価指標に関する達成状況【20-1】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・経営協議会開催数：4回 ・有識者と学長及び法人執行部との懇談会数：4回 </div> <div data-bbox="889 954 2056 1121" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>令和4年次総合評価室自己評価結果【20-1】：【ii】達成水準を満たしている （判定理由・補足等）：経営協議会、及び有識者と学長及び法人執行部との懇談会について、評価指標である回数（4回／年）をそれぞれ開催しており、会議では学内外の専門的見地からの意見を受け、大学運営に活かしていることから、自己評価結果を【ii】と判定した。</p> </div>						
<p><令和4年次計画【20-2】></p> <p>○ 魅力ある大学として成長し続けるために、ステークホルダーからの意見として、経営協議会の学外委員からの提言を法人経営や大学改革ビジョンに活用する。</p>	<p><令和4年次計画【20-2】の実施状況></p> <p>経営協議会での経営協議会学外委員からの提言を受け、大学運営に反映した。提言活用数は下記4件であり、大学の国際化に関する提言が多く見受けられた。</p> <table border="1" data-bbox="889 1337 2056 1457"> <thead> <tr> <th>件数</th> <th>経営協議会学外委員からの提言</th> <th>提言を受け、大学運営への活用内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1</td> <td>環境報告書等について英語で発信することが重要であり、さらに、学生に英訳を担当させ、</td> <td>学生が英訳を担当し、英語版の環境報告書を作成した。本学 web サイト*で公開をしている。</td> </tr> </tbody> </table>	件数	経営協議会学外委員からの提言	提言を受け、大学運営への活用内容	1	環境報告書等について英語で発信することが重要であり、さらに、学生に英訳を担当させ、	学生が英訳を担当し、英語版の環境報告書を作成した。本学 web サイト*で公開をしている。
件数	経営協議会学外委員からの提言	提言を受け、大学運営への活用内容					
1	環境報告書等について英語で発信することが重要であり、さらに、学生に英訳を担当させ、	学生が英訳を担当し、英語版の環境報告書を作成した。本学 web サイト*で公開をしている。					

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果	
	<p>教育的効果に繋げてほしい。 (令和3年10月 経営協議会)</p>	<p>※「大学刊行物一覧」ページにて掲載 https://www.ocha.ac.jp/plaza/info/d009986_d/fil/kankyo_2021_EN.pdf</p>
	<p>2 外国人教員の人数、英語で実施している授業の割合、全学生に対する留学生受入れ及び派遣人数の割合、留学生増加に向けた計画等について、国際化への取組としてまとめて、経営協議会で議題として取り上げ議論していただきたい。 (令和3年10月 経営協議会)</p>	<p>経営協議会学外委員2名及び本学国際交流担当理事、国際教育センター長及びグローバル協力センター長等で懇談会を令和4年2月28日に開催し、海外協定校の拡充方針等、本学の国際戦略について意見交換を行った。特に、英語で教える科目の増加、交換留学生の増加について、計画的に進めるべきである等の意見があった。</p>
	<p>3 海外での大学ランク付けの基準はどれだけ国際化しているかどうかである。お茶の水女子大学が国内で得ている高い評価にマッチしないランク付けとなっているのはこのためである。 (令和3年10月 経営協議会)</p>	<p>海外向けに「英語版の大学紹介映像」（留学生のインタビュー動画含む）を作成^{*1}し、本学webサイト^{*2}にて公開した。 ※1：YouTube「ochadaivideo」 https://www.youtube.com/watch?v=CPZLLLhecPk ※2：Top ページ「Topics」、Information「大学紹介映像」にて掲載</p>
	<p>4 ホームページ、大学パンフレット等に留学生との交流場面等を盛り込み国際化をアピールしてはいかがか。 (令和3年10月 経営協議会)</p>	<p>「留学生の声」を収録した動画（英語版）を作成し^{*1}、本学webサイト^{*2}にて公開し、本学における国際化についてアピールできるよう対応を行った。 ※1：YouTube「ochadaivideo」 ※2：Information「大学紹介映像」内の「留学生の声」にて掲載</p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<div data-bbox="183 687 826 738" style="border: 1px solid black; background-color: #e0e0e0; padding: 2px;"> <p>評価指標に関する目標値・達成水準【20-2】</p> </div> <div data-bbox="183 738 826 798" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>・経営協議会学外委員の提言活用数：4件</p> </div>	<div data-bbox="882 245 1509 627" style="border: 1px solid black; padding: 5px;">  <p>▲お茶の水女子大学紹介映像（英語版）</p> </div> <div data-bbox="1547 239 2067 627" style="border: 1px solid black; padding: 5px;">  <p>▲留学生の声 紹介動画 【留学生 FAQ 動画】Hows Ochanomizu Life</p> </div> <div data-bbox="891 687 2056 738" style="border: 1px solid black; background-color: #e0e0e0; padding: 2px;"> <p>評価指標に関する達成状況【20-2】</p> </div> <div data-bbox="891 738 2056 798" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>・経営協議会学外委員の提言活用数：4件</p> </div> <div data-bbox="891 839 2056 1010" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>令和4年次総合評価室自己評価結果【20-2】：【ii】達成水準を満たしている （判定理由・補足等）：経営協議会学外委員からの提言を受け、指標である目標件数「4件」を大学運営に活用し、また、学生・留学生の協力を得ながら、本学の魅力を発信していることより、自己評価結果を【ii】と判定した。</p> </div>
<p><令和4年次計画【20-3】></p> <p>○ 人事制度改革や人材養成の仕組み及び方針を策定し、若手教員や女性教員を学長を補佐するポストに登用するとともに、理事の企画立案に関与させる体制の検討を行う。また、事務職員が法人経営に関わる業務体制の構築を検討・精査する。さらには策定した人材養成方針等に基づき、内部評価・外部評価を実施する体制を構築し、実施する。</p>	<p><令和4年次計画【20-3】の実施状況></p> <p>理事の企画立案に関与させる体制のひとつとして、学長や理事を補佐する役職を設置し、その職に女性を積極的に登用することで次世代の女性管理職の育成に取り組んでいる（6名中4名が女性教員）。また、事務職員の経営参画のためのポスト及び組織体制について検討を行い、3月に「国立大学法人お茶の水女子大学人事に関する方針」を策定した。</p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果											
<p>評価指標に関する目標値・達成水準【20-3】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人材育成方針：人材育成方針の策定。 ・内部評価・外部評価：内部評価・外部評価の実施体制の構築及び評価の実施。 	<p>評価指標に関する達成状況【20-3】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人材育成方針：人材育成方針を含め、「人事に関する方針」として策定した。 ・内部評価・外部評価：外部評価として経営協議会（3月）へ報告し、内部評価として役員会（3月）へ報告し、状況を確認した。 <p>令和4年次総合評価室自己評価結果【20-3】：【ii】達成水準を満たしている （判定理由・補足等）：指標に掲げる人材育成方針を含めた「人事に関する方針」の策定、及び内部評価・外部評価を実施する体制の構築が確認できたため、自己評価結果を【ii】と判定した。</p>											
<p><中期計画【K21】></p> <p>○ 学長の強いリーダーシップのもと、本学のミッション、ビジョンを遂行するため、学内外の女性の専門的知見を活かした法人運営、法人経営を推進する。その目的達成のため、管理職、監事、経営協議会委員等における高い女性比率を維持することで、本学が他大学のモデルとして、第5次男女共同参画基本計画（令和2年12月25日閣議決定）における男女共同参画社会の実現をリードしていく。</p> <p><評価指標【S21-1】></p> <p>○ 女性の役職者への登用及び人材養成を促進し、第4期中期目標期間における役職者全体並びに経営協議会委員に占める女性の比率を35%以上とする。</p>												
<p><令和4年次計画【21-1】></p> <p>○ 本学のミッション、ビジョンを遂行するため、女性の視点を取り入れた法人運営、法人経営を推進する。そのために、学長のリーダーシップのもと、教員人事会議や学長戦略機構会議などにおいて、本学の女性教員比率や女性役職者比率を周知するとともに、全学的に目標の達成の意識付けを図り、女性教員の積極的採用及び女性の役職者への登用について学内に浸透させる。また、経営協議会委員の女性比率を維持する。</p>	<p><令和4年次計画【21-1】の実施状況></p> <p>女性の視点を取り入れた法人運営、法人経営を推進するため、学長主催の教員人事会議では、新規採用の際に、女性教員を積極的に採用するよう常に周知した。女性の役職者登用については、学長や理事を補佐する役職を設置し、その職に女性を積極的に登用することで次世代の女性管理職の育成に取り組んでいる（6名中4名が女性教員）。なお、教職員における役職者*に占める女性比率は、44.7%であり（47名中21名が女性役職者）、経営協議会学外委員の女性比率は、令和3年度から引き続き50%を維持している（10名中5名が女性学外委員）。</p> <p>※「役職者」＝学長、理事、副理事、監事、管理職（副学長、評議員、附属学校部長、附属学校校長、副学校長等、課長級、研究科長、学部長、系長、附属図書館長）</p> <p>（参考）役職者における女性比率</p> <table border="1" data-bbox="887 1417 2063 1457"> <thead> <tr> <th>目標値・達成水準</th> <th>R4</th> <th>R3</th> <th>R2</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table>				目標値・達成水準	R4	R3	R2				
目標値・達成水準	R4	R3	R2									

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果							
<p data-bbox="188 357 826 411">評価指標に関する目標値・達成水準【21-1】</p> <ul data-bbox="188 416 826 507" style="list-style-type: none"> ・ 役職者に占める女性比率：35% ・ 経営協議会学外委員に占める女性比率：35% 	<table border="1" data-bbox="891 220 2063 264"> <tr> <td data-bbox="891 220 1182 264">35%</td> <td data-bbox="1182 220 1473 264">44.7%</td> <td data-bbox="1473 220 1765 264">34.8%</td> <td data-bbox="1765 220 2063 264">39.1%</td> </tr> </table> <p data-bbox="891 357 2063 411">評価指標に関する達成状況【21-1】</p> <ul data-bbox="891 416 2063 523" style="list-style-type: none"> ・ 役職者に占める女性比率：44.7%と計画を上回って実施している。 ・ 経営協議会学外委員に占める女性比率：50%と計画を上回って実施している。 <p data-bbox="891 564 2063 735">令和4年次総合評価室自己評価結果【21-1】：【iii】達成水準を大きく上回っている (判定理由・補足等)：役職者に占める女性比率、及び経営協議会学外委員に占める女性比率ともに目標値・達成水準を大きく上回って達成し、その他、次世代の女性管理職の育成にも取り組んでいるため、自己評価結果を【iii】と判定した。</p>				35%	44.7%	34.8%	39.1%
35%	44.7%	34.8%	39.1%					
<p data-bbox="165 836 427 868"><中期計画【K22】></p> <p data-bbox="165 874 2074 986">○ 地球環境に配慮した教育研究環境を推進する「キャンパスマスタープラン 2021」に基づき、カーボンニュートラルを目指したCO2削減を積極的に推進する。また、本学の理念、教育研究及び社会貢献における目標を達成するため、施設・設備の有効活用、大学施設の改修・改築等を行い、サステイナブル・キャンパスの実現と、魅力あるキャンパスの構築を進める。これらの機能強化を通して、地域・社会・世界に貢献していく。</p> <p data-bbox="188 992 483 1024"><評価指標【S22-1】></p> <p data-bbox="188 1031 2074 1104">○ キャンパスマスタープラン 2021、毎年度作成する「環境報告書」に基づき、エネルギーマネジメントを推進し、「2027(令和9年度)」までに大学全体でCO2排出量(エネルギー使用原単位)を2020(令和2)年度(3,110t)と比して8%以上低減する。</p> <p data-bbox="188 1110 483 1142"><評価指標【S22-2】></p> <p data-bbox="188 1149 1420 1181">○ 全学的な施設マネジメントを推進し、取組状況を毎年度自己点検・評価することによる達成度。</p>								
<p data-bbox="165 1203 524 1235"><令和4年次計画【22-1】></p> <p data-bbox="165 1241 837 1433">○ 「2027(令和9年度)」までに大学全体でCO2排出量(エネルギー使用原単位)を2020(令和2)年度(3,110t)と比して8%以上低減するため、更新計画に基づき、今後改修する建物において各種の省エネ機器に取り替えることにより、温室効果ガス(CO2</p>	<p data-bbox="869 1203 1361 1235"><令和4年次計画【22-1】の実施状況></p> <p data-bbox="891 1241 2074 1433">建物の更新計画、地球温暖化対策に基づき下記の工事を実施した。その結果、照明器具については計89台の人感センサー式照明スイッチを導入し、学内の約81%が省エネ型機器となった。また、空調設備については計22台の設備を省エネ型機器へと更新し、学内の約68%が省エネ型機器になった。さらに、電気の契約をCO2が発生しない電力に切り替えたことにより、温室効果ガス排出量の著しい削減につながった。</p>							

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果										
<p>等) 排出量を削減する。また、学内予算として『地球温暖化対策』の工事費用を確保して、地球温暖化対策(温室効果ガス排出量の削減)計画に基づき、照明器具のLED化や老朽化したエアコンの更新を行うことにより、温室効果ガス(CO2等)排出量を削減する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>評価指標に関する目標値・達成水準【22-1】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・CO2 排出量低減率：2% </div>	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width: 30%;">工事内容</th> <th>設置場所</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>照明更新</td> <td>文教育学部1号館、大学食堂、附属中学校第1校舎</td> </tr> <tr> <td>空調更新</td> <td>文教育学部1号館、理学部2号館、大学本館、理学部3号館、人間文化棟</td> </tr> <tr> <td>換気設備</td> <td>附属小学校第1校舎、共通講義棟1号館</td> </tr> </tbody> </table> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>評価指標に関する達成状況【22-1】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・CO2 排出量低減率：CO2 排出量逡減率 66.4% (CO2 排出量 1,108 t-co2) </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>令和4年次総合評価室自己評価結果【22-1】：【iii】達成水準を大きく上回っている (判定理由・補足等)：令和3年度に引き続き、照明器具・空気設備を省エネ型機器へ更新した。また、電気の契約について、CO2が発生しない電力に切り替えることにより、CO2排出量低減率は「66.4%」となり、目標値の「2%」を大幅に達成したため、自己評価結果を【iii】と判定した。</p> </div>	工事内容	設置場所	照明更新	文教育学部1号館、大学食堂、附属中学校第1校舎	空調更新	文教育学部1号館、理学部2号館、大学本館、理学部3号館、人間文化棟	換気設備	附属小学校第1校舎、共通講義棟1号館		
工事内容	設置場所										
照明更新	文教育学部1号館、大学食堂、附属中学校第1校舎										
空調更新	文教育学部1号館、理学部2号館、大学本館、理学部3号館、人間文化棟										
換気設備	附属小学校第1校舎、共通講義棟1号館										
<p><令和4年次計画【22-2】></p> <p>○ キャンパスマスタープラン2021、インフラ長寿命化計画(個別施設計画)、新型コロナウイルス対策工事計画に基づき、ファシリティマネジメントを行うとともに、全学的スペース管理を継続し、トップマネジメントによるスペース管理強化など、スペースマネジメントを行う。また、カーボンニュートラル対策工事計画に基づき、エネルギーマネジメントを行う。</p>	<p><令和4年次計画【22-2】の実施状況></p> <p>キャンパスマスタープラン2021に基づき、文教育学部1号館(I期)改修工事を実施した(令和4年6月末から工事に着手し、令和5年2月末に完成した)。また、新型コロナウイルス対策工事計画に基づき、共通講義棟1号館及び附属小学校第1校舎の換気設備工事を実施し、令和4年9月末に完成した。さらに、インフラ長寿命化計画(個別施設計画)に基づくファシリティマネジメント、カーボンニュートラル対策工事計画に基づく、エネルギーマネジメントを実施した。</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width: 30%;">工事内容</th> <th>設置場所</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>換気設備工事</td> <td>共通講義棟1号館、附属小学校第1校舎</td> </tr> <tr> <td>照明器具のLED化工事</td> <td>文教育学部1号館、大学食堂、附属中学校第1校舎</td> </tr> <tr> <td>変圧器の更新工事</td> <td>附属高等学校</td> </tr> <tr> <td>ガス式空調設備改修工事</td> <td>大学本館、文教育学部1号館</td> </tr> </tbody> </table>	工事内容	設置場所	換気設備工事	共通講義棟1号館、附属小学校第1校舎	照明器具のLED化工事	文教育学部1号館、大学食堂、附属中学校第1校舎	変圧器の更新工事	附属高等学校	ガス式空調設備改修工事	大学本館、文教育学部1号館
工事内容	設置場所										
換気設備工事	共通講義棟1号館、附属小学校第1校舎										
照明器具のLED化工事	文教育学部1号館、大学食堂、附属中学校第1校舎										
変圧器の更新工事	附属高等学校										
ガス式空調設備改修工事	大学本館、文教育学部1号館										

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果		
<div data-bbox="185 555 826 778" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>評価指標に関する目標値・達成水準【22-2】</p> <ul style="list-style-type: none"> 全学的な施設マネジメントに基づく取組状況の自己点検・評価達成度：キャンパスマスタープランに基づく計画的なキャンパス環境整備の実施。 </div>	<div data-bbox="889 220 2054 301" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <table border="1"> <tr> <td style="width: 30%;">電気式空調設備更新工事</td> <td>理学部 2 号館、理学部 3 号館、人間文化創成科学研究科・全学共用研究棟</td> </tr> </table> </div> <p style="margin-top: 20px;">スペースマネジメントについては、令和 4 年度は文教育学部 1 号館第 I 期改修工事期間にあたり、工事期間中の代替部屋が大学管理の建物全体に及んだため、比較的影響の少ない理学部で実施した。オープンラボを理学部 1 号館に設置し、施設使用料（「スペースチャージ」）に関する内規を策定した。</p> <div data-bbox="889 555 2054 898" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>評価指標に関する達成状況【22-2】</p> <ul style="list-style-type: none"> 全学的な施設マネジメントに基づく取組状況の自己点検・評価達成度：（1）共通講義棟 1 号館・附属小学校第 1 校舎教室の換気設備設置工事、（2）文教育学部 1 号館、大学食堂・附属中学校第 1 校舎の LED 照明改修工事、（3）大学本館、文教育学部 1 号館、理学部 2 号館、理学部 3 号館・人間文化創成科学研究科・全学共用研究棟の空調設備改修工事、（4）附属高等学校の変圧器更新工事を実施した。 施設使用料（「スペースチャージ」）では、理学部 1 号館にオープンラボを設置し、必要な事項を定める内規を策定した。 </div> <div data-bbox="889 938 2054 1110" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>令和 4 年次総合評価室自己評価結果【22-2】：【ii】達成水準を満たしている （判定理由・補足等）：換気設備工事や照明器具の LED 化工事など、キャンパスマスタープラン 2021 に基づく計画的なキャンパス環境整備を着実に実行しているため、自己評価結果を【ii】と判定した。</p> </div>	電気式空調設備更新工事	理学部 2 号館、理学部 3 号館、人間文化創成科学研究科・全学共用研究棟
電気式空調設備更新工事	理学部 2 号館、理学部 3 号館、人間文化創成科学研究科・全学共用研究棟		

II 業務運営・財務内容等の状況
(2) 財務内容の改善に関する事項

中期目標	<p>【M14】 公的資金のほか、寄附金や産業界からの資金等の受入れを進めるとともに、適切なリスク管理のもとでの効率的な資産運用や、保有資産の積極的な活用、研究成果の活用促進のための出資等を通じて、財源の多元化を進め、安定的な財務基盤の確立を目指す。併せて、目指す機能強化の方向性を見据え、その機能を最大限発揮するため、学内の資源配分の最適化を進める。（中期目標大綱③）</p> <p>⇒ 関連する中期計画：【K23】</p>
------	---

※各年次計画の「総合評価室自己評価結果」は、以下の三段階の区分によって判定を行っています。

【iii】 達成水準を大きく上回っている 【ii】 達成水準を満たしている 【i】 達成水準を満たしていない

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p><中期計画【K23】></p> <p>○ 持続可能な大学経営を確立するため、ステークホルダーの意見を参考にしながら、適切なリスク管理のもとでの効率的な資産運用や、保有資産の積極的な活用、競争的資金、科学研究費補助金、受託研究費、寄附講座、寄附金等による財源の多元化を進め、安定的な財務基盤の確立を目指す。さらに大学経営ビジョンに基づき設定した機能強化を円滑に行うため、学内の資源配分の最適化を進める。</p> <p><評価指標【S23-1】></p> <p>○ 多様なステークホルダーの意見を参考に産業界からの資金受入を進め、その状況を毎年度精査するとともに、適切なリスク管理に基づく保有資産の積極的な活用（不要となった土地の売却、定期借地権等）により、財源の多元化を進め、自己収入の強化を推進する。これらの総額として、第4期中期目標期間における自己収入額の平均が第3期中期目標期間の平均を超える。</p> <p><評価指標【S23-2】></p> <p>○ 大学の将来構想に基づいた機能強化すべき取組に対し、学内資源配分の重点化を予算編成方針において行う。また機能強化すべき組織、取組に対する予算配分を令和4年度当初配分額を基準として、毎年度維持またはそれ以上の予算額を配分。</p>	<p><令和4年次計画【23-1】の実施状況></p> <p>東村山郊外園の土地の一部売却を令和4年4月に行い、売却額は約9億円であった（本件は多様なステークホルダーからの意見を参考に、産業界からの資金受入を進めた計画である）。また、本学創立150周年を迎えるにあたり、募金活動を11月から積極的に進めており、自己収入額は当初の目標額を大幅に超過する約21.3億円となった。なお、保有資産の積極的な活用については、令和5年1月末までに、令和3年度末に廃止した学生寮（「国際学生宿舎」、東京都板橋区）の解体工事を完了し、2月から跡地に定期借地権を設定する契約を交わしている。よって、令和4</p>
<p><令和4年次計画【23-1】></p> <p>○ 保有財産を積極的に活用するため、老朽化した学生寮（東京都板橋区）を解体し、跡地に財源の多元化を進める取組として、企業に定期借地権を設定して自己収入の強化を行う。</p>	

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p data-bbox="188 320 826 368">評価指標に関する目標値・達成水準【23-1】</p> <ul data-bbox="188 376 826 504" style="list-style-type: none"> ・自己収入額：12.5 億円 ・保有資産の積極的活用：学生寮（東京都板橋区）跡地に定期借地権を設定。 	<p data-bbox="887 225 1397 256">年度の地代収入は、2,591 万円となった。</p> <p data-bbox="887 320 2056 368">評価指標に関する達成状況【23-1】</p> <ul data-bbox="887 376 2056 520" style="list-style-type: none"> ・自己収入額：約 21.3 億円 ・保有資産の積極的活用：1 月末までに既存の建物である学生寮（東京都板橋区）を撤去し、2 月より定期借地権を設定した。 <p data-bbox="887 560 2056 727">令和 4 年次総合評価室自己評価結果【23-1】：【iii】達成水準を大きく上回っている （判定理由・補足等）：土地の売却と創立 150 周年の募金活動により、令和 4 年度の自己収入額は約 21.3 億円となった。また、定期借地権の設定をすることで保有資産の積極的活用を進める等、自己収入の強化に繋がったため、自己評価結果を【iii】と判定した。</p>
<p data-bbox="165 831 524 863"><令和 4 年次計画【23-2】></p> <p data-bbox="165 871 837 1134">○ 教育改革（総合知開発研究機構）、研究推進（ヒューマンライフイノベーション開発研究機構、サステイナブル社会実装機構）、社会貢献（グローバル女性リーダー育成研究機構）など、第 4 期中期目標期間に機能強化すべき取組を推進するため、予算編成方針において重点的に予算配分することを明記し、学内資源配分の重点化を実現する。</p>	<p data-bbox="864 831 1361 863"><令和 4 年次計画【23-2】の実施状況></p> <p data-bbox="887 871 2078 1015">機能強化及び第 4 期ミッション実現に向け、事業を担当する組織にヒアリングを実施して必要な予算配分を行った。配分額の決定に当たっては、理事及び学長で検討を繰り返し、真に必要な予算を重点的に配分した。令和 4 年度学内予算編成方針を策定し、方針に基づいて令和 4 年度学内予算を策定した。</p> <p data-bbox="887 1023 2078 1174">国立大学イノベーション創出環境強化事業に関する取組として、共同研究者等を増やすことを目指した基盤的設備（質量分析装置）の充実、共創工学部（仮称）設置に向けた環境整備、SDGs 研究所や湾岸生物教育研究所、ジェンダード・イノベーション研究所の組織整備やスタートアップに係る事業推進、学内公募型研究を実施した。</p> <p data-bbox="887 1182 2078 1414">「成果を中心とする実績状況に基づく配分」の評価結果による順位付けにより、各学部には予算の傾斜配分を実施した。なお、予算は、理学部：150 万円、文教育学部：100 万円、生活科学部：50 万円で配分され、財源は学長裁量経費である。予算の用途は、各学部の受託研究、共同研究等の外部資金獲得額増加や教育・研究の充実につながるものとし、具体的な用途は各学部長の裁量に委ねた。本件は試行的な取組のため、各学部の具体的な取組内容や成果について年度終了後に各学部を対象に調査を行い、本指標の活用方法について検討を重ねた。</p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p data-bbox="188 225 826 272">評価指標に関する目標値・達成水準【23-2】</p> <ul data-bbox="188 280 826 443" style="list-style-type: none"> ・機能強化のための予算配分額：3.5 億円 ・大学の将来構想に基づく予算配分：第4期中期目標期間ミッションを実現するための体制整備・取組推進のための予算配分の実施。 	<p data-bbox="887 225 2054 272">評価指標に関する達成状況【23-2】</p> <ul data-bbox="887 280 2054 459" style="list-style-type: none"> ・機能強化のための予算配分額：令和4年度学内予算編成方針において第4期ミッション実現構想に基づく予算配分を実施することを明記しており、当初予算配分において約3.5億円を配分した。 ・大学の将来構想に基づく予算配分：上記に同じ。 <p data-bbox="887 504 2054 675">令和4年次総合評価室自己評価結果【23-2】：【ii】達成水準を満たしている (判定理由・補足等)：将来構想に基づく機能強化の取組に対し、目標値と同数の約「3.5億円」を配分するとともに、ヒアリングの実施や十分な検討の元に配分を行ったため、自己評価結果を【ii】と判定した。</p>

II 業務運営・財務内容等の状況
(3) 教育及び研究並びに組織及び運営の状況について自ら行う点検及び評価並びに当該状況に係る情報の提供に関する事項

中期目標	<p>【M15】 外部の意見を取り入れつつ、客観的なデータに基づいて、自己点検・評価の結果を可視化するとともに、それを用いたエビデンスベースの法人経営を実現する。併せて、経営方針や計画、その進捗状況、自己点検・評価の結果等に留まらず、教育研究の成果と社会発展への貢献等を含めて、ステークホルダーに積極的に情報発信を行うとともに、双方向の対話を通じて法人経営に対する理解・支持を獲得する。（中期目標大綱④）</p> <p>⇒ 関連する中期計画：【K24】</p>
-------------	--

※各年次計画の「総合評価室自己評価結果」は、以下の三段階の区分によって判定を行っています。

【iii】 達成水準を大きく上回っている 【ii】 達成水準を満たしている 【i】 達成水準を満たしていない

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p><中期計画【K24】></p> <p>○ 大学の基本的目標及びミッション実現に向けて年次計画を策定し、教育研究の成果と社会発展への貢献実績、業務運営・財務内容等の状況、予算、収支計画及び資金計画、施設・整備計画及び人事に関する計画等について公表する。それらの成果や計画の到達度等に関する自己点検・評価を毎年度行うとともに、経営協議会委員である民間企業、大学関係等各界の外部有識者による評価に基づいて次年度計画の見直しを行い、その透明性の高い評価結果を公表することで、国民の本学に対する理解を得る。また、教員の適正な評価及び教員自身の向上に資するため、5つの評価領域（教育、研究、社会貢献・産学官連携、国際活動、大学運営）における定量的評価の実施と、ピアレビューによる定性的評価を実施することで、教員個人の評価を行い、法人運営の一助にする。</p> <p><評価指標【S24-1】></p> <p>○ 策定された年次計画に基づく自己点検・評価を毎年度実施し、実績報告書を策定して公表。</p> <p><評価指標【S24-2】></p> <p>○ 経営協議会委員である民間企業、大学関係等各界の外部有識者による評価を毎年度実施し、報告書等により改善状況や法人経営への活用状況を公表。</p> <p><評価指標【S24-3】></p> <p>○ 教育研究の成果、社会貢献等の情報をステークホルダーに発信。</p> <p><評価指標【S24-4】></p> <p>○ 定量的評価及び定性的評価（ピアレビュー）による教員個人活動評価を毎年度実施する。定量的評価の活動（教育、研究、社会貢献・産学（官）連携、大学運営、国際）を令和3年度の平均と比して第4期中期目標期間最終年度までに素点実績を10%（目標とする素点の平均：201点以上）以上向上させるとともに、「THE世界大学ランキング日本版」のランクを25位以内。</p>	<p><令和4年次計画【24-1】の実施状況></p>
<p><令和4年次計画【24-1】></p>	<p><令和4年次計画【24-1】の実施状況></p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p>○ 令和3年度及び第3期中期目標期間における業務運営、教育研究、社会貢献等の実績を取りまとめて公表するとともに、第4期中期目標期間における自己点検・評価体制を検討し、法人運営に資する自己点検・評価制度を構築する。また、令和5年度に実施する取組について年次計画を策定し、公表する。さらに、令和5年度に大学機関別認証評価を受審する準備を行う。</p> <div data-bbox="185 667 826 895" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>評価指標に関する目標値・達成水準【24-1】</p> <ul style="list-style-type: none"> 自己点検・評価の実施及び実績報告書の策定・公表：令和3年度計画及び第3期中期目標期間の自己点検・評価の実施及び実績報告の策定・公表、令和5年次計画の策定・公表。 </div>	<p>令和3年度及び第3期中期目標期間における業務の実績を取りまとめ、報告書として公表した。また、第4期中期目標期間における本学の自己点検・評価の実施体制について、第3期中期目標期間の状況を基盤として、総合評価室を中心に進捗を管理する体制をとることを確認し、令和4年次計画に対する進捗管理を行った。</p> <p>並行して、自己点検・評価を含めた本学の質保証体制を見直し、「国立大学法人お茶の水女子大学における内部質保証に関する基本方針」を制定した。本基本方針の下で、施設設備、学生支援、入学者選抜に関する各自己点検・評価実施要項を整備することにより、学長を中心とした、自己点検・評価及び改善のサイクルに基づく本学の内部質保証体制を確認した。また、令和5年度に受審する大学機関別認証評価の準備として、認証評価基準に沿った大学の運営状況を確認するとともに、自己評価書の作成を進めた。</p> <div data-bbox="889 667 2056 855" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>評価指標に関する達成状況【24-1】</p> <ul style="list-style-type: none"> 自己点検・評価の実施及び実績報告書の策定・公表：令和3年度及び第3期中期目標期間の自己点検・評価の実施及び実績報告書の策定・公表、令和5年次計画の策定・公表、ともに実施済み。 </div> <div data-bbox="889 895 2056 1031" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>令和4年次総合評価室自己評価結果【24-1】：【ii】達成水準を満たしている (判定理由・補足等)：自己点検・評価の実施及び実績報告書の策定と公表について、スケジュールどおりに進行しているため、自己評価結果を【ii】と判定した。</p> </div>
<p><令和4年次計画【24-2】></p> <p>○ 令和3年度及び第3期中期目標期間における業務運営、教育研究、社会貢献等の状況に関して、国立大学法人評価委員会から評価を受けるとともに、評価結果を公表する。また、評価結果について経営協議会に報告し、得られた提言等を法人運営に活用する。</p>	<p><令和4年次計画【24-2】の実施状況></p> <p>令和3年度及び第3期中期目標期間における業務運営、教育研究、社会貢献等の本学の取組に関する評価結果について学内会議(学長戦略機構会議)で報告を行い、本学の戦略的な取組等が高い評価を得たことを検証するとともに、引き続き第4期も重点的に取組を進めていくことを確認した。さらに、課題の改善として、4年目終了時評価(現況調査表)の減点要素やコメントとして挙げられた、カリキュラムポリシーの再確認、シラバスの精粗の解消等に関する取組を推進した。</p> <p>また、第3期までの取組を踏まえつつ、本学の第4期ビジョンを改めて説明したうえで令和5</p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p data-bbox="188 632 826 683">評価指標に関する目標値・達成水準【24-2】</p> <ul data-bbox="188 691 826 895" style="list-style-type: none"> ・外部有識者による評価の実施及び結果に基づく改善状況・法人経営への活用状況の公表：令和3年度及び第3期中期目標期間に係る実績評価の受審、評価結果の経営協議会等における報告、法人経営に活用。 	<p data-bbox="887 225 2078 376">年次計画（案）について経営協議会で審議を行った。経営協議会学外委員から、指標を設けて中期目標及び計画を定量化・可視化したことについて高い評価を受けたことから、令和5年度以降に実施する年次計画に対する外部評価では、指標の達成度を評価の観点の中心とすることとして、第4期中期目標期間における評価方法の構築に活かした。</p> <p data-bbox="887 384 2078 571">そのほか、年次計画において、事務の高度化を目指していくことについても学外委員から提言を受け、他大学において、事務職員が高度な専門性を身に着けることにより、教員が研究に専念できる環境を構築し、研究の質を向上させている事例の紹介があった。これを受けて、令和5年次計画の実施状況を踏まえた今後の年次計画への反映や、法人運営への活用について検討していくこととした。</p> <p data-bbox="887 632 2056 683">評価指標に関する達成状況【24-2】</p> <ul data-bbox="887 691 2056 895" style="list-style-type: none"> ・外部有識者による評価の実施及び結果に基づく改善状況・法人経営への活用状況の公表：評価結果について、学内会議（学長戦略機構会議）で報告を行い、第3期中期目標期間に実施した取組の検証を行い、改善すべき点に関する取組を実施した。また、令和5年次計画について、経営協議会学外委員から提言を受け、令和5年次計画の策定過程において検討していくこととした。 <p data-bbox="887 946 2056 1145">令和4年次総合評価室自己評価結果【24-2】：【ii】達成水準を満たしている （判定理由・補足等）：令和3年度及び第3期中期目標期間における業務運営、教育研究、社会貢献等の状況に関して、国立大学法人評価委員会から評価を受け、公表し、経営協議会へ報告した際に得られる提言等を法人運営に活用しているため、自己評価結果を【ii】と判定した。</p>
<p data-bbox="165 1249 521 1281"><令和4年次計画【24-3】></p> <p data-bbox="165 1289 837 1441">○ 第3期中期目標期間における教育・研究活動、及び社会貢献活動等に関する情報発信について検証し、情報収集、及び発信方法の改善を検討する。令和3年度に実施した「お茶の水女子大学における研</p>	<p data-bbox="864 1249 1361 1281"><令和4年次計画【24-3】の実施状況></p> <p data-bbox="887 1289 2078 1361">第3期中期目標期間における教育・研究活動、及び社会貢献活動等に関する情報発信について、過去の実績を元に検証し、発信方法の改善、及び以下の取組を行った。</p> <p data-bbox="887 1369 1144 1401">(1) 教育・研究活動</p> <p data-bbox="909 1409 2078 1441">博士論文に関する研究データの適切な管理及び大学への提出について、博士論文提出要項に記</p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p>研究データ管理に関するアンケート結果」を分析し、研究データポリシー策定準備を進める。</p>	<p>載するとともにマニュアルを作成し、令和4年度の学位授与申請者、及び希望者向けに周知した。研究不正防止及び情報セキュリティに関する研修では、全教職員及び大学院生を対象に研究データマネジメントにかかる社会的背景や、本学の取組を周知した。また、令和3年度実施の「お茶の水女子大学における研究データ管理に関するアンケート結果」を文系・理系別に分析し、分析結果は GaKuNinRDM のマニュアルとともに全学教員及び附属学校教員向けに周知した。</p> <p>研究・産学連携に関することでは、研究データポリシーのみではなく研究インテグリティの観点からも規則を整備する必要があるため、検討プロジェクトチームの設置期間を令和5年度まで延長し、慎重に整備に向けた取組を行うこととした。</p> <p>(2) 広報活動</p> <p>広報活動においては、4つの案件（①with コロナ時代の行事の対面再開、②創立150周年への（同窓生等からの）関心の醸成、③多様なステークホルダーへの情報発信、④魅力あるコンテンツへの強化）を進めた。</p> <p>①については、4年ぶりのホームカミングデイ開催、3年ぶりのオープンキャンパスキャンパスツアー再開、大学見学（受験希望者（高校生等）とその保護者）再開を行った。事後アンケートを実施したオープンキャンパス、ホームカミングデイでは8割以上が満足との回答を得られた。</p> <p>②については、創立150周年シンボルマークの決定（本学関係者を対象にデザインを募集、本学学生の作品が最優秀賞受賞・採用）、特設ウェブサイトの制作を行った。また、広報を通じて寄附に繋がるよう、特設サイトに寄附金申し込みのページを設けた。さらに③については、従来のステークホルダーである高校生、大学関係者等のみならず、企業への広報も強化するとともに、産学連携を推進するため、ビジネス誌／オンライン記事に本学の取組や特色を掲載した（3誌、3パターン）。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: flex-end;"> <div style="text-align: center;">  <p>▲創立150周年シンボルマーク</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>▲創立150周年特設サイト TOP ページ</p> </div> </div>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p data-bbox="188 639 826 687">評価指標に関する目標値・達成水準【24-3】</p> <ul data-bbox="188 687 826 938" style="list-style-type: none"> ・教育研究の成果、社会貢献等の情報をステークホルダーに発信：教育研究活動状況・研究成果に加えて、研究のエビデンスとなるデータ等を国内外に向けて積極的に発信するため、令和3年度に実施した研究データに関する学内アンケートの分析を実施。 	<div data-bbox="936 268 1352 549" style="text-align: center;"> </div> <div data-bbox="891 560 1435 619" style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>『日経ビジネス（1月13日発売、1月16日号）』</p> </div> <p data-bbox="891 639 2056 687">評価指標に関する達成状況【24-3】</p> <ul data-bbox="891 687 2056 938" style="list-style-type: none"> ・教育研究の成果、社会貢献等の情報をステークホルダーに発信：研究データ管理に関するアンケートの回答結果を文系・理系に分類し、分析した。分析結果は、全学教員及び附属学校教員に向けて周知した。今後、公開可能な研究データを有すると回答した教員数名に対し、令和5年度にインタビューを実施する予定である。ほか、創立150周年特設サイトやシンボルマークの制作、本学の取組や特色をビジネス誌に掲載する等、ステークホルダー及び産業界へ向けた情報発信を強化した。 <div data-bbox="891 979 2056 1155" style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin-top: 20px;"> <p>令和4年次総合評価室自己評価結果【24-3】：【ii】達成水準を満たしている （判定理由・補足等）：研究データ管理に関するアンケートの実施と分析を行い、学内周知したことや、創立150周年に向けた広報展開を進め、ステークホルダー及び産業界へのアプローチを行ったことにより達成水準を満たしているとし、自己評価結果を【ii】と判定した。</p> </div>
<p data-bbox="165 1257 524 1289"><令和4年次計画【24-4】></p> <ul data-bbox="165 1294 837 1447" style="list-style-type: none"> ○ 定量的評価及び定性的評価（ピアレビュー）による教員個人活動評価を実施する。教員の活動の活性化及び諸情報のデータベースへの入力を促し、定量的評価の活動（教育、研究、社会貢献・産学（官） 	<p data-bbox="864 1257 1361 1289"><令和4年次計画【24-4】の実施状況></p> <p data-bbox="880 1294 1115 1326">（1）教員活動評価</p> <p data-bbox="880 1331 2078 1447">教員活動状況データベース（以下、「データベース」という）を用いて、定量的評価及び定性的評価による教員評価を実施した。教員評価の実施に当たっては、入力依頼等による制度の周知を行うとともに、researchmapと連動したデータベースの活用や教員の活動の活性化を促したこ</p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<p>連携、大学運営、国際) について、素点平均点の目標を 185 点以上とする。また、大学の活動の成果として、「THE 世界大学ランキング日本版」のランクについて 25 位以内を目指す。</p> <div data-bbox="185 901 826 1129" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 20px;"> <p>評価指標に関する目標値・達成水準【24-4】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教員活動評価（定量的評価）における素点平均点：185 点 ・ 「THE 世界大学ランキング日本版」ランク：25 位以内 </div>	<p>とにより、令和 4 年度に実施した教員活動評価（定量的評価）における素点平均点は、令和 3 年度の約 183 点から 5 点近く向上する約 187.6 点となり、目標点 185 点を上回った。</p> <p>令和 4 年度は、さらにデータベースの利便性を向上させるため、researchmap との連携強化のための改修を行い、従来よりも精度の高い情報を researchmap に移行できるようになったほか、同改修により、マスコミによる報道や他機関における講演会、公開講座等への参加の実績を本学 Web サイト「研究者情報」で公表できるようにしたことで、研究・社会貢献に関する情報発信を強化した。</p> <p>(2) THE 日本大学ランキング</p> <p>THE 日本大学ランキング 2023*の結果が令和 5 年 3 月 23 日に公表され、本学は前回より 7 つ順位を下げた 32 位であった。当該ランキングは、(1)教育リソース、(2)教育充実度、(3)教育成果、(4)国際性の 4 分野で構成されており、(1)(2)(4)については前年度と同程度の順位であったが、(3)教育成果の順位が前回の 51 位から 132 位へと大きく後退した。この(3)教育成果は、①企業人事の評判調査及び②日本の高等教育機関研究者による大学の教育評判調査の結果であり、学長戦略機構会議にて現状の確認を行った。</p> <p>(※2023 より名称変更 旧名称：THE 世界大学ランキング日本版)</p> <div data-bbox="889 901 2056 1067" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 20px;"> <p>評価指標に関する達成状況【24-4】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教員活動評価（定量的評価）における素点平均点：約 187.6 点 ・ 「THE 世界大学ランキング日本版」ランク：32 位（THE 日本大学ランキング 2023） </div> <div data-bbox="889 1109 2056 1281" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 20px;"> <p>令和 4 年次総合評価室自己評価結果【24-4】：【i】達成水準を満たしていない</p> <p>(判定理由・補足等)：教員活動評価（定量的評価）における素点平均は目標値より 2.6 点上回ったが、THE 日本大学ランキングでは目標値（前回順位）よりも 7 つ順位を下げた結果となったため、自己評価結果を【i】と判定した。</p> </div>

II 業務運営・財務内容等の状況
(4) その他業務運営に関する重要事項

中期目標	<p>【M16】AI・RPA (Robotic Process Automation) をはじめとしたデジタル技術の活用や、マイナンバーカードの活用等により、業務全般の継続性の確保と併せて、機能を高度化するとともに、事務システムの効率化や情報セキュリティ確保の観点を含め、必要な業務運営体制を整備し、デジタル・キャンパスを推進する。(中期目標大綱⑳)</p> <p>⇒ 関連する中期計画【K25】</p>
------	--

※各年次計画の「総合評価室自己評価結果」は、以下の三段階の区分によって判定を行っています。

【iii】達成水準を大きく上回っている 【ii】達成水準を満たしている 【i】達成水準を満たしていない

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果				
<p><中期計画【K25】></p> <p>○ 効果的・効率的な業務運営を行うため、RPA の維持、押印・対面・書面等により実施していた従来の業務のデジタル化を推進するとともに、情報セキュリティ向上のための情報基盤システムを維持・強化し、運用・管理体制の整備・強化を進める。</p> <p><評価指標【S25-1】></p> <p>○ 業務のデジタル化に向けた改革方針を令和4年度までに策定し、その改革方針に基づき事務部門の定型業務等がデジタル化された業務数を第4期中期目標期間最終年度までに15件以上とする。</p> <p><評価指標【S25-2】></p> <p>○ お茶の水女子大学 CSIRT によるサイバーセキュリティ対策基本計画に基づく取組状況について、毎年度、自己点検・評価する。その評価結果をもとに毎年度、取組状況の改善を行う。また、情報セキュリティ向上のための研修を毎年度2回以上実施。</p>	<p><令和4年次計画【25-1】の実施状況></p> <p>「国立大学法人お茶の水女子大学における事務システムの効率化等に関する改革方針」を策定し、方針に基づき、副学長（事務総括）をトップとしたプロジェクトチーム「事務システム効率化プロジェクトチーム」を設置した。なお、プロジェクトチームは各課から1名ずつ選出した職員で構成されている。電子決裁の本格導入をはじめとし、デジタル化により、計12件の業務改革が進んだ。</p> <table border="1" style="width: 100%;"> <thead> <tr> <th style="width: 50%;">項目</th> <th>デジタル化の内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>①電子決裁の導入</td> <td>グループウェアを使用した電子決裁である。試行期間を設け、各課から意見を取り、試行期間から継続して電子決裁システムとしての本格</td> </tr> </tbody> </table>	項目	デジタル化の内容	①電子決裁の導入	グループウェアを使用した電子決裁である。試行期間を設け、各課から意見を取り、試行期間から継続して電子決裁システムとしての本格
項目	デジタル化の内容				
①電子決裁の導入	グループウェアを使用した電子決裁である。試行期間を設け、各課から意見を取り、試行期間から継続して電子決裁システムとしての本格				
<p><令和4年次計画【25-1】></p> <p>○ 業務のデジタル化に向けた改革方針を策定する。策定した改革方針に基づき、事務部門の定型業務等のデジタル化を実施する。</p>					

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果	
		的導入とした。
	②教員活動状況データベースの高度化	利便性向上、researchmap との連携強化、研究・社会貢献の情報発信充実のため、マスコミによる報道や他機関での公開講座等への実績を「研究者情報」で公表できるよう改修した。
	③インターンシップ報告書のオンライン化	学内グループウェア「moodle」を利用することで、インターンシップ報告書のオンライン化を実現した。利用者の利便性向上、回収数の向上に繋がった。
	④財務会計業務の電子化	財務会計システムの基幹部分の一部に電子決裁を導入し、書面・押印・対面での業務に効率化が図られた。また、伝票作成、ファイリングに要していた時間の約 1 割を削減できた。
	⑤施設事務の電子化	「オープンラボ使用許可申請書」、「施設・電話関係要求書」、「経費差引調書」を電子化したことにより、紙媒体での決裁、及びファイリングにかかる約 25 時間の業務量削減ができた。
	⑥一般選抜の入試成績開示申請のオンライン化	書面受付での入試成績開示申請（一般選抜）をインターネット出願システム上で行えるように改修した。これにより、通知書発送業務にかかる約 48 時間分の業務量削減見込みとなった。
	⑦オンライン・ストレージサービスの導入	オンライン・ストレージサービスを各課にて運用、OneDrive も利用を開始した。セキュリティ対策のもと機密性が高いもの、容量が大きいデータ等もオンライン上で共有可能となった。
	⑧RPA の導入	「Power Automate Desktop」を導入し、4 件の業務を RPA 化した。これにより、データ処理における人的操作ミスや、処理時間は最小限で収まり、約 10 時間分の業務量が削減された。
	⑨研究データマネジメント（RDM）の導入	国立情報学研究所の研究データ管理システム「GakuNin RDM」導入に伴い、博士論文に関連する研究データの適切な管理、及び大学への提出についてマニュアルを作成・周知した。
	⑩Microsoft Teams の活用	事務システム効率化プロジェクトチームの活動にあたり、「Microsoft Teams」を活用することで、オンライン会議や資料の共有等が可能となり、コロナ禍でも十分な活動ができた。
	⑪給与明細のペーパーレス化	本人同意のもと、令和 4 年 9 月給与より給与明細のペーパーレス化を実現した（対象者約 8 割が同意）。紙媒体での配付と比べ、印刷コスト、及び配付に要する人的労力を削減できた。

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<div data-bbox="185 435 826 585" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>評価指標に関する目標値・達成水準【25-1】</p> <p>・改革方針に基づきデジタル化を行った業務数：10 件</p> </div>	<div data-bbox="887 217 2056 341" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>⑫年末調整のペーパーレス化 紙媒体時に要していた印刷・配付・記載確認等が、システムを利用することで省略され、作業時間約 51 時間の削減となった。なお、源泉徴収票も電子化し、委託費約 30 万円を削減できた。</p> </div> <div data-bbox="887 435 2056 547" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>評価指標に関する達成状況【25-1】</p> <p>・改革方針に基づきデジタル化を行った業務数：12 件</p> </div> <div data-bbox="887 588 2056 759" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>令和 4 年次総合評価室自己評価結果【25-1】：【ii】達成水準を満たしている (判定理由・補足等)：業務におけるデジタル化として目標値の「10 件」を超えて「12 件」の実績が確認でき、また、各課必要な業務を遂行しつつ、時間・経費・労力を削減できていることから、自己評価結果を【ii】と判定した。</p> </div>
<p><令和 4 年次計画【25-2】></p> <p>○ 大学構成員の情報セキュリティ意識を高めるための研修を実施する。情報セキュリティに関する規程・手順およびセキュリティポリシーの見直しを行い、必要に応じて改正する。</p>	<p><令和 4 年次計画【25-2】の実施状況></p> <p>(1) サイバーセキュリティ対策に関する取組 サイバーセキュリティ対策基本計画に基づく自己点検・評価を行い、コロナ禍の影響で 2 年間実施できていなかった新任職員研修内セキュリティ研修の再開や、基準を定めていた情報の格付けについて、令和 5 年度からの実運用に向けて調整を行った。また、文部科学省からの通知(令和 4 年 6 月 22 日付 4 文科高第 367 号「大学等におけるサイバーセキュリティ対策等の継続的な取り組みについて(通知)」)に基づき、サイバーセキュリティ対策基本計画の改定を行った。</p> <p>(2) 情報セキュリティ規程等の整備 情報セキュリティに関する規程・手順の見直しを行い、ウェブブラウザ利用ガイドライン及び情報発信ガイドラインを改定した。</p> <p>(3) 情報セキュリティ向上のための取組 教職員及び大学院生を対象に「研究不正行為防止及び情報セキュリティに関する研修会」を実施し 424 名の参加があった。講師は、令和 3 年度に引き続き、学外(IPA: 独立行政法人 情報処</p>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果
<div data-bbox="185 823 826 1090" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>評価指標に関する目標値・達成水準【25-2】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・サイバーセキュリティ対策基本計画に基づく取組状況の自己点検・評価及び評価結果に基づく改善：自己点検・評価を行い、評価結果に応じて適宜改善を実施。 ・情報セキュリティ研修開催数：2回 </div>	<p>理推進機構）へ依頼し、USB メモリ等による情報の持ち出しに注意する点など、最新の動向を踏まえた情報セキュリティ教育を実施した。また、研修会にてセキュリティポリシーやセキュリティ対策の実施状況に関するアンケートを実施し、教職員のセキュリティ意識の確認を行った。その他、責任者向けのオンデマンド研修として、情報セキュリティ講習動画を作成し Moodle に掲載した。</p> <p>新入生に向けた取組としては、必須科目「情報セキュリティ演習」の講義にてセキュリティ教育を実施した。また、学内イントラネットの「Moodle」内にセキュリティ入門講習の動画を保存し、動画視聴後に確認テストを実施する設定にしている。</p> <p>セキュリティ対策ソフト・インストール支援、貸出 PC (mac) の貸出については、この確認テストで 100 点取得を必須条件としている。令和 4 年度の確認テスト 100 点完了者の総数は 435 名に達している。そのうち、学部 1 年生は 351 名（今年度学部 1 年生全体 487 名中 72%が 100 点完了）であり、学部 1 年生の受講完了率が高まっている。大学院博士前期課程 1 年生は 32 名（大学院博士前期課程 1 年生 218 名中 15%が 100 点完了）である。</p> <p>そのほか、学生、教職員を対象に、標的型メール訓練を 2 回実施した。</p> <div data-bbox="891 823 2056 1145" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>評価指標に関する達成状況【25-2】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・サイバーセキュリティ対策基本計画に基づく取組状況の自己点検・評価及び評価結果に基づく改善：コロナ禍の関係で令和 2・3 年度実施しなかった新任職員研修内セキュリティ研修について、令和 4 年度より再開した。また、情報の格付けについて、基準は定めたが実運用に至っていなかったため、令和 5 年度から実施するよう調整した。 ・情報セキュリティ研修開催数：3 回（4 月：新任教職員研修、10 月：研究不正防止及び情報セキュリティに関する研修会、2 月：責任者向けセキュリティ研修） </div> <div data-bbox="891 1187 2056 1433" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>令和 4 年次総合評価室自己評価結果【25-2】：【ii】達成水準を満たしている</p> <p>（判定理由・補足等）：サイバーセキュリティ対策基本計画に基づき、自己点検・評価を行い、令和 5 年度からの実運用に向けて調整をしたことや、情報セキュリティ意識を高めるため、情報セキュリティ研修（新任教職員研修、研究不正防止及び情報セキュリティに関する研修、責任者向けセキュリティ研修）を実施し、研修回数について目標指標を達成したことから自己評価結果を【ii】と判定した。</p> </div>

中期計画／評価指標／年次計画	年次計画／評価指標の実施状況及び総合評価室自己評価結果

Ⅲ 予算（人件費の見積もりを含む。）、収支計画及び資金計画

※ 財務諸表及び決算報告書を参照

Ⅳ 短期借入金の限度額

中期計画別紙	中期計画別紙を踏まえ策定した年次計画	実績
1 短期借入金の限度額 11 億円 2 想定される理由 運営費交付金の受け入れ遅延及び事故の発生等により緊急に必要となる対策費として借り入れることが想定されるため。	1 短期借入金の限度額 11 億円 2 想定される理由 運営費交付金の受け入れ遅延及び事故の発生等により緊急に必要となる対策費として借り入れることが想定されるため。	なし

Ⅴ 重要な財産を譲渡し、又は担保に供する計画

中期計画別紙	中期計画別紙を踏まえ策定した年次計画	実績
○ 重要な財産を譲渡し、又は担保に供する計画 1. 重要な財産を譲渡する計画 ・東村山郊外園敷地の土地の一部（東京都東村山市萩山町三丁目 27 番 1, 2 号 4, 093 m ² ）を譲渡する。	○ 重要な財産を譲渡し、又は担保に供する計画 1. 重要な財産を譲渡する計画 ・東村山郊外園敷地の土地の一部（東京都東村山市萩山町三丁目 27 番 1, 2 号 4, 093 m ² ）を譲渡する。	東村山郊外園敷地の土地の一部（東京都東村山市萩山町三丁目 27 番 1, 2 号 4, 093 m ² ）を東村山市へ令和 4 年 4 月 21 日に譲渡した。

VI 剰余金の使途

中期計画別紙	中期計画別紙を踏まえ策定した年次計画	実績
<p>○ 毎事業年度の決算において剰余金が発生した場合は、その全部又は一部を、文部科学大臣の承認を受けて、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教育研究の質の向上及び業務運営の改善に充てる。 	<p>○ 毎事業年度の決算において剰余金が発生した場合は、その全部又は一部を、文部科学大臣の承認を受けて、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教育研究の質の向上及び業務運営の改善に充てる。 	<p>中期目標繰越積立金として、538,914,012 円の承認を受けた。うち、①退職手当として 42,697,087 円、②年俸制導入促進費として 3,434,318 円、③高速キャンパス情報ネットワーク整備事業として 101,847,048 円、④財務会計システム更新事業として 64,205,084 円、⑤学内カーボンニュートラル対応事業として 18,576,512 円、⑥換気設備設置事業として 39,197,688 円、⑦在宅勤務システム整備事業として 33,255,275 円を当事業年度に支出した。</p>

VII その他

(1) 施設・設備に関する計画

中期計画別紙			中期計画別紙を踏まえ策定した年次計画			実績		
施設・設備の内容	予定額 (百万円)	財源	施設・設備の内容	予定額 (百万円)	財源	施設・設備の内容	予定額 (百万円)	財源
<ul style="list-style-type: none"> ・ 文教育学部 1 号館改修 I 期 ・ 小規模改修 	総額 581	施設整備費補助金(527) (独)大学改革支援・学位授与機構 施設費交付金(54)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 文教育学部 1 号館改修 I 期 ・ 大学本館空調設備改修 	総額 545	施設整備費補助金(527) (独)大学改革支援・学位授与機構 施設費交付金(18)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 文教育学部 1 号館改修 I 期 ・ 大学本館空調設備改修 	総額 541	施設整備費補助金(523) (独)大学改革支援・学位授与機構 施設費交付金(18)

中期計画別紙	中期計画別紙を踏まえ策定した年次計画	実 績
<p>(注1) 施設・設備の内容、金額については見込みであり、中期目標を達成するために必要な業務の実施状況等を勘案した施設・設備の整備や老朽度合等を勘案した施設・設備の改修等が追加されることもある。</p> <p>(注2) 小規模改修について令和4年度以降は令和3年度と同額として試算している。</p> <p>なお、各事業年度の施設整備費補助金、船舶建造費補助金、(独)大学改革支援・学位授与機構施設費交付金、長期借入金については、事業の進展等により所要額の変動が予想されるため、具体的な額については、各事業年度の予算編成過程等において決定される。</p>	<p>注) 施設・設備の内容、金額については見込みであり、中期目標を達成するために必要な業務の実施状況等を勘案した施設・設備の整備や老朽度合等を勘案した施設・設備の改修等が追加されることもある。</p>	<p>注) 施設整備費補助金の示達額は(527)だったが、入札の結果、(523)となっている。そのため、実績計は(541)となっている。</p>

VII その他

(2) 人事に関する計画

中期計画別紙/中期計画別紙を踏まえて策定した年次計画	実 績
<p>学長の強いリーダーシップのもと、女性教員の採用や役職者への登用を積極的に行うとともに、クロスアポイントメント制度等を活用し人材交流の推進を図ることで研究者の多様性を高め、教育研究活動の活性化を図る。また、それら役職登用や人事交流その他諸施策と併せ、次代の大学経営に必要な人材を育成するための仕組み作りを行う。</p> <p>○ 全教員に占める女性教員の比率を、第4期中期目標期間平均で40%以上、教授職における比率を30%以上に設定する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;"> <p>関連する年次計画</p> <p>※ 前掲【18-1】参照。</p> </div> <p>○ クロスアポイントメント制度利用者数(本学採用者)を第4期中期目標期間終了時点で10名以上に設定する。</p>	<p>※前掲の令和4年次計画【18-1】、【18-3】、【20-3】、【21-1】、【24-4】参照。</p>

中期計画別紙/中期計画別紙を踏まえて策定した年次計画	実 績
<p>関連する年次計画 ※ 前掲【18-3】参照。</p> <p>○ 学長主導により策定する大学改革ビジョン・大学経営ビジョンに基づき、人事制度改革や次代の経営人材を養成するための仕組みと人材養成方針の策定を実施する。</p> <p>関連する年次計画 ※ 前掲【20-3】参照。</p> <p>○ 女性の役職者への登用及び人材養成を促進し、第4期中期目標期間における役職者全体並びに経営協議会委員に占める女性の比率を35%以上とする。</p> <p>関連する年次計画 ※ 前掲【21-1】参照。</p> <p>○ 定量的評価及び定性的評価（ピアレビュー）による教員個人活動評価結果を活用し、教員人事評価及び給与への反映を実施する。</p> <p>関連する年次計画 ※ 前掲【24-4】参照。</p>	

Ⅶ その他

(3) コンプライアンスに関する計画

中期計画別紙/中期計画別紙を踏まえて策定した年次計画	実 績
<p>「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン」や「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン」等を踏</p>	<p><令和4年次計画【その他6-1】の実施状況> (1) 研究不正・研究費不正防止に向けた取組</p>

中期計画別紙/中期計画別紙を踏まえて策定した年次計画	実績
<p>まえ、研究不正・研究費不正の根絶に向けた取組を行う。</p> <p>○ 学長のリーダーシップのもと、本学構成員の不正防止に対する意識向上と浸透を図るため、不正防止に関する基本方針、規程、計画等を周知徹底する。また研究倫理教育をeラーニング方式で定期的実施するよう制度化するとともに、有識者等による不正防止セミナーを実施するなど、コンプライアンス教育を推進する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>関連する年次計画</p> <p>令和4年次計画【その他6-1】</p> <p>○ 研究費不正に対する意識向上のため、研究不正行為防止ハンドブックを本学Webサイトで公開し、本学構成員も含めた学内外に対し本学の研究不正防止に対する取組を周知するとともに、本学構成員に対し「不正防止・情報セキュリティ研修会」を実施する。併せて、新任教職員の採用時には、「新任職員研修」をオンラインまたはeラーニング形式で実施し、予算執行ルール、研究倫理、不正行為防止等について教育を行う。また、科研費公募の際の説明会・研修会においても科研費の応募に関する説明等に加えて、研究者の責務や研究費不正などについてコンプライアンス教育を行う。</p> </div> <p>○ 監事は、不正防止に関する内部統制の整備・運用状況について大学全体の観点から確認し、意見を述べる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>関連する年次計画</p> <p>令和4年次計画【その他7-1】</p> <p>○ 監事は、内部監査部門である監査室が実施した外部資金等監査の計画・結果を確認するとともに、防止計画推進部署が策定する研究不正防止計画が適切に実施されているか等、不正防止に関する内部統制の整備・運用状況について確認し、役員会にて意見を述べる。</p> </div> <p>○ 内部監査部門である監査室は、監事及び会計監査人と連携を取り、効果的・効率的な監査を実施する。監査計画・結果等については学</p>	<p>実績</p> <p>研究不正に対する意識向上のため、研究不正行為防止ハンドブックの内容を更新し、令和4年度版のデータをHPに掲載した。併せて、新任教職員を対象とした「新任職員研修」を4月27日にオンラインで開催し、予算執行ルール、研究倫理、不正行為防止等について教育を実施した。</p> <p>8月にオンラインで開催した科研費説明会では、公募に関する情報だけでなく研究者の責務や研究費不正に関するコンプライアンス教育を含めて実施した。</p> <p>学長のリーダーシップのもと、本学構成員の不正防止に対する意識向上と浸透を図るため、「不正防止・情報セキュリティ研修会」を10月にオンライン開催で開催し、当日参加できなかった方のためにオンデマンド配信を行った。</p> <p>新たな啓発活動として、エルゼビア社の協力のもと若手研究者及び学生を対象とした論文投稿における研究倫理を含めた学内セミナーを1月に開催した。</p> <p><令和4年次計画【その他7-1】の実施状況></p> <p>(1) 監事監査計画の学内周知</p> <p>令和4年度監事監査計画については、本年度が第4期中期目標期間の初年度であること、及び令和3年2月に改正された「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン」において監事の役割が重要化されたことを踏まえ、重点監査事項として、(1)第4期中期計画の推進に向けた課題と運営方針、(2)公的研究費管理・監査のガイドライン改正を踏まえた体制整備の進捗状況を掲げ、令和4年5月27日の役員会において周知した。</p> <p>(2) 監事監査による研究費不正防止に関する内部統制の整備・運用状況の確認</p> <p>監事は、研究費不正防止に関する内部統制の整備・運用状況について大学全体の観点から確認をするため、令和5年2月に本学内部監査部門である監査室が実施した外部資金等監査(令和4年11~12月実施)の結果を確認し、また同月に令和4年度監事監査計画に掲げた重点監査事項「(2)公的研究費管理・監査のガイドライン改正を踏まえた体制整備の進捗状況」に基づき、研究コンプライアンス統括管理責任者である研究担当理事・副学長へのヒアリングを行った。</p> <p>外部資金等監査結果については監査手法が「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン(実施基準)」に沿ったものであること、不正防止</p>

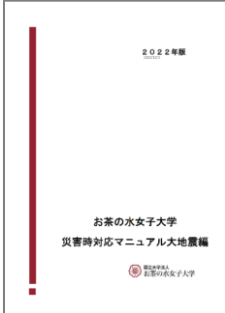

中期計画別紙/中期計画別紙を踏まえて策定した年次計画	実績
<p>内に周知するとともに、防止計画推進部署が策定する研究不正防止計画に反映させ、研究費不正が起きないように抑止・監視する。</p> <p>関連する年次計画</p> <p>令和4年次計画【その他8-1】</p> <p>○ 監査室は、内部監査の質向上を図るため監事及び会計監査人の意見等を踏まえて外部資金等の内部監査を実施し、その結果を翌年度の研究不正防止計画等に反映させる。また、監査室は研究費不正を抑止するため、学内に対し年度当初に内部監査計画を周知し、外部資金等の内部監査実施の通知及び実施後の結果を周知する。</p>	<p>推進部署である公的研究費等不正使用防止対策委員会が策定する研究不正防止計画を踏まえた監査であることを確認した。またヒアリングでは、前年度の規定等の整備に基づいた体制により研究費不正防止への対応が図られていること、及び前年度の監事監査で指摘した「研究費不正防止のための啓発活動の新たな取組」が行われていることを確認した。</p> <p>上記の一連の監査の結果については、令和4年度監事監査報告書における「監事の意見」としてまとめ、令和5年3月30日の役員会において学長へ報告している。</p> <p><令和4年次計画【その他8-1】の実施状況></p> <p>(1) 内部監査計画の学内周知</p> <p>令和4年度内部監査計画については、令和3年2月に改正された「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン」において、研究費不正根絶のため監事、会計監査人、内部監査部門の連携強化が強く求められていることを踏まえ、監事、会計監査人の指導・助言の下、当該ガイドライン及び本学の「不正行為防止計画」等に対応した監査を行うことを監査の方針として掲げ、令和4年4月22日の部局長等連絡会において周知した。</p> <p>(2) 外部資金等監査の実施</p> <p>外部資金等監査の実施に当たっては、令和4年10月7日の部局長等連絡会において、監査対象となる外部資金や、監査方法等を周知した。また、令和4年11月18日には、全教職員宛メールにて周知するとともに、その後、監査対象者へ個別の周知を行った。</p> <p>令和4年度は、科学研究費助成事業：33件（厚労科研4件含む、全体332件）、国立研究開発法人科学技術振興機構が作成する委託研究事務処理説明書に記載する対象事業：2件（全体11件）について、監査を行った。また、前年度の会計監査人との監査内容に関する意見交換を踏まえ、監査対象者の選定理由を示すなどの改定を行い、内部監査の質の向上を図った。</p> <p>監査結果として、「旅費に関わる研究費不正防止」及び「外部資金で雇用された特任教員のエフォート管理」について、改善・留意が必要であることを確認するとともに、令和3年度の監査で指摘した「請求書受領から支払いまでの乖離」及び「予算の適正な管理」が改善されていることを確認した。監査結果</p>

中期計画別紙/中期計画別紙を踏まえて策定した年次計画	実 績
	<p>は、「令和4年度外部資金等監査報告書」として取りまとめ、学長、監事等へ報告を行った。さらに、各教員に対して、個別の監査結果をフィードバックするとともに、公的研究費等不正使用防止対策委員会への報告を行い、公的研究費等の不正防止のためのPDCAサイクルを効果的に機能させた。</p> <p>なお、監査結果の概要については、その他の内部監査（法人文書管理監査、個人情報管理監査、情報セキュリティ監査）の結果と併せて、令和5年4月の部局長等連絡会において、全教職員に周知することとした。</p>

Ⅶ その他

(4) 安全管理に関する計画

中期計画別紙/中期計画別紙を踏まえて策定した年次計画	実 績
<p>○ 安全衛生管理計画を策定し、安全衛生管理体制を確立するとともに、安全衛生関係法令の遵守と必要な自主基準の設定を行う。また施設・設備の現状把握をもとに、危険・有害要因の除去を行う等、安全対策を実施する。さらに健康診断及びその他健康の保持増進のための措置を講じる。感染症対策についても新型コロナウイルス感染防止対策室を別に設置し、感染防止対策の検討及び感染者発生時の対応を行う。</p> <p>関連する年次計画</p> <p>令和4年次計画【その他9-1】</p> <p>○ 安全衛生管理計画に従い、設定した基準により安全対策を実施する。また、新型コロナウイルス感染防止対策室において引き続き学内感染の防止・啓発活動を行う。感染症対策についても国内外又は都内の新型コロナウイルスの感染状況に応じて対策を検討・実施する。建設設備点検における改善計画に基づき、計画的に不良箇所を整備する。学内定期点検を行い、危険箇所等をチェックし、学内環境整備改善方法を検討する。</p>	<p><令和4年次計画【その他9-1】の実施状況></p> <p>令和4年度安全衛生管理計画を策定し、同計画に基づき、毎月の衛生委員会の開催、職場巡視、安全衛生管理チェックシートの作成、一般定期健康診断・特殊健康診断、ストレスチェック、雇入時健康診断、インフルエンザ予防接種、附属学校給食従事者を対象とした腸管細菌検査・ノロウイルス検査、特定化学物質、有機溶剤を取り扱う屋内作業場を対象とした作業環境測定等の安全対策に係る取組みを実施した。</p> <p>新型コロナウイルス対策では、新型コロナウイルス感染防止対策室において東京都の感染拡大状況や政府の方針等に対応した対策を検討・実施し、感染の拡大の防止を図った。また、東京都のPCR検査（モニタリング検査）に14回協力した。</p> <p><令和4年次計画【その他10-1】の実施状況></p> <p>防災計画に基づき、4月25日に学生及び教職員を対象とする避難訓練・安否確認訓練を実施した。避難訓練の参加者数は718名（学生601名、教職員117名）に及び、参加学生の1割程度は音羽館に居住する学生であった。また、安否確認訓練の報告率は令和3年度実績と比べ、全体で上昇した。</p>

中期計画別紙/中期計画別紙を踏まえて策定した年次計画	実 績																				
<p>○ 今後発生が想定される自然災害に備え、学生・生徒・児童・園児の保護を最優先の目的として、お茶の水女子大学防災計画の適切な運用を行う。具体的には、教職員に対して、防災教育・訓練などを毎年度実施すると共に、実施結果をもとに防災関係マニュアルの点検を行っていく。</p> <p>関連する年次計画</p> <p>令和4年次計画【その他 10-1】</p> <p>○ お茶の水女子大学防災計画に基づき、学生・生徒・児童・園児・一般教職員向け訓練を実施する。災害対策本部及び自衛消防隊向け訓練を適宜実施する。</p>	<table border="1"> <thead> <tr> <th data-bbox="1070 260 1261 304">区 分</th> <th colspan="2" data-bbox="1261 260 1778 304">安否確認訓練 報告率</th> <th data-bbox="1778 260 2056 304">備考</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="1070 304 1261 384"></td> <td data-bbox="1261 304 1525 384">今回 (R4. 4. 25)</td> <td data-bbox="1525 304 1778 384">前回 (R3. 11. 2)</td> <td data-bbox="1778 304 2056 384">R3 実績との差</td> </tr> <tr> <td data-bbox="1070 384 1261 429">学 生</td> <td data-bbox="1261 384 1525 429">87. 61%</td> <td data-bbox="1525 384 1778 429">81. 82%</td> <td data-bbox="1778 384 2056 429">+5. 79%</td> </tr> <tr> <td data-bbox="1070 429 1261 474">教職員</td> <td data-bbox="1261 429 1525 474">91. 77%</td> <td data-bbox="1525 429 1778 474">94. 44%</td> <td data-bbox="1778 429 2056 474">-2. 67%</td> </tr> <tr> <td data-bbox="1070 474 1261 512">全 体</td> <td data-bbox="1261 474 1525 512">88. 49%</td> <td data-bbox="1525 474 1778 512">84. 46%</td> <td data-bbox="1778 474 2056 512">+4. 03%</td> </tr> </tbody> </table> <p>9月には、災害対策本部・自衛消防隊の訓練講習をオンラインで実施（参加者約90名）、消防設備の使い方等を映像・写真・図を用いて確認した。また、当日参加できなかった方向けにオンデマンド配信を行った。</p> <p>防災教育・訓練を行う他、マニュアルの改定や消防・防災計画の改正を行い、令和5年度防災教育・訓練の実施計画を作成した。</p> <p>なお、附属学校園においても、避難訓練をはじめとして各附属学校園に合った内容の防災訓練を実施した。</p> <p>学外での取組としては、9月8日に開催された小石川消防署主催の自衛消防訓練審査会に本学から2チームが参加し、「みがかずば自衛消防隊」は準優勝、「微音自衛消防隊」は小石川防火管理研究会会長賞のダブル受賞となった。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: flex-end;"> <div data-bbox="1223 948 1447 1262" style="text-align: center;">  <p>▲『災害時対応マニュアル 大地震編（表紙）』</p> </div> <div data-bbox="1541 956 1951 1246" style="text-align: center;">  <p>▲『自衛消防隊講習資料（抜粋）』 （オンライン研修）</p> </div> </div>	区 分	安否確認訓練 報告率		備考		今回 (R4. 4. 25)	前回 (R3. 11. 2)	R3 実績との差	学 生	87. 61%	81. 82%	+5. 79%	教職員	91. 77%	94. 44%	-2. 67%	全 体	88. 49%	84. 46%	+4. 03%
	区 分	安否確認訓練 報告率		備考																	
	今回 (R4. 4. 25)	前回 (R3. 11. 2)	R3 実績との差																		
学 生	87. 61%	81. 82%	+5. 79%																		
教職員	91. 77%	94. 44%	-2. 67%																		
全 体	88. 49%	84. 46%	+4. 03%																		

Ⅶ その他**(5) 中期目標期間を超える債務負担**

中期計画別紙	実 績
なし	なし

Ⅶ その他**(6) 積立金の使途**

中期計画別紙	実 績
<p>○ 前中期目標期間繰越積立金については、次の事業の財源に充てる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 高速キャンパス情報ネットワークの整備 ② 財務会計システムの更新 ③ 湾岸生物教育研究所飼育実験棟の新営 ④ 学内カーボンニュートラルへの対応 ⑤ 附属小学校及び共通講義棟1号館換気設備の設置 ⑥ 文教育学部施設改修に伴う移転・設備費 ⑦ 在宅勤務システム整備 ⑧ その他教育、研究に係る業務及びその附帯業務 	<p>※第4期中期目標期間の4年目終了時評価（R8.6 文部科学省提出予定）の際に記載する。</p>

Ⅶ その他**(7) マイナンバーカードの普及促進に関する計画**

中期計画別紙/中期計画別紙を踏まえて策定した年次計画	実 績

中期計画別紙/中期計画別紙を踏まえて策定した年次計画	実 績			
<p>○ 広報活動等を通してマイナンバーカードの普及促進に寄与する。</p> <table border="1" data-bbox="203 261 1023 381"> <tr> <td data-bbox="203 261 1023 304">関連する年次計画</td> </tr> <tr> <td data-bbox="203 304 1023 347">令和4年次計画【その他 11-1】</td> </tr> <tr> <td data-bbox="203 347 1023 381">○ 適宜マイナンバーカード普及の啓発活動を行う。</td> </tr> </table>	関連する年次計画	令和4年次計画【その他 11-1】	○ 適宜マイナンバーカード普及の啓発活動を行う。	<p><令和4年次計画【その他 11-1】の実施状況></p> <p>学内掲示板（ポータルサイト含む）にてマイナンバーカード関連の情報を適宜掲載することで普及の啓発活動を行った。また、現状把握のため全教職員に対して取得状況調査を行った。</p>
関連する年次計画				
令和4年次計画【その他 11-1】				
○ 適宜マイナンバーカード普及の啓発活動を行う。				

Ⅷ 前年度までの経営協議会における評価を踏まえて改善・向上させた取組

※ 評価指標【S24-2】（p.88 参照）において、「経営協議会委員である民間企業、大学関係等各界の外部有識者による評価を毎年度実施し、報告書等により改善状況や法人経営への活用状況を公表」することを掲げています。これを踏まえて、前年度までの経営協議会における評価を踏まえて改善・向上させた取組等を以下に記載します。

（対応の進捗状況については、令和5年6月時点。ただし、対応済の事項については、完了した年月を表に記載しています。）

改善・向上について提言を受けた事項			対応状況		関連計画・ 評価指標
年 月	内 容	根拠となる 計画・報告書	内 容	対応の 進捗状況	
令和5年3月 経営協議会	・令和5年次計画について、全体的に評価指標に関する年度ごとの目標値を設けて、中期目標及び計画を定量化・可視化したことが高く評価できる。	令和5年次 計画	・令和5年度以降に実施する年次計画に対する外部評価では、評価指標の達成度を評価の観点の中心とすることとして、第4期中期目標期間における評価方法の構築に活かした。【令和5年6月】	<input type="checkbox"/> 検討中 <input type="checkbox"/> 対応中 <input checked="" type="checkbox"/> 対応済 （令和5年6月）	【S24-1】 【S24-2】
令和5年3月 経営協議会	・事務の高度化に関する取組について、年次計画に反映いただきたい。また、その際には他大学の優れた取組事例等も参考にしながら、取組を進めていただきたい。	令和5年次 計画	・事務の高度化に向けた提言について、令和5年次計画の実施状況を踏まえた今後の年次計画への反映や、法人運営への活用について検討していくこととした。【令和5年6月】	<input checked="" type="checkbox"/> 検討中 <input type="checkbox"/> 対応中 <input type="checkbox"/> 対応済	【S20-3】

以 上